れと今ま一つは此の年にあつた相國寺の開山・普明國師の五百遠年諱の時ぢやつた。可憐いさうなものぢやつたよ。

確か不品行な坊サマがあつてサ、夜分になると、スーツと堂内を抜けて遊びに出掛けるぢや。さうして歸りには、裏門の脇の塀を乘越えては、夜の明け方に戻り〳〵したさうぢや。看門が夜巡りの度毎に見掛けるが、初めは見て見ぬ振りをして居つたさうぢやが、餘り度重なるので看門も見遁す譯には行かなくなつて、或時注意もしたが、根性の腐つた坊サマは悔悟する樣子もなかつた。ソコデ或夜のこと、其の坊サマが例の通り塀を乘越え、今しも内へ飛込んで來る處を、看門が警策でスツバリ遣つたのぢや。イヤハヤ脆いもので、とう〳〵落命して仕舞ふた。今時なら殺人罪ぢやなぞと云ふて大騒きぢやらうが、其の時はそれなりけりで事無く濟んだぢや。

全體佛道修行は命懸けでなくてはならぬのぢや。昔は活埋と云ふて、山門前に活埋めするなぞと云ふ罰策もあつたものぢや。是れは坊サマばかりぢやない。國民でも國家に役立たぬやうなものなら、矢ッ張り穴を堀つて埋めて仕舞ふが好い。又た埋められるが可厭なら、人らしい立派な行爲をせねばならぬぢや。其の意味でサ、骨折れば好いが、兎角ノラクラ者の坊主や醫者や神官や百姓や商人ぢやから、骨折りが少くなつた。勇氣の有る者がない。

其の時納は八幡から大衆三十餘名を率ゐて隨喜し、入室の師家を引受けた。それは中々盛んぢやつた。今ま彼れ程の參學者は無いなア。どうも叢林も近頃は香水の匂がするやうになつたから末路ぢや。喪身失命底の眞箇の修行者は無くなつたわい。

七〇　納は其の無功德を遺つた

山城の國へ寺を建てた——武帝と達磨との問答——三ヶ年間百方力を盡す——縣廳へお百度——弘濟寺へ引越す——山號を白崖山と改む——京都府知事北垣國道氏——得庵居士と鐵舟居士との書——滿手で栗の掴取りは駄目

納が四十六歳の時ぢやつたが、山城の國へ寺を建てた。それは前にも云ふた禪河山弘濟寺の再興ぢや。達磨が初めて支那へ渡つて來て、梁の武帝と相見すると、武帝は自慢たら〳〵で、

「朕、寺を起て僧を度す。何んの功德か有る。」

と問ふと、達磨はスツバリ、

「無功德。」

と云ふた。納は其の無功德を遺つたのぢや。

此の再興は丁度明治十一年に思ひ立つてサ、十四年の、エート五月十七日に着手してから三ヶ

年と云ふものは、百方力を盡して、公邊の手續やら、昔の檀徒との相談やら、何も彼も皆な一人の手ぢや。是れは矢鱈に他人手を借りたり、物强請をしたりしては、折角再興する衲の意志に反するから、ソレデ年月の費るのは詮ないことゝして、衲一箇の願心で遣つたのぢや。實にハヤ廢寺となると中々手數なものぢや。所謂赤脚にして霜雪を踏んだりサ、或は坊主頭を炎天に曝したりサ。さうして縣廳へお百度を踏んだので、官でも漸く許可して呉れて再興が出來た。在家の托鉢でも他人は賴まなかつたぞ。ソレデ荒地を拓いて寺持の山林田畑をも作り、什器なぞまでも一切整ふたのは十七年の六月頃のことぢやつた。

ソコデ檀家の者等が是非弘濟寺へ移つてとの懇請で、止むなく毛利家の家職に移董願を差出して許可になり、山口縣令原保太郎氏からも移董認可が下つたから、愈々弘濟寺へ引越しサ。七月十五日に落成式を兼ねて、入佛供養を行つたが、檀徒や法類の希望で、從來禪河山と云ふた山號を改めて、衲の室號を取つて白崖山と號することにした。處で當時の京都府知事北垣國道氏が此の再興に贊成して、自筆で「白崖山」と山門の額を書いて寄せられ、又た同大書記者尾越蕃輔氏は、「弘濟寺」と書いて寄せられたから、是れは玄關へ揭げることにした。それから東京の鳥尾得庵居士と山縣鐵舟居士とが、同じく「白崖窟」の額を送つて來たので、是れは書院や方丈へ揭げ

ることにした。何んでも願心があれば出來ぬことはない、兎角今時の者は、濡手で粟の摑取りと云ふやうなことを遣りたがるから駄目ぢや。衲のやうに身を粉にして遣つてみよ、寺の一つや二つは何でもないぞ。寺ばかりぢやない、在家の身代も左樣ぢや。願心のこと〳〵。

七一　庭詰で歎願すること一週間

妙心寺で基本財產——寺班金を以て等級を付ける——金さへ有れば赤い衣も黃い衣も——お師家さんでも小坊主より下——三十一名の師家代表——袈裟文庫の雲水姿——三度迄も却下——何百日でも此の庭は去らぬ——四度目に採用——派內の代議士

矢ッ張り其の年のことぢや。妙心寺で基本財產を造る初步として、寺班と云ふものを末派に布き、此の寺班金を以つて寺の等級を付けてサ、坊サマの位階を幾段にも分つことにした。ぢやから金さへあれば、赤い衣でも黃色い衣でも勝手に着られる譯ぢや。世の中が物質的になつて行くにつれて、斯う云ふことも出來たものかサ。昔は十乘の僧で無けらにや紫衣は着られなかつたが、此の寺班に依ると、十乘の人でも寺の等級が夫れ程でないと着られぬから、お師家さんでも金持の寺の小坊主よりも位階が下と云ふことになる。それぢや如何にも不都合ぢやと云ふので全

國三十一名の專門宗匠等が名利ではないが反對したのぢや。ソコデ其の師家代表者を誰彼と詮議した結果、とう〳〵衲と云ふことになつた。

本山の會議は十一月十五日からぢや。衲は寺班に就いての請願書を持つて（それには確か五ケ條かの意見が述べてあつた）、袈裟文庫、網代笠、脚袢に草鞋と云ふ扮裝、卽ち雲水となつて例の南天棒を提げ、大本山妙心寺へ登つた。

先づ評議口で評議員に請願書を提出したが許されぬ。ソレデ其の評席口で庭詰歎願すること一週間ぢやつた。其の間に三度までも却下せられたが、衲は例へ何百日にならうとも、此の請願書が許可になる迄は、飽く迄も此の庭は去らぬと決心してのことぢやから、何遍却下せられても、屈せず撓まず屢々歎願したぢや。スルト四度目であつたか、矢ッ張り評議員の前田誠節が出て來て、漸く其の主意を通ずることが出來たから歸つたが、彼の頃は元氣なものサ。物は遣り掛つたらトコトン迄遣らねば駄目ぢや。衲が强情に遣り切つたものぢやから、周防、長門、安藝の各寺から代議に選擧されたよ。衲も是れで、派内の代議士時代があつたぢやテ。

七二　今度こそ愈々時節到來

花園禪院選佛場——名ばかりの道場——勇み進んで上京——麻布の曹溪寺——繼新後東京に於ける初めての眞の提唱——俗人の參禪——東京は妙な處——「禪學隻手坑南所」——白隱の再來か——南天棒どころか妻揚子にも——卽時に入門——看板の爲めに眞の宗旨の人に逢へた

弘濟寺へ移つた翌年ぢやから、明治十八年、衲は四十七歳ぢやつた。管長の釋學さんから特使が來て、東京の花園禪院選佛場の監督して遣つてくれとのことぢや。此の選佛場と云ふのは、衲等が數年前に盡力した專門道場とは全く別なものぢや。あの專門道場か、殘念ぢやつたがあれは遂に物にならず仕舞ひサ。其の後本山の出張所みたやうにして設けたのが此の選佛場ぢや。併し折角設置しても、師家がない。久しく名ばかりの道場であつたのを、無學さんが其の師家に衲を選定したのぢや。衲もサ、前には不本意ながら京都へ歸つたが、今度こそ愈々時節到來ぢや。出張所ぢやらうが何んぢやらうが、そんなことには頓着せん。我が年來の願心たる輩殼の下に宗風を擧揚することが出來さへすれば好いと、大いに勇み進んでサ、白崖山の大衆を引連れ、東京の麻布なる曹溪寺へ乘り込んだ。

全體花園禪院は品川の東禪寺に在つたが、僧堂の方は曹溪寺に置かれてあつた。衲は九月二十五日に辭令を受けて曹溪寺に移ると、直に規矩を嚴にして僧堂の改革を謀つた。そして雪安居よ

り「無門關」を提唱して、翌年の春間に講了した。是れが維新後東京に於ける禪宗初めての眞の提唱ぢや。僧侶は二十名ばかりぢやつたが、其の他に官吏とか醫師とか學者とかの參禪する者も多くて、中々盛會ぢやつた。

それから是れは後の話しぢやが、東京は妙な處ぢやと思ふたよ。二十年の正月のことサ、衲が年賀に市中を廻ると、神田の今川小路邊と思ふたが、そこの唯ある家に、「禪學隻手指南所」と云ふ表看板が掲げてあるぢやないか。コリャ妙ぢや、白隱の再來か。何者が斯んな看板を出して置くかと思ふて訪ふてみると、何んのことかい、禪のぜの字も知らぬ者ぢや。

「隻手の聲とは如何か。」

と問ふても、

「イヤハヤ。」

とばかりで、何んの返事もないのには呆れたよ。衲は例の趙州の云ふた、

「七歳の童兒なりとも、若し我れに勝る者には、我れ卽ち伊に問はん。百歳の老翁なりとも、我れに及ばざる者には、我れ卽ち佗を敎へん。」

との素願ぢやから、彼の手の中を試んとして仕掛けたのぢやが、南天棒どころか、妻揚子にも

掛つたものぢやなかつた。ソコデ衲が、

「衲は禪學修行江湖道場の南天棒ぢや。」

と云ふと、彼は低頭して一句も出んぢや。併しそこに又た彼の取るべき點があつて、

「どうぞ今日から私を入門させて頂きたい。」

と出て來たから、衲も面白いと思ふて、

「そんなら通ふが好い。」

と許してやつた。其の後ち彼は熱心に修行して居つたが、國元へ歸つたので遂に印可にはならかつた。併し面白い看板もあつたものぢや。彼は、

「此の看板の爲めに眞の宗旨の人に逢へた。」

と云ふて喜んだが、又た、

「看板を出して五年も經つ中に、眞の坊サマは一人も出て來なかつた。」

と、却つて憤慨して居つた。それでも何も辨へぬ俗人の弟子が可成あつたのは不思議な位ぢや。

七三　初めて山岡鐵舟居士に逢ふた

一日も缺さず來た――趙州の無字祇麼に擧せよ――再犯容さず――居士は滿心の力を盡して工夫――室内難透の最初――各々團子を呑むぢや――修道の暇のない者は――地限り場限り――他では透つても此處は透らぬ――意氣相投じて道交倍々密――衲を補佐して禪道の擧揚

前に云ふた衲が曹溪寺で「無門關」を提唱した間、一日も缺さず來たのが山岡鐵舟ぢや。初めは衲も知らなんだ。以前は只だ書信の取交せのみで、逢ふたのは是れが始めてぢやから。

一日山岡が入室したので、

「大慧の云く、趙州の無字祇麼に擧せよ。」

と遣つた。處が山岡は行き詰つた。衲は、

「サー何時もムームーでは透らぬぞ。再犯容さずぢや。どうぢや！！。」

と切り込んだ。此の拶所にも一寸困つた。日用底ぢやが透らなんだ。ソコデ山岡は滿心の力を盡して工夫したものぢや。是れがサ、「無門關」で山岡が室内難透の最初ぢやつた。

此の次ぎに引ッ掛つたのが。

「無字を見て怎麼とする。」

と云ふ問題ぢや。人天濟度の爲めぢや位は誰れでも遣るが、「サー人天を如何濟度するか」と云

はれると、各々團子を呑むのぢやテ。鐵舟もサ、理窟は能う知つて居つたから、「人天ともに無字を見るべく發心せしむるぢや」位は云はうが、それならば若し命旦夕に迫つた者で、修道の暇のない者は如何ぢやかサ。茶に逢ふては茶を喫し、飯に逢ふては飯を喫し、生に逢ふては全く生き、死に逢ふては全く死す。此の間に餘念がない。此處は大事な處ぢや、實にハヤ室内の祕訣ぢや。白隱は之れを「地限り場限り」と唱へられた。併し斯んなことでは人天の濟度は出來ぬ。此の南天下は如何して〳〵。鐵舟も長德の陋翁や龍澤の星定や其の他では透つたが、衲の處では中々骨ぢやつたので、一日一夜も怠らず入室參禪して、最も勇猛ぢやつた處から、意氣相投じ、道交倍々密なるを加へた。ソコデ山岡も衲も補佐して禪道を擧揚せんことを誓はれたのぢや。

七四　曹溪寺の退山の句が崇る

山岡も眞正の見解を磨き出す――市ヶ谷道林寺を遷佛道場――勤王家たる戸田家――禪的修武の精神が喪はれた――鐵舟居士の腹案――篠突く雨の中を退山――巢窟狐狸の地――公案圓かならず――轉句の爲め鐵舟居士等の骨折り

山岡もとう〳〵南天棒下の「無門關」に依つて眞正の見解を磨き出した。ソレデ専門道場設置も六貫成で、一日も早く設立したいと希望して居つたが、専門道場の方は邪師等の我利我慢か

ら綾擬が絡えず、とてもものになりさうもないので、山岡は自分で一つの寺を手に入れたぢや。

其の頃牛込の市ヶ谷に、元と宇都宮の戸田家の寺で、道林寺と云ふがあつたが、維新の變動で荒れ果てた處へ、住職がヒドイ男ぢやつたから、石段までも失くして仕舞ふたさうナ。其の寺を山岡が戸田家に話して貰ひ受け、そこへ禪堂を設けて僧侶は勿論、在俗の人をも參禪させたいとのことぢや。

全體此の道林寺は大昔は赤坂の一ッ木に在つて、瑞龍山大休院と稱して廢寺同樣であつたのを、戸田因幡守忠能公が再興して瑞光山道林寺とし、牛込の市ヶ谷へ移轉したのぢや。處で此の道林寺を山岡が貰つたと云ふは妙なやうぢやが、山岡は戸田家に取つては非常な恩人ぢや。それが如何ならばサ、元來此の戸田侯は聞えた勤王家で、歴代山陵の荒廢して判明せざるを歎いて、蒲生君平等をして其の取調に從事させた位で、孝明天皇から御鏡を賜つたことがある。其の御鏡は道林寺へ納めたが、今は松島の瑞巌寺へ預けてある。處が此の戸田家は祖先から負債が多くて、償却の途がないのを、山岡さんが心配して、自分で徳大寺さんの處へ行き三千圓の金を借りて、此の勤王家の家を救ふたぢや。夫れ是れで道林寺が廢れ掛つて、祖先の茶湯も出來兼ねる有樣を山岡が見て、矢ッ張り勤王家の先考先妣の廟處を荒廢させまいと思ふ處から、玆に道林寺の再興

を引受けると共に、選佛道場を設けることにしたのぢや。

山岡の腹案と云ふのは、御維新と共に劍道が廢れ、隨つて武士道と云ふが失くなり、君臣の節義も父子の孝道も自然と顧みられない。それでは國家を危ふするものぢやから、此の際是非國民に修行させ、我國特有の禪的修武の精神を回復したいと云ふのぢや。ソレデ衲に道林寺へ移つて諸人を提撕してくれとの話ぢや。衲も山岡の腹の中は能く知つとるものぢやから、諾、行らうと、其の言葉に從つて移ることにした。

其の時は雨安居で、「毒語注心經」を提唱中ぢやつたから、其の講了の日に曹溪寺の僧堂を退山した。其の日は折惡しく大雨で、篠突くやうな降り方ぢや。其の中を大衆は雨笠に雨合羽と云ふ扮裝で引上げたが、衲は退山の偈を斯うやつた。

「來るも亦た緣去るも亦た緣、來々去々因緣に任す。豈に圖らんや巣窟狐狸の地、心に住する所無く未だ緣を了せず。

別別

櫛櫟橫に擔つて人を顧みず、直に千峰萬峰に入り去る。」

と。「狐狸」とは邪禪師等がゴタ〳〵云ふから遣つたのぢや。是れも衲が元氣ぢやつたからぢや

が。公案聞ぢやないのであつたと、後では思ふたよ。此の轉句が祟つてサ、山岡も鄧茵和尚も大層骨を折られたよ、イヤハヤ慚愧々々。

七五　衲は自讃他毀ぢやない

曹溪退山の悪口位は朝飯の茶の子――心中の涙を知らぬ――公案貰ひや提唱聽きに動きが取れぬ――終南山の猿　袈裟を盗んで坐禪――尾の爲め――何んぞと云へば指の一本――千古の祖師の心印が何んで解るか――衲の悪口は有所得の悪口ぢやない

併しサ、曹溪退山の轉結の二句が悪口位は朝飯の茶の子ぢや。衲は自讃他毀ぢやない。衲の云ふことが世間の智識共に解らぬのぢや。知識株に入つた者等も、衲の云ふことを悪口とのみ思ふてけつかる。心中の涙を知らぬ。矢ッ張り無眼子ぢや。江戸ッ子で鼻息は荒いが臍の下が決つて居らぬぢや。

衲が鎌倉々々と云ふと、悪口ぢやと云ふが、鎌倉へ通ふたと云ふて衲の室内へ來る者を見ると、皆な公案の講釋をしたり、誰れの提唱が好いの、彼の室内が好いのと、公案貰ひや提唱聽きで悟つた振りをする。そんな半可な智識に參ずる青書生等は、何んぞと云へば直に指の一本も竪てゝ

みたりする。そんなことで何んになろかい。畢竟邪師等から字面の講釋や繪解を聞くものぢやから、悟りとは彼んなものぢやと早合點して、直に眞似をする。眞似た悟りが何んの役に立つか。眞似は猿でもする。

昔支那で、一人の僧が終南山に隱遁して居つたさうぢや。或時袈裟が見えなくなつたので、尋ねたが見當らぬ。スルト猿の奴が其の袈裟を盗み居つてサ、麗々しく自分の身に着けて岩の上で坐をして居たさうぢや。そして岩の下にも他の猿が澤山、其の眞似をして坐禪して居たと云ふことぢやが、そんな猿禪や狒々禪ぢや眞正の見解は得られぬ。ぢやから野狐禪師でなければ螺斗禪師のみぢや。螺斗と云ふ奴は手足が揃つて、如何にか斯うにか獨立ちが出來ると思ふと、まだ〳〵尻に尾があるぢや。尾の爲めに動きが取れぬ。そんな者等が宗匠ぢやの師家ぢやのと云ふから、今ま一ト息ぢやと思ふて云つてやる衲の言葉が解せぬぢや。仕方がないテ。南天棒の腹さへ面の當り見得ぬ者がサ、千古の祖師の心印が何んで分明するかい。ソコデ衲が打つて〳〵打つたものぢやから、衲の方では何んとも思ふては居らぬが、大分世間では衲のことを悪口云ひぢやと云ふてぢやさうナ。衲の悪口には有所得の悪口なぞは少ともないぞ。サー各々悪口が云へるまで眞實になれ。

七六　酒五升と握飯と澤庵漬とで晋山式

道林寺へ入山――鐵舟居士の先達――是れは又た話以上――破れ觀音堂が一つ――疊は二疊だけ――間に合せにヒゞ燒茶碗――晋山の句――毎日米五升と酒一升づゝ――彼も酒は好き――議論も條理が立つて居つた――四方に簾を吊した中で接心

衲が四十八歳（明治十九年）の九月二十六日に麻布の曹溪寺を退き、二十餘名の大衆を引率して、山岡鐵舟居士の先達で大雨の中を市ヶ谷の道林寺へ入山した。今時は何處の僧堂も華美になつたが、衲等が修行時代から明治の始めへ掛けては、何れもお粗末千萬ぢやつた。道心さへ堅固であれば、坐禪の道場なぞは如何でも好いぢや。昔は樹下石上とさへ極つて居つた位ぢやもの。處がサ、此の道林寺ぢや。荒寺であるとは前から承知して居つたが、實際來て見て驚いたぢや。是りや又た酷い。二間半に四間の觀音堂しかない。それも壁は落ち戸は破れ、無論大雨漏りと云ふ始末で、外にをるも内にをるも變つたことはない。ぢやから疊なぞも皆なボロ〳〵に腐つて、僅か二疊しか役に立たんぢや。併し二疊だけでも役に立つのは、まだしもの見付け物かサ。

サー此の破れ寺へ入ると、四谷の山岡家から五升樽に一杯の酒と、握飯をドッサリ、それに鹽の辛い澤庵漬を添へて持たせて寄した。併し酒はあつても飲む器がないので、有合せの持鉢で飲

んでをると、山岡の義弟の石坂周造が四谷の通りへ行つて、ヒビ燒茶碗を買つて來たから、それで茶湯も茶禮もすることにして、取り敢へず晋山の句を擧して、天皇陛下の聖壽萬歳を祈つた。其の時の句は斯うぢや。

「大道元來平かにして砥に似たり、寸歩を移さず猊床に據る。白崖幸に鐵舟の在る有り、時に波瀾を捲いて瑞光を放つ。

別別

三千の劍客今ま何にか在る、獨り許す莊周太平を致すを。」

と擧し終つて大酒禮に移り、天曉に迄及んだ。

山岡も金は無かつたがサ、毎日々々道林寺へ米五升と酒一升づゝを携へて來ては、大衆を鞭達し、居士や青年士官等を激勵して入室もさせ、又た自分も少しでも暇があれば入室した。彼も酒は好きであつた。飲めば倍々勇氣が加つて來て、議論なぞをさせても中々條理が立つて居つたよ。ソレデ山岡は如何も四方に簾を吊した觀音堂の中で接心を遣つて居つた。

七七　衲が問答に負けたら校合する二

十月五日の達磨忌――三十年間に一切經を寫出――未だ校合の師がない――五時八教直下に書寫――我は三十年を期せん――ウンさうか宜しい――いつも棒喝の行下――互に組んづほぐれつ――何か喧嘩でも爲てか――遂に五位の調べも濟む――一刀流を無刀流を改む

十月の五日は初祖忌ぢや。先づ開單を兼ねてと云ふ意味で達磨忌を修つた。當日は山岡もやつて來て入室が濟むと、山岡が衲に向つて、

「私は今後三十年間を期して「一切經」を寫生しやうと決心してをるが、まだ校合の師を得ない。誰れを賴んでも引受けてくれぬ。誠に遺憾の次第ぢや。どうか校合の爲て呉れ人はないだらうか。」

と云ふから、衲は、

「今ま衲と問答して、若し衲が負けたら校合してやらう。」

と云ふて、直にサ、山岡の胸倉を捉へて、

「其の願力、廣大無邊なり。何んぞ三十年を期せんや。揮毫點一點すれば、卽ち已に是れ、大小半滿、五時八教、直下に寫生し畢んぬ。豈に徒に恒沙を數ふることを爲さんや。サー道へ〳〵。」

と問ふた。スルト山岡は微笑しながら、

「好い哉、師の言。是なることは是なりと雖も、我は只だ三十年を期せん。」

と云つて動かなかつた。更に語を續いで、

「願くは老師、我が爲めに校合の勞を取られんことを。」

と云ふから、衲は、

「ウンさうか、宜しい。」

と、之れを諾した。ソレデ爾來毎夜子の刻になると校合に從つた。其の原本は芝の增上等の藏經ぢや。

處で山岡の日課とも云ふべきは、自分の擊劍の道場で朝の稽古が終ると、直に揮毫ぢや。それが毎日二百枚位書く。それが濟むと衲の處へ遣つて來て入室をする。それから宅へ歸つて寫經をする。斯うして一日が終るのぢや。時には衲が山岡家を訪ふて入室を聽くこともあるがサ、いつも棒喝の行下で、家人や書生等の驚くことが多い。一度なんぞは臨濟麻谷、賓主互換の商量其の儘で、互に組んづほぐれつした。衲も其の頃は力が强かつたから、劍客の山岡を靠倒してサ、障子の骨をヘシ折つたので、奥さんの英子さんが、何か喧嘩でも爲てかと覗きに來られて、とん

だ大騒ぎをしたことがあつた。

斯う云ふ風ぢやつたから、山岡の修行は日々に其の妙域に達して、遂に五位の調べも綿密に濟ました。それが濟んだ時ぢやつた、山岡は劍法の一刀流を無刀流と改めた。是れは全く衲の室内で五位の再調の結果ぢや。

七八　鐵舟居士と金玉均と書法の大議論

六疊を本單三疊を居間　寒風肌を擘く　墓所の石の上で趺坐——雨の時は傘を差掛ける——會下の名士——書問答——大衆無語——金玉均が鐵舟居士の能書を知る——書法に就いて大議論——「禪劍一致」の額——飛禪國高山の宗猷寺

臘八が來たが、例の觀音堂一字ぢや如何することも斯うすることもならぬ。兎に角六疊を本單とし、三疊を居間とした。前にも云ふた通り、堂内は壁もなければ障子もない。四邊から吹き込む風や雪を防ぐものは何一つない。只だ筵を吊し、菰を布いて疊に代へる位で、實に寒風肌を擘くぢや。多少ともに信施はあるが、中々供果に追はれるぢや。ソレデ雲衲や居士等は、戸田家の墓所や亂塔場の石の上へ僅かなものを布いて趺坐する。又た雨や雪なぞその時は石碑に傘をもたせ、差掛を使つて坐つてをると云ふ始末ぢや。それが一人や二人ぢやない、五十餘名であつた。俗人

の方は山岡居士が筆頭で、橋本伯、宗子爵、大庭寛一、平沼麒一郎、別府金七、それから岩田周作と云つた金玉均等が重なるもので、其の他、士官、幼年兩學校の教官や生徒、又た帝國大學の生徒なぞも來た。

衲は其の時、「毒語注心經」の提唱をして居つたが、大衆に向つて或時問ふた。

「鐵舟居士尋常能く數百枚の書を書き得。筆を擊碎し紙を裂破して、甚麼邊の事をか書かん。」と。スルト大衆は無語ぢやつた。此の時にサ、金玉均が初めて山岡の能書を知つて、面會したいと云ふから、衲が金を山岡の家へ遣つた。二人は書法に就いて大議論を闘はしたさうぢやが、肝膽相照して、金が「禪劍一致」と云ふ額を書いて山岡へ送り、山岡は後に其の額を飛驒國高山の宗猷寺へ納めた。それには衲のことがちやんと書いてある。宗猷寺は山岡の兩親が郡代で在任中に死んだのを葬つた寺で、即ち小野朝左衛門高福の墓所のある處ぢや。

七九　陛下御座の禪床を設けて行幸を仰がん

德川時代の物は破壞——平等の中に差別——聖德太子の敬神奉佛——上下交々利を爭ふて國危し——軍人でも金が欲しくなる——人を度せんには先づ自己が——

大成寺の入寺發願の如く――天皇陛下に御參禪を御勸め申上ぐ――妙心寺雲院の御幸の間――玉川砂利を洗ふ――經文を一字一石――石を埋めた上に金剛座。

山岡が納に云ふのに、徳川時代の政策は根本から破壞されて行く。さうすると上下の區別が無くなつて、四民平等で好いやうぢやが、其の平等の中に矢ッ張り差別がなくてはならぬ。丁度推古天皇様時代に唐や三韓邊の文物が盛んに輸入せられたが、其の時には聖德太子が三寶を遵念せられて敬神奉佛のことを怠らず、ちやんと我が國民の依る處を教へられたが、今度の御維新は宗教に重を置かなくて、只だ教育の方面にばかり走るから、自然に道念が外にのみ專らにして、内は顧みない、それでは遂に利をのみ爭ふて、孟子の所謂「上下交々利を爭ふて國危し」と云ふやうなことになる。

併し是れは日本國民のみぢやなくて、世界一般が左様云ふ有様になるのぢやから、それを防ぐには人格の向上が必要ぢや。そして人格を向上するには禪的修養を經た武士道が一番ぢやが、今は其の武士道も失くなつて仕舞ふた。これから三四十年後には、軍人でも金が欲しくなるぢやらう。それと共に國民の思想と云ふものは大變化するから、それを未然に防ぐには禪の修行の外はない。此の修禪に依つて人格を向上させるのぢや。參禪は坊主ばかりの專有物とすべきぢやない。

どうか都鄙、老若男女の別なく、勸めて參禪させたい。是れが我が願心ぢや。併し人を度せんには先づ自らの人格を向上せしめねばならぬ。ぢやから我は死ぬ迄斯の道の修行は怠らぬ。老漢は天下の大和尚ぢや。一箇半箇の衲子を打出すれば足るなぞと云ふことでなく、和尚が大成寺の入寺發願の如く實行して欲しい。我れ必らず道林寺境内に御座の禪床を設けて、陛下の行幸を仰がんと平素語られた。

ソコデ山岡は、天皇陛下に御參禪を御勸め申上げんとしたが、それには先づ第一、御座所がなくてはならぬと云ふので、京都花園の妙心寺内靈雲院に、後奈良天皇の行幸の間と云ふがあるのを其の通りに、瑞光山道林寺にも營造しやうと、山岡は自分の門人篠塚捨五郎に命じて、玉川から清淨な砂利を取り寄せさせ、それを大盥で洗はせては、一石に一字づゝ、「法華經」八卷を書いた。其の他にも「金剛經」と「心經」とを同じく一石一字に認めた。又た奥さんの英子さんも同様に齋戒沐浴して、「觀音經」を一石一字に書かれたものぢや。而して其を道林寺の境内に埋め、其の上に金剛の御坐禪所を建てやうと云ふのぢやつた。中々容易な願ぢやない。納は「一切經」の校合を終つてから、今の石字を一々に點檢した。寒中は隨分冷めたかつたよ。石を洗ふ者も嘸冷めたかつたらうぞい。

八〇　事實ちや通らぬとはヒヨンなもの

住職願に添付した履歴書――是れにや本山でも困つた――却下されて書き改む――漸く許可

山岡が主上陛下の御臨幸を仰がうと云ふ大願を起したので、衲も其の職に就いて山岡を助けねばならぬ。ソコデ道林寺の法類松泉寺住職藤好武溪から、明治十九年十月三十日に、衲を道林寺の住職とする願書を本山へ差出した。其の時衲に履歴を出せと云ふからサ、衲は履歴を書いたぢや。此の履歴にや本山でも困つたぢや。是れ迄類例のない天下一品で、とう〳〵却下サ、其の履歴と云ふは斯うぢや。

履　歴

山口縣下周防國都濃郡德山村六百九十貳番地居住
大成寺前住職
中原鄧州
四十七年七ヶ月

一、嘉永三年十月五日、肥前國下松浦郡平戸雄香寺住職麗宗長老ニ投ジテ祝髮受具
一、安政三年八月二日、山坂國綴喜郡八幡村圓福寺僧堂大徹法眼禪師石應大和尚ニ就テ道學研究スルコト二ヶ年

一、安政五年春間ヨリ、肥後國熊本見性寺僧堂神機妙用禪師蘇山大和尚ニ就テ禪學スルコト三ヶ年
一、萬延元年春間ヨリ、筑後國久留米梅林寺僧堂大綱正宗禪師羅山大和尚ニ就テ參禪スルコト八ヶ年
一、慶應三年春間ヨリ、筑後梅林寺僧堂無學大和尚ニ就テ專門禪修スルコト一ヶ年
一、明治元年初秋ヨリ、大本山妙心寺輪住鷄林大和尚ニ就テ侍衣スルコト一ヶ年
一、明治二年十一月十五日、妙心第一座ノ職ニ補セラレ、同年同月二十四日、毛利元蕃公菩提所大成寺ヘ入寺、晋山式執行
一、明治三年五月、大成寺塔頭澄泉寺ヲ建築シ中興開山トナル、同年三月、管内各宗ノ請ニ應ジテ寶鏡三昧ヲ提唱ス
一、明治四年十月、大成寺本堂及ビ新ニ選佛場ヲ創建シ、常在雲衲三拾餘名ヲ接得シ、臨濟錄ヲ提唱ス
一、明治五年六月、山口縣管内説教師拜命
一、同年十月、教導職試補拜命
一、同年同月、山口縣取締拜命
一、同年十一月、大德、妙心兩本山巡國議事拜命
一、明治六年三月、大成寺塔頭檪隱軒ヲ建設シ開祖トナル
一、明治七年十一月、無學大和尚、本山妙心寺ヘ轉住ニ付キ、筑後久留米梅林寺僧堂擔任命ゼラレ、一夏九旬、四來ノ雲衲貳拾餘名ヲ接得シ、無門關ヲ提唱ス

一、明治八年二月十一日、玉鳳塔主職拜命
一、明治八年十月、大成寺ヲ以テ檪隱軒ヘ合併命ゼラレタルニ付キ、本堂ヲ再建シ、中興開祖トナル
一、明治十年八月十日、權少講義拜命
一、明治十年十二月十七日、關無學管長ヨリ、關東ニ於テ專門大道場負擔者各々四名ヘ專使トシテ派出ヲ命ゼラル
一、明治十一年四月、專門道場開發擔當ヲ無學管長殿ヨリ命ゼラル
一、明治十一年七月十七日、本山專門道場事務擔任ヲ無學管長ヨリ命ゼラル
一、明治十一年七月二十三日、中講義拜命
一、明治十二年秋間ヨリ、翌十三年春間迄城州八幡圓福寺僧堂ニ於テ大衆ヲ接得シ、無門關ヲ提唱ス
一、明治十四年四月十八日、大講義拜命
一、明治十六年三月二十八日ヨリ、翌十七年秋迄城州八幡圓福寺ニ轉錫シ、四來ノ雲衲三十餘名ヲ接衆シ毒語注心經ヲ提唱ス
一、明治十七年五月十八日、大成寺住職辭表許可サル
一、同年十月十一日ヨリ、山城國相樂郡上狗村白崖山弘濟寺ヲ新ニ建築シ中興開山トナリ、雲衲五六名ヲ常在セシメ、切磋修行セシム
一、明治十八年九月二十五日ヨリ翌十九年九月二十六日迄、東京選佛場（曹溪寺內花開禪院）ヘ管一無學

大和尙代理ヲ被命、移董接衆、無門關ヲ提唱ス
右之通相違無之依テ保證仕リ候也

明治十九年十月三十日

東京府下赤坂區一ツ木町
松泉寺住職
法類　藤　好　武　溪㊞

此の履歷を提出したのぢや。處が敎務所から、是れでは不可ぬと却下になつたので、又た改めて書いて出すと、十一月二日に無學管長から、道林寺住職に任ずる命令が來た。ぢやから如何でも好いやうなものゝ、履歷としては此處へ載せた方が事實ぢやが、事實ぢや通らぬとはヒヨンなものよ。

八一　兒王もムツとしたらしい顏

子供の時分から中々オ子――軍人は禪を如何に扱ふべきか――此の蠶軍人め――背の上に跨り南天棒を振つて尻に一鞭――兒玉も思はず知らず馬になつて進む――分りました〳〵――乃木さんと初對面――兒玉さんが連れてゐて紹介――鄕里で逢はずに東京で逢ふ

兒王源太郎は山口の德山の者ぢやつたから、衲が大成寺に居つた頃時々遣つて來たがサ、子供

の時分から中々才子ぢやつた。所謂一を聞いて十を知ると云ふのぢやらう。ソレデ衲が道林寺へ移つてからは始終通つて、一心に入室したから、人の知らぬ間に無字も隻手も透つた。

或日遣つて來て入室して問ふのに、

「軍人は禪を如何に扱ふべきか。」

と云ふから、衲が、

「卽今三千の兵を使つて看せよ。サーそれが出來れば、戰つて勝たぬと云ふことはない。」

と云ふた。スルト兒玉は、

「目前に兵がないではないか、何を以つてか使ふことが出來る。」

と問ふから、衲が、

「そんなことは朝飯前の茶の子ぢや。最と易いとぢやのに、それが使へぬやうぢや將軍にはなれぬ。天下の將軍となつて萬卒を率ゐ、大戰をすることはならぬぢや。それしきの事が出來なくて、何處に將軍面がある。此の質軍人め。」

とやつたので、流石の兒玉も少しムッとしたらしい顏をして、

「然らば老師使つてみられよ。」

と云ふかも、

「諾、使ひ看ん。」

と、いきなり兒玉を捉へて引倒し、

「ソレ馬になれ。」

と云ふや否や、背の上に馬乘になつて跨り、南天棒を振つて、

「全隊進めッ。」

と、尻に一鞭當てた。スルト兒玉も思はず知らず前へ進んだがサ、此の衲の活作略には深く得る處があつたとみえて、衲を乘せた儘、

「解りました〳〵。」

と云ふた。衲が坐に就くと禮拜して、

「今日初めて此の境を見た。」

と云つて、非常に嬉んだものぢや。兒玉ぢやからこそ、直に此處が手に入つたのぢや。次で臨濟の四料簡も手に入つたぞ。彼が後年、籌を帷幄の中に運し勝を千里の外に決する端的は、實に此の作用から生れたのぢや。

それから乃木さんに逢ふたのも此の時代ちや。乃木さんも彼れ程の人とは、始めから一般に知れた譯ぢやなかつた。或日兒玉さんが例の通り遣つて來たと云ふから、

「サーお上り。」

と上へ通すと、兒玉さんが、

「今日は友人を一人連れて來ました。相見を願ひます。」

と云ふから、

「それは誰れか。」

と尋ねると、

「此の人です。長府の人で乃木希典と云ひます。以後宜しく願ふ。」

と云ふ紹介ぢやつた。此の時納は初めて乃木さんに逢ふたぢや。同じ山口縣でもサ、長府と德山とは小三十里も隔つて居るから、國にゐる頃は逢ふと云ふこともなかつたが、因緣と云ふは妙なもので、三十里以内にゐてさへ逢はぬものが、何百里外の東京市ヶ谷の道林寺の破れ疊の上で初相見とは不思議ぢや。其の時は山岡も其の他も熱心入室中ぢやつた。兒玉さんも無字の工夫中ぢやつたので、猫の額ばかりの處で入室をして、公案の商量があつた。其れ等を見て乃木さん

は兒玉さんと一處に歸られた。

八二　劍をすらりツと拔いて乃木さん目掛け

「四部錄」の提唱――兒玉邸からの使者――乃木さんがお尋ねしたいこと――總べて一絲紊れず――劔を以て御教示を願ふ――兩人眼々双對の眞中に――乃木さんの擬議――驚いて後退りつゝ逃げた――何處迄も追ふ――自今入室して研參――兒玉さんは泰然自若――靜の人と動の人と

明治二十年の雨安居には道林寺の道場で「四部錄」の提唱をやつた。大衆は雲納ばかり五十名もあつた。居士大姉は七八十名ぢやつたらう。坐る處がないから、皆な墓場で遣つて居つた。

此の年の、確か八月十五日のことぢやつたが、牛込藥王寺前の兒玉邸から使者が來て、今日の午後、納に來てくれいとのことぢやつたから、

「よし〳〵、行くと云へ。」

と使者を歸し、放散後に兒玉の處へ出掛けて行つた。

スルト座敷には主人の兒玉さんと、先日一度道林寺へ尋ねて來られた乃木さんとがをる。人事の挨拶が濟むと兒玉さんが、

「老師、今日は態々お呼立てして濟みません。實は道林寺の方へ伺ふべきぢやが、餘りお座敷が廣過き、何も彼も一ツ處で、どうも具合が悪いので、遂に御足勞を煩したが、實は此の乃木さんが少々老師にお尋ねしたいことがあると云ふから、どうか御垂誡を願ふ。」

との口上ぢや。ソコデ衲が乃木さんに向つて、

「サー〳〵、何んなりともお尋ねなさい。」

と云ふと、乃木さんは叮嚀に、

「宜しく願ひます。」

と云ふた。此の人は嚴格の人ぢやつたから、總べて一絲紊れずと云ふ處があつた。乃木さんは軈て腰に帶びた劍を取つて、

「拙者は武士ぢやから、何卒劍を以て御教示を願ふ。」

と云ふて、衲の膝の前にサ、乃木さんと兩人、眼々双對の眞中に置いたぢや。ソコデ衲は、

「此の南天棒は佛者ぢや。所謂出家兒ぢや。劍のことは無用ぢや。卽今將軍は如何に此の劍を使用するか。サー使ひ得よ、看ん。」

と遣つた。スルト乃木さんは擬議したから、

「若し將軍使ひ得ずんば、我れ使ひ得て看ん。」

と云ふなり、劍をすらりッと拔き、乃木さん目掛けて眞向に一ト打と振り冠つた。不意を喰つて、乃木さんは驚いて後退りつゝ逃げた。衲が何處までも〳〵と追ふた時、フト氣が付かれた乃木さんは、合掌禮拜して、

「解りました。自今老師の室に入つて、斯道を研參せん。」

と云ふた。衲は、

「それでは何時でも來るが好い。」

と、無字の一則を與へた。

兒玉さんは泰然自若と座敷に端坐して、此の商量を見て居つて、髯一本も動かさなんだ。此の靜の人と、衲の劍を振つた動の人とを目前に見て諦得した乃木さんは、其の晩から道林寺の道場へ通ひ出したのぢや。

八三　新江戸ッ子が皆んな參禪に來た

江湖道場になる迄は容易ぢやなかつた——人格の高尙な人が中心——山岡や勝は江戸ッ子の殘黨——東京人士に及ぼした感化——八百八町に蓍き渡る——今は高

名な人でも人が心服せぬ——熱誠がないから——嘘や子供に迄信ぜられぬ——そこへ氣の付かぬ天下の老臣

江湖道場を東京に置くには、一方ならぬ苦辛ぢやつた。現在は休會中ぢやがサ、道林寺の江湖專門道場と公稱する迄には、中々容易ぢやなかつた。忘れもせぬが、明治二十年の雨安居からは、在家の人々が皆な競ふて修行に來た。

何時の世、如何なる時代でも、人格の高尚な人が中心となつて、他の多くの人は總べて其の方へ引寄せられるものぢや。御維新後、薩長土の人士の中には、英傑な人、高名な人があつたが、江戸ッ子は多く討死して、山岡や勝や榎本あたりが其の嫡黨ぢやつたから、自然と此の人々の爲ることが、諸人の注意を引いのぢや。其の中でも山岡さんが誠忠無二にして、勤王奉公の念に厚いことは、普く世人の敬慕する處ぢやつた。ソコデ此の山岡さんが禪を修行して、外面の文明に備へる爲め内面の文明を養成しやうと企てたことは、深く新江戸ッ子の東京人士に感化を及ぼしたので、軍人は勿論、商人でも大工でも進んで入室したものぢや。

どうも今時は江戸ッ子がなくなつて來たから、自然に山岡さんのやうな高風を慕ふ者が段々少くなつて來たやうぢやナ。江戸土着の人が少いから、江戸ッ子の道德がないと云ふのかサ。山岡

さんの名は自然に昔の八百八町に響き渡つて、三ッ子でも鐵舟と云ふことを知つて、禪學の人、劍術の人、書を能く書く人として知らぬ者はなかつた、さうして皆な心服したが、今時には高名な人はあつても、心服するに足るべき人物がない。是れは山岡さんなぞのやうに、親切に腹の中まで造つてやらうと云ふだけの熱誠がないからぢや。只だ／＼表面だけの高名偉人ぢやから人が心服せぬ。此の頃になつては他人が心服せぬのみか、自分の嬶や子供等にまで信ぜられぬ偉人ばかりぢや。衲が道林寺にをる頃は、衲でも山岡でも、腹の中を造へることに骨折つたものぢや。坐禪をして精神を練り、やがて來る西洋の文明に對抗しやうとしたのぢや。今日の思想とは雲泥の違ひぢや。そこへ天下の老臣が氣が付かぬは困つたものぢやのう。

八四　愈々江湖道場の公稱を出願

禪學修行者の增加——公稱願ひ——鐵舟居士の親展書——花園禪院選佛場の閉鎖——曹溪寺の選佛場を移すが好い——素知らぬ顏をした管長の返書——山岡も首を傾げた

此の年の雨安居以來、禪學修行者は日々に增加するソコデ道場の公稱が必要ぢやと云ふので、愈々其の願書を出すことにした。其の願書は左の通りぢやが、今から思ふと妙ぢや。

江湖選佛道場公稱願

東京市牛込區市ヶ谷富久町八番地
直末　等外一等地　瑞光山道林寺

方今聖下、諸流學隆盛、就中外教ノ如キハ日新ノ功ヲ競ヒ、日一日ヨリ漫延シ、已ニ國會モ雜居モ亦タ寸隙ノ内ニアリ。然ルニ人々ノ自性ヲ修證シ、内部ノ文明ヲ以テ第一トスル吾等專門道場ニ於テハ、目下花園選佛場モ閉鎖ト相成リ、實ニ慨嘆ノ至リナリ。然リ而シテ客年以來、山岡鐵舟居士、夙ニ大ニ見ル處アリ、自ラ開基トナリテ江湖選佛道場ヲ開單ン、衆生ヲシテ各々自性ヲ修證セシメ、益々内部ノ文明ヲ企テシメントス。是ニ因テ當今聖下ノ形勢御洞察ノ上、何卒右寺ヲ以テ、永久皇國七僧堂ニ照準シ、江湖選佛道場公稱ノ議、速ニ御許可奉願候。就テハ當山寺班等ハ八幡圓福僧室ト同樣ニ奉願度　尚其他ノ件モ總テ他府縣下江湖道場等ニ御照準被下度、此段一同連署ヲ以テ奉願上候也

明治二十年十月九日

右寺住職　中原鄧州㊞
松源寺住職　右寺徒弟　天野巳恭㊞
桂林寺住職　同　大江宗孝㊞
松泉寺住職　同　藤好武渓㊞
以下五十八名連署

明治二十年十月九日

東京府取締　天澤文羅㊞
西條契巖㊞

・本山妙心寺管長闕無學殿

此の書面を差出すと共に、一方では山岡鐵舟居士から管長へ宛てゝ親展書を送つた。其の手紙は、

愈御安意大賀奉候。陳者東京道林寺禪學修行者も追々有是候に付ては於寺院贊成致し候間、同寺より願書差出し候に付き、江湖選佛道場容許可成樣於小生内願罷在得芳意度如是御座候也

十月九日　山岡鐵太郎

闕無學老師座下

處が其の頃種々な學校やら道場やら、名のみ有つて實行の伴はないものが澤山にあつた。それが紛擾が起つて現在花園禪院選佛場も閉鎖と云ふのであるから、それを其の儘にして置いて、一方に別なものの設立を許すと云ふことになると、花園選佛場の再興の時がないので、表向き其れとは云はぬが、道林寺を江湖道場にするなら、曹溪寺の選佛場を移すが好いと云ふ本山の役課の人の腹ぢやものだから、管長の無學さんが左樣とは云はず、素知らぬ顔をして、山岡へ返事を寄した。それは斯うぢや。

貴書拝閲。肇下道林寺を以て江湖選佛道場に許可候樣御内諭之趣き得其意、本派寺院は選佛道場なるは本より論を俟たざる義に候得共、維新之流弊、近來各地に種々名目を附くる學場設置するも、徒に空名のみにて成功を不見、慚愧の至りに候。自後新規公稱等許可不致事に役課中自今決議候間、左樣御了辨被下度此段及回答候也

明治二十年十月二十五日

山岡鐵太郎樣　　座右

關無學花押

此の返書を見ると、山岡も首を傾けた。

八五　花園禪院選佛場を移す迄

山岡から關係者へ書面――衲が直接談判――賦課でもされるかと云ふ誤解――曹溪寺の贊同――遣る處まで遣る――移轉の公稱願――山岡や各寺の盡力――本山の認可――最も古い歴史を有する江湖道場――公稱認可の僧堂は只だ一つ

道林寺の出願が不認可の處へ、管長から斯う云ふ返事が來たからには、是りや曹溪寺の花園道場を此方へ引受けるの外はあるまいと云ふので、更に山岡から曹溪寺及び東禪寺から曹溪寺へ移

した時の重立つた關係者の處へ、左の通りの書面を送つた。

愈御安享奉大賀候。陳者選佛場移轉の義に付、妙心より別紙の通り御指令相成候に付、御一同御申合御差支無之候はゞ、道林引移の義相成候樣御配慮被下度奉願候。委細者道林和尚より可相願候。頓首

十一月三十日

曹溪寺殿
光林寺殿
興禪寺殿
東禪寺殿

山岡鐵太郎

他各寺の禪師へも宜敷奉願候

此の手紙を送つてから、衲が自分で出掛けて直接に話をすると、何寺でも、

「花園禪院選佛場の移轉で、府下一般に賦課でもせられては。」

と心配するから、そんなことはないと云ふので、やゝ諒解を得たぢや。ソレデ曹溪寺の方から山岡へ返事を送つて來た。

口演

選佛場名稱移轉の義は差支無之候得共、該道場の舊負債等も有之候故、道場舊來諸方に散在の道具等に一

切御關係無之、但し全生庵の分は此限りに無之候。又右負債の關係も有之候故、從前道場より募集金等の事に關係無之樣、且又該道場に付、向後課賦金等無之樣、但し特別有志は此限りに非ず。大體右等の事情に候得ば、名稱のみの移轉は更に故障無之候間此段回答申上候也

十二月一日

曹溪寺
光林寺
興禪寺
東禪寺

山岡鐵太郎殿
高貴下

是れで相談は滯りなく纏つたから、更に本山へ移轉の公稱願を出した。文句なぞは如何でも好いやうなものぢやが、當時遣る處まで遣つたことが知れるから、次手に云つて置かう。

江湖選佛道場移轉ニ付公稱願

東京府下麻布區本村町三十七番地
曹溪寺内　江湖選佛道場

右者今般都合ニ依リテ同府下牛込區市ヶ谷富久町八番地道林寺へ江湖選佛道場ヲ移轉仕リ、山岡鐵舟居士開道ニテ永々聲下選佛場ト被致度、就テハ該寺住職中原鄧州ヨリ、府下一同贊成連署ヲ以テ請願被致候處、

既往十八年一月十九日、曹溪寺へ移轉請願セシ關係者協議ノ末、連署ヲ以テ請願セザレバ何分難及詮義候トノ御事奉敬承候。就テハ其際關係ノ者一同遂協議候處、移轉ノ義ニ付總テ差支無之御座候間、何卒今回更ニ市ヶ谷富久町道林寺へ江湖選佛道場移轉公稱ノ義速ニ御認可被成下度、此段一同連署ヲ以テ奉願候也

明治二十年十二月十一日

願主　道林寺住職　中原鄧州㊞
徒弟　松源寺住職　天野巳恭㊞
外二名
曹溪寺へ移轉ノ際出願者
曹溪寺住職　絶江宗育㊞
外十名

前書ノ通リ願出候條依テ奥印致候也

明治二十年十二月十二日

東京府下本派取締
天澤文雅㊞
四條契巖㊞

本山妙心寺管長關無學殿

此の願書を差出すと、山岡や各寺の盡力でもあつたが、祢が又た何處までも遣ると云ふ願心に感じてサ、本山でも直に願書に對して左の如く認可された。

右認可候事

明治二十年十二月十六日

本派管長　關　無　學㊞

漸く是れで道林寺内の僧堂を江湖選佛場と命名した。現在でも東京で最も古い歴史を有するのは道林寺の江湖道場ぢや。立派に本派の公稱認可を得た僧堂は同寺のみぢや。此の道場から大將も出たが智識も出た。それは追つて語らう。ぢやから道林寺は禪學の修行處と云ふことを忘れてはならぬぞ。

八六　山岡が書いた「龜鑑」と「日用規則」

「選佛場」の大額――表には名も號も書いてない――新宿御苑高貴御休憩亭の額――學人の爲めの垂誡――蘇山羅山から傳つた龜鑑――是れは好いものぢや――欅板へ楷書で綿密に――掲示板は天下一品――其の他の規則書は逸散

道林寺が公認僧堂になつた時、山岡は「選佛場」の大額を欅板に書いて、其の裏面に山岡鐵太

郎謹書とした。表には自己の名も號も書かぬ。斯う云ふ處に能く山岡の精神が表はれてをる。新宿御苑の高貴の御休憩亭の額も、山岡が明治天皇の旨を奉じて書いたのぢやが、是れも道林寺の大額と同じやうに筆者の名が書いてない。

此の「選佛場」の額を書いた時ぢや。山岡が祢に向つて、

「何か學人の爲めに一つの垂誡となるやうなものはないか。」

と云ふから、祢は蘇山、羅山から傳つた龜鑑を基として一文を綴り、「日用規則」と共に山岡に示したら、山岡は、

「是れは好いものぢや、是れも書いて置かう。」

と云ふので、「龜鑑」と「日用規則」とを矢ッ張り欅板に書いて、それを道林寺に掲げた。其等は今でも道林寺にある。併し「龜鑑」の方は後住の全紀の代に盜まれたとか如何したとか云ふて見當らぬのは殘念ぢや。マア兎に角「龜鑑」と「日用規則」とを讀んでみるが好い。原文は漢文ぢやが、解り好いやうに和訓にして置かう。

龜　鑑

禪門の徒、古則を參得することは、吾が宗第一の公務なり。然るに近代蒙昧の輩、先德の方便を知らず、

古則を唾罵して、參詳することを許さず。學者、上件の說を錯り聞いて、鬼窟に墮在し、古則を蔑視し、空しく久參に誇る。悲しむ可く笑ふつ可し矣。我が會裡に入る者は、各自に分に隨つて、話頭を疑着して、頭然を救ふが如く、疑ひ來り疑ひ去つて大疑團を打破し、生死の窠窟を跳出して、須らく古人の心髓に徹すべし。豈に翅だ自身の安樂を得るのみならんや、佛祖の深恩を報ゆるに足らん矣。何んぞ波波役役として一生を過さん。勉めよや焉。

右委照

白崖叟白

是れが欅板へ階書で綿密に書かれてある。それから「日用規則」は斯うぢや。此の方は參禪者ばかりでなく、各位が平素に心得ふべきことぢや。

日用規則

一、參禪學道は最も急務なり。故に入室の時日を限らず、宜しく直日侍者に報じて進退すべし。
一、入る則は合掌、出づる則は叉手、進止須らく如法なるべし。聖僧前の横過並に單前勃窣往來を許さず。
一、止靜中、參禪入室の外、堅く出入を禁ず。二便の往來は抽解の間に限る。躊躇偶語すること勿れ。
一、經行の時、後れて單に在ること勿れ、行いて鞋を曳くこと勿れ。若し病痛に依つて經行を缺く則は、直日に報じて單間にして立つ可し。
一、瞥策は睡と不睡とを問はず、眼を具して之れを行ぜよ。受くる則は鄭重に低頭合掌し、之れを謝せよ。

苟も人我の見を起して、恚念を生ずること勿れ。
一、二時の茶禮、堅く單位を缺く可からず。殘喫、前に投ずること勿れ。
一、單上、雜物を散在して、亂りに筆硯を弄し、並に單上にして衣裓を解き去つて、後門に出入することを禁ず。
一、縱令ひ隨坐の日たりと雖も、恣に困眠して後壁に靠ること勿れ。
一。尋常、肩痛を患ふると雖も、自ら策子を弄することを得ざず。
一、入廊並に常住往來、堅く之れを制す。若し事已むことを得ずんは、宜しく侍者に憑つて之れを辨ぜよ。且つ事を辨ずるは、把針灸治の日に限る。
一、平日猥りに侍者寮に入ることを禁ず。若し用事有るときは、直日に報じて往來せよ。
一、朝課の節、打睡の徒を點檢して、痛く策子を加ふ可し。
一、二時の食時、擧措疎放にして、開鉢發聲することを得ざれ。供給の徒、進退取與急綏、節を得べし。
一、夜坐解定後、速に牀褥に着く可し。衆に違ひて經を誦し禮拜し、或は隣席と耳語することを許さず。
一、會中は禁足。但だ師親の大事は制の限りに非らず。
一、新徒參堂の時、聖僧に三拜し、單頭直日の前に低頭し、侍者の參堂を報ずるを待つて、而して後に安單す可し。
一、分衞の節、臂を掉り手を懷にして、搖曳耳語して他の信心を妨ぐること勿れ。途中若し公駕に遇はば

聞ち路ゑ轉じて之れゑ避けよ。進止如法にして、苟も禮を失す可からず。

一、四九日、掃除、剃髮、入浴、作務、把針、灸治等の日、堅く他單往來、語話戲笑を禁ず。

一、浴司は一衆輪次。當日の人、知客寮に詣して之れを報じ、指揮に隨つて之れを辨ず可し。

一、若し疾事有るときは、直日侍者に告げて單位を退く可し。或は病牀に於て書を閲し、筆硯を弄する等堅く之れを制す。二夜三日を過ぎて出頭する時は、歸堂の拜を作す可し。

右の件々宜しく委悉す可し。若し違犯する者有らば、是れ邪魔の徒、却つて他の清衆を妨ぐ。須らく速に衆議擯斥して許すこと莫かる可し。然る所以は全く叢林の久住を貴ぶに在り。至嘱。白崖叟白。

明治二十年　　鐵舟居士謹書

兎に角此の掲示額は天下一品ぢや。志有る士は道林寺に於て見るが好い。此の外、常住則規や、延壽堂、典座寮の規則は、皆な衲の自筆ぢやが、今は常住規則の外は皆な逸散して仕舞ふたとのことぢや。

八七　ムームーに探偵が付け廻る

墓場でムームー――其の筋の探偵が中々嚴重――境内や墓場に張番――書生共が劍突の尻――山門の看板――警視廳の許可が必要――管長の添書――二重の添書は出さぬ――最初から無屆――責任を逃れる爲めに――漸々添書を得て屆濟み

寒くなつても朝から晩まで、墓場やなんぞで、軍人や學生や、商人、小僧等が、ムームーとやつて居る。中には、うら若い婦人なぞも交つてをる。前にも云ふた井伊掃部頭の妾をしてゐた竹内滿知子（妙容大姉）がセッセと通つて來たのも此の時分ぢや。軍人には薩摩ッほも土佐ッほも長州ッ子も來るので、其の筋の探偵が中々嚴重ぢや。巡査や刑事なぞが始終境内や墓場あたりに張番をして居る。ソレデ修行最中に訊問するやうなことがあつたりなぞするので、面倒臭がつて書生共が劍突を飛すと、其の尻が衲の處へ廻つて來て、一寸警察へ來いのなんのと、イヤハヤ五月蠅いことぢやつた。

ソコデ山門へ禪學道場の掛札をしやうとしたら、それなら認可を歴よと云ふ譯ぢや。もう本山から認可になつて居ると云ふても、東京府や警視廳の許可を受けなくちやいかぬと云ふ。詮方ないから東京府警視廳へ屆け出た處がサ、是れには管長の添書が要ると云ふから、更に管長へ其の事を云ふてやると、管長の方では、公稱を許可してあるから二重の添書は出さぬとのことぢや。

ソコデ段々穿鑿してみると、初めて東禪寺へ禪院を設けた時に屆けてない。それから曹溪寺へ移しても屆けぬから、本山ぢや公稱でも、東京府では認めないと云ふのぢや。處で衲が其の事を**悉しく本山へ云ふてやると、本山では、前に屆けるのを忘れた其の責任が自分の方へ歸しさうな**

ので、なるべく添書を書かないやうにしやうとしてサ、明治二十一年二月二十七日に教務本所から、

「門の掛札は、禪學修行江湖道場とすべし、強るて公稱私稱を論ずるは不穩なり。」

と、譯の分らぬことを云ふて來た。是れにも隨分骨が折れたが、やう〳〵添書を得て屆濟みにした。ぢやから政府で認めてゐるのは、道林寺の道場のみぢや。

八八　三遊亭圓朝と守田寶丹と横綱小錦

三遊亭圓朝――幾萬の人心を自由自在――「牡丹燈籠」の評判――舌が無くて喋舌れば一人前――三年掛つても行かぬ――話して居る中にフト――山岡の印可――其の境界々々で進んで行けば――寶丹の安命――寶丹が寶丹を手に入れる――横綱小錦の入室――腹の角力が分らぬ――法名を與ふ

三遊亭圓朝は今の三遊派の元祖ぢやが、あれで中々參禪には身を入れたものぢや。衲の處へも能く來た。彼の男は實に嘲が上手ぢや。一言で人を泣かせたり笑はせたりする。僅か三寸の舌頭を以つてサ、幾萬と云ふ人心を自由自在に支配するやうに見える。あれは全く禪學のお蔭ぢや。

或時衲が山岡と話してゐる處へ圓朝がやつて來た。何んでも其の頃は彼の有名な「牡丹燈籠」

の嘲を寄席でやつて居つて、大層な評判ぢやつたが、山岡が圓朝を見て、

「お前は中々能く喋舌るが、お前の喋舌るのには舌があるよ。其の舌が邪魔になるから當鶴には喋舌れぬ。舌無くして喋舌れ。舌が無く喋舌れるやうになりや一人前の落語家ぢや。」

と云ふた。サー圓朝いくら考へても解らぬ。三年掛つても如何もいかぬ。併し正念相續して、何時も工夫は怠らなかつたぢや。處が其の後、山岡が開基した谷中の全生庵で觀音供養の餘興に、圓朝が桃太郎の話をしたが、それを話して居る中に、フト舌無くして喋舌る處が手に入つたぢや。ソレデ話が濟むと直に山岡の處へ行つて「無舌の嘲」を呈し、遂に其の印可を得たぢや。何藝でも其の奥義になると禪ぢや。禪心に叶はなくては奥義は極められぬ。圓朝もサ、それから一歩踏み込むと、立派な宗旨家になれたのぢや。淨土や日蓮の坊サマに、此の圓朝の境界があると往生は安樂ぢや。世間のことでも出世間のことでも、其の境界々々で進んで遣つて行けば、成就せんと云ふことはない。

守田寶丹の治兵衛夫婦が衲の處へ來たのも其の頃ぢやつた。夫婦揃つて能く入室したものぢや。ソレデ衲が治兵衛に寶丹、妻女に貞松と安名してサ、

「藥を造るにも心丹で造れ。心丹で造らぬと寶丹にならぬぞ。」

と、入室の度に云ひ聞かせたが、後に衲が松島へ行つて、例月の通り上京して道林寺に滯錫すると、寶丹が來たから、

「お前は此の頃何をして居るか。」

と問ふと、治兵衛は、

「寶丹を合せ來る。」

と云ふから、衲が

「作麼生か寶丹。」

とやると、彼は擬議したので、

「寶丹を看よ。」

と、一棒喫はせぢや。治兵衛は三拜して去つたが、此の時寶丹が寶丹を手に入れたのぢや。ソレデ衲は彼に寶丹を賞してやつた。一寸雪竇の代りをやつたのサ。

守田寶丹居士、多年神佛に誓ひ、氣海丹田より直指人心、見性成佛粉を錬りて、一粒の心藥と爲し、自ら妙味を悟りて、其の名を天壽保全と稱せり。此の心藥の功能は、不生不滅不可思議にして、展ぶる則んば法界に彌綸し、收むる則んば絲髮も立せず、殺活自在の心藥なれば、勇

猛の一[illegible]、進んで退かざる諸氏は　此の心藥一粒を呑み得て、其の能を實驗す可し。所謂蘇吉の光明、日に月に必らず盛大なり。

南天棒

守田寶丹居士至囑

と書いて與へた。今ま寶丹は起死回生藥と云ふさうなが、本來は天壽保全藥ぢや。

それから横綱の小錦も衲の處に入室した。是れは衲が仙臺に行つてからぢや。彼が角力興行で仙臺へ來ると、衲の處へやつて來て、

「相撲の奥の手は腹で角力を取れと云ふが、四十八手の裏表よりも、腹の角力が解らぬ。是非御垂示を願ひたい。」

と云ふぢや。ソコデ衲は無字を授けたが、天下の横綱を張つた男だけに、眼の着け處が違つて居つたわい。後に小錦は法名を附けて貰ひたいと云ふから、錦光院鐵岩宗勇居士と安名してやつたぢや。

八九　山岡は微笑して瞑目した

廿一年二月から胃癌を病む——病中でも寫經——通計九十四卷半——其の遺言——鐵太郎世にしあらば——國民に範をお示しあらせらるゝやう——坐脫——近代にない遺り方——笑顔の死は迚も出來ぬ——其の言葉は衲の耳底に徹してなる——「有信者菩提心」

衲の道場を發起してくれたのは山岡ぢや、其の山岡が明治廿一年の二月頃から病氣に罹つた、それが胃癌ぢやつた。併し病中でも何んでも例の寫經は怠らない。それに道林寺の境内に埋めると云ふ一字一石の方へは、「大乘妙典」と「金剛經」とを書いた。衲は毎晩解定後から山岡の宅へ出掛けて行く。さうして看護もしたり、今の校合もやつた。宮内省からは侍醫が見舞に來ると云ふ有様で、邸内は隨分混雜ぢやつたが、山岡は劍道こそ休んでも、書や其の他の日課は少しも缺さなんだ。ソレデ、

「江湖道場を一日も早く設立したい。」

とばかり云ふて居つた。

それは丁度廿一年の七月十八日のことぢやつた。病が危篤に迫つたので、遂に筆を止めた。病中寫す處の經は、十六半卷合函通計九十四卷半卷ぢやつた。其の夜山岡は衲に向つて、

「我も明日はお暇申す。鄧州老師、日本は師武の二つを怠つては國家が弱くなる。どうか其れ

を忘れぬやうに。それから禪堂が完成したら、惡れ多いことではあるが、天皇陛下の御臨幸を仰ぐやうに盡力されたい。鐵太郎世にしあらば、誓つて奏上して、國民に範を御示しあらせらるゝやう請願せんも、今や命旦夕に迫る。白崖老漢、我に代つて此の事を賴む。」

と懇囑せられた。

それから翌十九日の朝は自ら浴室に入つて身體を淨め、白衣を着して蒲團の上に結跏し、「金剛經」一卷を懷中に納め、右手に團扇、左手に念珠を持ち、左右を見廻して親族知己門弟等に向ひ、

「諸君好在、我れ今日先逝す。」

と言訖り、微笑して瞑目した。時に是れ午前六時三十分。壽正に五十三ぢやつた。所謂坐脫ぢや。流石平常の修養だけあつて、實に近代にない遺り方ぢやゝ。只の者にや微笑の死は迚も出來るものぢやない。殊に胃癌と云ふては、腹が脹れて甚く痛む病氣ぢやから、實にハヤ苦しいづめぢや。それをサ、笑つて死に就くとは如何ぢや。是れは各々氣を付くべきことぞ。

山岡が衲に向つて云ふた言葉は、今尙ほ衲の耳底に徹して居る。卽ち三千大世界に徹して居るのぢや。當時乃木さんなぞにも山岡の死を物語つて、

「其の遺言を空しくせまい。」

と云ふたことぢや。ソレデ山岡の書いた「有信者發菩提心」と云ふ題字に依つて廣く勸募し、山岡の素志を續いで道場を建立し、陛下の御臨幸を仰ぐは臣僧の本分と思ふて全力を盡したが、衲も間も無く亦た道林寺を去ることになつたので、心事異違して未だ其の願を果さぬ。山岡に對しても面目がない。併し何時か御坐處を造らねば措かぬ願心ぢや。

九〇　富士へ登つて草鞋で餅を燒く

九月五日に富士登山――宗般和尚も同行――室内ぢや富士の景色の何んのと云ふが――登山者の捨てた古草鞋――眞に富士山の隻手の聲を聞く――支那唐代の懶瓚和尚――皇帝の敕使――牛糞で芋を燒く――涙やら鼻水やらが芋と一處に――鼻水を拭ふ暇はない

衲が五十歳の時かサ、甲州の月江寺へ行く途中ぢやつた、富士登りをやつた。九月の五日ぢやつたから、モウ登つてはならぬと云ふたが、そんなとには頓着なく登つた。松茸のある頃で、麓の茶見世で買つて燒松茸にしてサ、持參の瓢を傾けて飲んだ。宗般和尚も同行の一人ぢやつた。飲むわ〳〵、直に半分以上も飲んで仕舞ふたものぢやから、マナ〳〵後は絶頂でと云ふので、全昇小僧や洗心居士を勵して登り詰めたのは、丁度午後二時頃ぢやつた。

室内ぢや富士の景色の何んのと云ふが、登つた時の境は亦た格別ぢや。駿河の原あたりで見ると、富士は摺鉢を伏せたやうぢやが、絶頂へ登つてみると又た中の方は摺鉢を仰向けたやうぢや、其の外側に尻を落付けて見降すと、一面の大海原にチョボリ〳〵と伊豆の七島が見える。東京灘も三保の松原もヘラ平等に、堤の上から水田を見るやうぢや。只だ加賀の白山だけが、一寸拇指の頭程、地の上へ出て居る。

サー急に腹が空いたと云ふ。小僧や居士に携帶の餅を渡した處が、中々堅くて喰はれぬ。何んぞ燒くものはないかと云ふても、富士の天邊にや樹も草もない、皆な燒石ばかりぢや。併し其の中にフト眼に留つたのは、夏の頃登山した行者等が打捨てた古草鞋ぢや。衲が、

「これを燃したら餅位は燒けうぞ。」

と、皆で其れを拾ひ集めて餅を燒いて喰ふた。實にハヤうまかつたこと〳〵。又た衲も宗般も腰にある例の瓢を傾けて舌鼓を打ちながら一首やつた。

今日こそは富士の高根に腰掛けて
　四方の景色を打ち眺めけれ

サー眞に富士山の隻手の聲を聞いたぞ。それから下山したが、麓の人々は皆な驚いてをつた。

是りや別の話ぢやがサ、昔、支那の唐代に懶瓚和尚と云ふがあつた。衡山の石室に隠棲して居つたが、德宗皇帝が和尚の德を慕ふて、使を遣はして之れを召させられた。處で使者が石室へ行つてみるとサ、和尚は牛の糞で芋を燒いて喰ふて居つた。其の顏を見ると、涙やら鼻水やらが垂れて、それが芋と一處になつて口へ運ばれるぢや。ソコデ使者が、

「今回天子よりのお召ぢや、速かに都へ上るが好い。併し和尚、先づ其の鼻水を拭ふてはどうぢや。」

と云ふと、懶瓚が、

「エー、何を云はつしやる。今は一大事因緣の爲めに工夫を凝らして居る大切な時ぢや。鼻水なぞ拭ふ暇があらうかい。」

と云ふて、遂に都へ行かなかつたさうぢや。昔、支那ぢや牛の糞を燃した人があつても、今時日本で古草鞋で餅を燒いたのは衲等位なものぢやらう。

九一　禪會廻りではてんで相手にならぬ

乃木さんの無字修行――家に在る時も兵士を敎錬の時も――自己の職業を其方退け――飛び〳〵禪――自分の家へ歸る途を人に尋ねる――一心欲見佛、不自惜身命――乃木さんも是れで遣つた――鬼文靜に叩かれたのも是れ――百合の皮を剝ぐやうに

乃木さんはサ、衲が將軍の軍刀を取つて、

「サー劒を見せてやらう。」

と、眞向に切り掛けた其の時、成程と感じたものぢやから、衲に禮拜してサ、敎示を請ふたのが始入法藏で、ソコデ衲が趙州の「狗子佛性」の則を擧揚すると、それを一心に工夫せられた。家に在る時も亦た兵士を敎練の時も無字で遣られたぢや。

衲がサ、大成寺に立誓以來、今日までに三千の餘の僧俗を接したが……ナニ、三千と云ふ數か。衲の會も全國に亘つて是れ三十一二はあるぢやらうし、此の會員丈でも二千五百人位はあるサ。それに曹溪寺や道林寺の方は無所屬になつて居る。其の無所屬の道林寺の會の中に乃木さんは入つて居るのぢや。それ丈の人數の中には、隨分禪學を鼻に掛けて、「ヤア近來は參禪をして居りますの」なぞと吹聽してサ、「無門關」や「碧巖」を懷中に入れ、自分の職業は其方退けで大いに禪學者風を見せびらかしてからに、其の實禪を知らぬ者が澤山有る。乃木さんとは雲泥の相違ぢや、乃木さんは何時も人に構はず、道場で坐して入室しては歸り、道場が一杯なれば、墓場で

ムームーやつて入室して歸るのが常で、人とは一切無駄口をきかぬ。ぢやから乃木さんが有ることを知つた者は極く少なかつた位ぢや。

物は何んでも左様ぢやが、殊に禪の修行は辛抱が大事ぢや。世間でも石の上に三年と云ふが、乃木さんは全く「石の上の三年」を實行した人ぢや。然るに世の人は碌な辛抱も出來ずに、只だ〳〵お悟りばかりを覺えたがるから、鎌倉へ行つたの、京都が如何の、ヤレどこそこの會に就いて何んの宗匠に參じたのと云ふが、何んにも解らぬ中から、そんなに彼方此方の師匠に就くものぢやから、飛び〳〵禪になつてサ、役に立たぬ。是りや自分の家へ歸る途を人に尋ねるやうなもので、それを衲は禪會廻りと名をつけてをる。

一通り修行が出來てサ、それから各師家を廻るのは遍參で、至極好いことぢやが、只だお悟りを覺えたいばかりに廻る奴等はてんで相手にならぬぢや。眞實坐禪修行をしやうと思ふならばサ、初めの中は師匠を變へずに、何程年月を經ても關はず辛抱するのが肝心ぢや。法華經にも「一心欲見佛、不自惜身命」と云ふぢや。日蓮も是れで遣つた。乃木さんも是れで遣つた。衲が鬼文靜の處で打ッ叩かれながら辛抱したのも是れぢやが、今時の雲衲居士には出來ぬテ。何んでも禪は百合の皮を剝ぐやうに、一々に工夫してやるが好い。先づ第一に辛抱ぢや、辛抱甲斐ぢや。乃

木さんが彼れだけになられたのも、其の辛抱が元ぢやつた。

九二　無字をトンボ返りさせよ

差出しでも追付かぬ——椎の木の下の墓石——凹んだ處に水が一杯——水を掻出して坐る——トンボ返りは乃木さんにも解らぬ——ケイと石を持上げて引っ繰り返す——丁度坐に好い——ヤア〳〵有り難う——それを坐禪石と定めろ

まだ山岡が生きて居る頃ぢやつたが、多人數の人が墓場の石の上なぞに坐して居るのを見て、一時の間に合せにもと、觀音堂の傍へ差出をしたが、中々そんなことでは追付かぬので、矢ッ張り寒くても何んでも、外や墓場に坐つた。乃木さんも戸田家の墓所の傍に中位な椎の木があつて、丁度其の下に在る石へ坐つたが、それは古い墓の臺石の殘つたので、墓の掉石を取つた跡が、それたけ凹んで居る。又た水を手向ける處も刻り込んであるから、雨でも降ると水が一杯溜つて、どうも坐ることが出來ない。ソレデ何時も溜つた水を掻出して坐つたさうな。それを見て居つたのが今の道林寺の住職平松亮卿ぢや、亮卿は其の時分自謙と云ふて、谷中興禪寺の文曉和尚の世話になつて、其處から衲の處へ通ふて居つたのぢや。其の自謙が衲に、乃木さんが水を掻出しては坐ることを話したから、衲が行つてみると、成程是れぢや水が溜る筈ぢやから、其の石を

引ッ繰り返したら好いと思ふたので、其の翌日、乃木さんが入室の時、

「無字をトンボ返りさせよ。」

とやつたが、流石の乃木さんも是れは解らなかつたとみえて、其の日は其の儘歸つた。

スルト其の晩、雨が降つたので、例の石には又た雨水が溜つた。乃木さんも亦た相變らず手で其れを掻出して坐處を造らうとしたから、傍に居た自謙が、

「士官さん、其の石をドンボ返りさせてごらんなさい。」

と云ふた。スルト乃木さんは、

「ウフン。」

と微笑して、グイと力を入れて石を持上げ、引ッ繰り返してみると、坐にも丁度好い石ぢやつたので、

「ヤア、是れは有り難う〳〵。」

と云ふて、乃木さんは夫れ以來其の石を常の坐とせられた。雨が降りや例の椎の木で除けるし、甚だ都合が好かつたぢや。ソコデ其の日の入室に、「無字のトンボ返り」も透つた。

此の石は今も猶ほ「乃木さんの座禪石」として道林寺に保存されて有る。先年道林寺が墓地の

移轉を遣つた時にも、是れだけは是非殘して置きたいと云ふて、椎の木ともに大分の人夫を掛けて庭へ移した。ぢやから椎の木の下に乃木さんが坐つた石は、ちやんと其の儘置かれてある。

九三　私が修するは國家を守護する禪ぢや

第一旅團長の頃か——私には當を得た道場坐——私は兵隊を育てるのにも禪風——私は坊主ぢやないから——いやな武士と嫌ひな坊主——法と人と別でないが好い——三十年後の工兵のシャベル——百丈さんの持つた鍬——祖錄は見ぬやうでも見てゐた——修行が平常

乃木さんが衲の處で盛んに入室をして、例の座禪石で座を遣つた頃は、近衛の二聯隊附きで大佐の時ぢやつたか、それとも第一旅團長になつた後かも知らぬが、或時衲は乃木さんに向つて、

「此の頃は繼足も出來て、大分堂の中も廣くなつたから、モウ外でなくとも堂内で坐つたら好からう。」

と云ふと、乃木さんは、

「イヤ私は外で好い。石上の端坐は私には當を得た道場坐ぢや。武士は禪坊サンと同じで、馬の脊が庭園サ、樹下石上が自己の宿舍ぢや。家藏が眼に付くやうな武士は眞の武士とは云はれぬ

ぢや。ソレデ私は兵隊を育てるのに禪風で遣つて居る。ぢやから私の修する禪は、國家を守護する禪ぢや。私は坊主ぢやないから、私の遣るのは武士禪ぢやが、老師は坊サンぢやから、貴方の遣るのは卽ち達磨禪ぢや。武士で武士の道を知らぬ程いやな奴はない。又た坊主で坊主の道を知らぬ坊主程嫌ひな奴はない。」

と、始終云はれて居つた。ソレデ衲の提唱をば缺さなんだ。時々、

「禪の好いのは、法と人と別でないことぢや。」

なぞとも云はれた。或時衲が道林寺の裏の畑で、大衆と共に作務をして居ると、乃木さんが遣つて來て、

「和尙の鍬は大きいなァー。こんな大きな鍬は和尙一代限りぢやらう。今の工兵の持つて居る鍬も、三十年も後には小さくなるかも知れぬ。百丈さんの持つた鍬は如何な鍬かいのう。」

と云はれたこともあつた。ぢやから祖錄なぞは見ぬやうでも矢ッ張り見られたものぢや。ソレに修行が平常ぢやつたから、直に斯う云ふ問も出來るのぢや。何んでも兵隊は禪道で育てなけりや眞の兵士は出來ぬと云ふのが乃木さんの主義ぢやつた。ァ、其の時蒔いて置いた道林寺の茶の木も、墓地の移轉で跡方もないのう。

九四　南天棒は無一無一と云はせる

ムームーはいかぬと云ふ胡麻摺り坊主——大慈悲が知れうかい——ムームーが耳に付いて困る——深山幽谷の座禪は世間の役に立たぬ——靜中の動、動中の靜——無病の病に罹る——我が遣裏には生死無し——生死に付いて廻る間は生死を脫せぬ

道林寺の堂內でもムームー、墓でもムームーやるので、坐禪とは默坐するものであるのに、南天棒はムームーと云はせる、あれは不可ぬの何んのと云ふ胡麻摺り坊主が有つたがサ、そんな奴輩に此の南天の大慈悲、本願が知れうかい。三十年來衲に隨いてをる者でも、顚心の鈍い奴は衲の眞正が知れぬので、不宗盡しくさつて又た詑三昧をするぢや。衲のムームーと遣らせる處に、南無阿彌陀佛も南無妙法蓮華經も有るぢや。隣單でムームー云ふのが耳に付いて困るなんと云ふのは、まだ〳〵無字になりきれぬからぢや。深山幽谷の、日の光もさゝぬ、風がそよとも吹かぬ、谿川の水の音もない處で坐禪をする積りで居る者は世間の役に立たぬ。世間の役にさへ立たぬ者が、何んで出世間の役に立たうぞい。他人の呻るのが耳觸りぢや炮煙彈雨の定は得られぬ。所謂靜中の動、動中の靜工夫三昧が大事ぢや。衲は默照禪や立枯禪は嫌ひぢや。何んには拘はらずムームーやらせる。此のムームーで坊主も居士も大姉も打き出したぞ。

人の肉身に病魔が有るやうなもので、何んにでも病魔は有る。禪には禪病が有る。「首楞嚴」には五十魔を說かれた。此の病魔を破るのがサ、卽ち衲の無字の四十五拶ぢや。併し禪學をやる者は又た無病の病に罹るぢや。是れは中々度し難い。かと思ふと、病は去けても藥を止めぬ奴もある。こんな者でも眞に無字が透過して、四十五の拶處が無事に濟めば、根ッ切り葉ッ切りになるものぢや。それを諸方では無字の調べが不足ぢやから、

「無字を見た證據は如何ぢや。」

と云はうものなら、直に一掌でも喫はせる。一掌も好いがサ、さうばかりでば屆かぬぞ。是れには仔細がある。此處等邊で打つたりするからサ、

「生死透脫の無字は如何ぢや。」

と問ふと、關山國師の眞似をして、

「我が這裏、生死無し。」

なぞと吐す。人の屎橛を喫ふは良狗に非らずぢや。「生死無し」では未だ〳〵生死に付いて廻るのぢや、其の間は生死を脫せぬぞ。それぢやから、

「無字の姿は如何なものか。」

と云へば、直に自己の姿ぢやなぞと思ふて居る。それぢや未だ法執が取れて居らぬぞ。こんな者は衲の室內では何時も落第ぢや。何故かと云へばサ、根源が虛僞ぢやもの。駄目々々。

九五　サー八個の無字は卽今如何ぢや

寐寤恒一の工夫に骨折つた乃木さん——中峰の八個の無字——無字の要は無字を忘るゝ——眼は東南に向つて意は西北——コップに水が一杯なれば空氣は入らぬ——昏散の二寃——自己を忘れると宗旨其の物が自己——正念相續の那一人——無門の二十個の無字

乃木さんも寐寤恒一の工夫には骨折られたものぢや。彼の人は君と臣と恒一、自己と無字と恒一を錬り來つた。人とは一寸眼の竹け處が違ふて居つたわい。乃木さんの歌にサ、

君のため力の限り盡してん
身の行く末は兎にも角にも

と云ふがある。是れは中峰和尙の八個の無字を透過した時の境ぢやつたらう。

中峰に八個の無字が有る。卽ち、

「趙州甚んに因つてか個の無の字を道ふ。此の八個の字、此れは是れ八字關。字字精彩を着け

て看んことを要す。」

と、是りや無の見に墮在する奴を引出して活すぢや。無—と云ふたら、いつでも無—とさへ道へば好いと思ふかい。無字の要は無字を忘るゝ處に在るぢや。無字を忘れると自己を忘れる。自己が無くなると。其處で眞の自己本來の面目に接觸してサ、大安心を得て、此の世の中に活潑々地の働きをするのぢや。それが解らぬ者は、「八個の無字」とは八つの數を云ふたもの位に思ふぢやらう。そんなことではない。八個を示したのは、眼は東南に向つて意は西北に在りぢや。氣を着けよ。又た中峰が示して云ふのに、

「儞若し依稀彷彿として半困半醒、有に似無に似て、恁麼に參じ去らば、驢年にも也た發明することを得ず。」

と、親切なものぢや。八個が數なぞと思ふたら、いつまで經つても無字は手に入らぬぞよ。

麻糸の長し短しむつかしや
有無の二つをいつか離れん

と蟾川の家内が云ふたぢや。有の見、無の見にさまよつて居つてはならぬ。それから、

「參禪は全く是れ一團の精神なり。」

と、無の一團になれ。コップに水が一杯なりや空氣の入る隙はない。銘々無字が一杯なりや外に無と云ふものが入りやうがないぢや。無の一團になり切れ。「貧乏神が取り捲いて、寶の出づる處もなし」とやら云ふことがあるぢやないか。なんでも一杯に無になり切れ。

「儞若し精神稍綏ならば、便ち昏散の二魔に引入れられて、狂妄窟の中に亂想して、顚倒の活計を作さん。」

と、切り短かな言葉ぢやが、能く學人の臟腑を抉つたものぢや。各々是れ、學人の多くは此の昏散の二つに止つて居るぢや。世の中には妙に辯ぎ込んで居る奴と、又た氣違ひのやうに騷ぎ廻る奴とあるが、禪の修行にも左樣云つた風があるから、中峰が一團の精神で遣れと云ふたぢや。所謂正念相續して、二魔に奪はれるなと云ふ誡めぢや。それから又た、

「參じて精神不及の處に到り、驀然として猛省せば、方に只個の精神、亦た著處無きことを知らん。便ち自己便ち宗、惟だ宗便ち己、宗外に己無く、己外に宗無きことを見ん。惟だ己と宗と、俱に寂寥を成す。」

と、此の句にはサ、無理會の處も有るし、又た驀然として打發する處もあるぢや。打發して見よ、一團ぢや、他物は御座らぬテ。ぢやから自己を忘すると、宗旨其の物が自己となる。宗旨は疑

もなく怨もなく憂もなく又た碍もない。卽ち恒一ぢや。さうあらうぞならば、卽ち正念相續の那一人ぢや。

サー八個の無字は卽今如何ぢや。無字を見たと云ふても、八個が見えなけりや矢ッ張り嘘の皮ぢや。併し中峰の八個の無字が透つても、無門和尙の二十個の無字が透らぬではならぬぞ。寒山も詩は名人ぢやがサ、無門の此の五言絶句は又た格別ぢや。各々ウッカリせまいぞ。乃木將軍は無字は綿密に調べたよ。

九六　乃木さんの苦んだ露刄劍

五祖の無字の頌――東山下の一ト振刀――大火聚ぢやもの――纔かに觸るれば面門を燎却――此の劍では膏汗を絞つた――腰の劍も眞の働きは出來ぬ――これから自己の劍を自己に使ふ――平常國家の上に此の劍を使用――豆腐の上に石を置くやうなもの

「露刄劍」の出處は五祖法演ぢや。五祖の無字の頌に、

「趙州の露刄劍、寒霜光り焰焰。纔かに是れ如何と擬すれば、身を分つて兩斷と成る。」

とある。是りや實にハヤ東山下の一ト振り刀。玉散る氷の刄ぢや。

此の「露刄劍」には乃木さんも苦んだものぢや。是りや大火聚ぢやもの、纔かにでも觸るれば面門を燎却するぢや。サー一寸でも思慮が入つたら、打ち切られるぞ。有とでも無とでも何んとでも云ふてみよ。首と胴と兩斷ぢや。乃木さんは天下の將軍だけに、此の劍では膏汗を絞つた。毎度入室するが中々透らぬ。納が、

「此の露刄劍が手に入らなけりや、御身が腰に振下げてをる劍は、眞の働きは出來ぬぢや。」

と、切り詰め、切り捲つたので、とう〳〵意識も打ち破れて、此の露刄劍を手に入れられた。

其の時乃木さんは、

「大慈大悲、幸に露刄劍を自由に使ひ得ることになつた。是れ迄自分の使つて居た劍は、他の物であつた。今日こそ全く自己の劍を自己に使ふことになつた。」

と、喜んで三拜した。ソコデ乃木さんは平常に於て國家の上に此の劍を使用したのぢや。實に是れを手に入れると、自己も大安樂の境に在つて、而も其の働きは國家に偉大なる効果を及すものぢや。乃木さんの云はれた通り、軍人は全く禪を修行せねば役に立たぬ。軍人に禪力が無くなると、國の力が減るぢや。腹のドン底が決らぬ軍人が國家の爲めに盡さうとしても、それは豆腐の上に石を置くやうなものぢやわい。

九七　檻隙は男泣きにシク〳〵泣出した

夜中に破れ玄關を叩く――三拜して入室――何處ぞで線香を嗅いで來たわい――一枚悟りの大太刀――安藝の佛通寺の寛量に就いて骨折る――豪の者でも道にや勝てぬ――ペケ〳〵明日出直せ――衲の行く先々で修行――居士の印可始め

飯田政熊と云ふ居士が衲の處へ來たのは、明治二十二年十二月二日ぢやつた。夜中に破れ玄關を叩く者があるぢや。丁度雪がチラ〳〵降つて居つたと思ふ。玄關で、

「一大事の爲めの故に夜中にも拘らず推參した。老大師に相見がしたい。」

と怒鳴るぢや。取次の小僧が、五月蠅い奴が來たと思ひながら、寢ほけ面で衲の處へ云ふて來たから、衲が、

「此方へ通せ。」

と云ふと、肉太な男子が三拜して入室して來た。ハヽア是りや何處ぞで線香を嗅いで來たわいと思ふたからサ、衲が、

「お前は何處ぢや。」

と尋ねると、彼は、

「私は防州の者で。」

と、生緣地を語つてサ、それから室內の穿鑿ぢや。彼は無字の一ト振り刀で、眞向から切り込んで來るわ〳〵、エライ氣焰ぢや。一枚悟りの大太刀を振るの振らぬのと云ふ段ではない。雲衲も小僧も、是りや何事かと、皆な眼を覺して仕舞ふた。とても寄つても付かぬ有樣ぢやつた。併し夫れは左樣あるべき筈ぢや。彼は安藝の佛通寺の寛量に就いて、大分に骨折つてあつたのぢやから無理はない、大方のお師家サンなら、一枚無字で彼に喚鐘を取り上げられうがサ、衲の室ぢや左樣は行かぬ。ライオンのやうに猛り狂ふ彼に、

「其方は大分透つたナ。それぢや趙州の露刃劍は如何か。」

と、チョツと抓むと、サーうんと行詰つた。豪の者ぢやがサ、道にや勝てぬ。實に玉のやうな膏汗を流してグツクと云ふたが埒明かぬ。ウムム〳〵云ふて居るから、

「そんなざまで何んぢや。ペケノ〳〵、明日出直せ〳〵。」

と、追出して仕舞ふた。彼は願心のある奴ぢやつたから、シク〳〵と泣出して、涙が頰を傳ふて居つたよ。

翌日入室した時にや、首尾よく「露刃劍」も透つた。それから彼はグツクと骨折つて、衲の行

く先々で醫者を開業しながら弛まず修行した。ノレデ彼には三十一年の十一月二日に印可を與へて、櫨隱と云ふ安名を授けたぢや。是れが衲の居士の印可始めぢや。願心さへあれば無字でも何んでも透らぬと云ふことはない。毎度云ふ通り、願心が第一ぢや。

九八　衲の熱血を濺いだ「碧巖集」

「碧巖」の提唱――長いから人々の根機が續かぬ――「大藏經」をすら書かうとした山岡さんの師匠――提唱が主となつて參禪が客となつては不可ぬ――月に六回で一年と五ヶ月――話頭一々太新鮮――今に圓福寺の寶庫に――出版された「提唱碧巖集」

衲が四十九歳の時ぢやつた。深川の五百羅漢寺に溯源敎會と云ふがあつて、其の會から衲に「碧巖」の提唱をしてくれと賴んで來た。ソコデ衲は、

「碧巖は長いものぢやから、どうも人々の根機が續かん。先師羅山和尙も、碧巖」や「虛堂錄」のやうな長いものより、切り短かな「無門關」や「臨濟錄」の方が好いと云はれたとがあるので、敎會なぞでも永續かむつかしからうから、代りに「無門關」を提唱しやう。」

と云ふと、幹事のやうな人が、

「それは怪しからん。山岡さんは、「大藏經」をすら書かうと云ふ願心ぢや。其の師と賴む貴僧が、「碧巖」が長いなぞとは以ての外ぢや。」

と云ふエライ權幕ぢやから、衲が、

「衲は長うても構はぬが、提唱の爲めに參禪が怠るやうなことがあつては不可ない。提唱の要は參禪を激勵さすのぢや。ソレが提唱が主となつて、參禪が客となつては不可ぬからぢや。」

と云ふと、幹事が、

「月に三八の日の六回にして、一回一則宛として下さい。さうすれば一ヶ年と五ヶ月掛れが濟みますから。」

と、何んでも彼でもと云ふ熱心に、衲も承諾して毎月三八の日に溯源敎會で「碧巖」の提唱をやつた。

其の時の碧巖錄會は中々盛んぢやつた。衲も隨分骨が折れたよ。話頭一々太だ新鮮と云ふ意氣込みぢやつたから、調べも綿密にやつて、下讀をしたり、書入をしたりサ、幾晩となく寢なかつたものぢや。其の書入本の、衲が熱血を濺いだ「碧巖」は、今は八幡の圓福寺の寶庫に納めてあるが、それを其の儘に露出したのが、此の間出版されて、天覽の榮を辱ふした「提唱碧巖集」ぢ

や。「碧巖」のことなら、彼れを讀めば衲が云ふより能く解るから、就いて看るが好い。

九九　玄關には何時も借金取りが一人や二人

資金が寄らぬので金不足――妙心寺住持職の辭令――道林寺住職を讓る――高崎府知事の贊意――腹で職爭をしないと毛唐に負ける――氣紛れ者が日本魂をゴチヤまかす――上から下まで心が許せぬ――是れ迄に打出した居士二百五十名

左樣云ふ中にも衲は禪堂建立に苦んでサ、漸く本堂と方丈と食堂とを建てた。サー建したは建てたが、中々資金が寄らぬので金不足ぢや。玄關には何時も借金取りが一人や二人は詰掛けたものぢや。宗般和尙や宗龍居士（茶道玉川流家元）が其の言譯に困つて居つたよ。アハ〳〵〳〵。

併し參禪者は日々に增える一方で、江湖道場の名は天下に隱れなくなつたから、本山でも衲を妙心寺の住持職にした。其の辭令は今とは違つて居る。

妙心寺住持職之事任公規之旨可有執務者也仍衆評如件

明治二十二年十二月十五日

鄧州和尙大禪師

侍眞義　　蓁印

と云ふのぢや。

處で衲が道場の師家と道林寺住職とを兼ねて居つては、何彼と寺務上にも差支へるので、衲は弟子の全紀と云ふ者に道林寺の住職を讓つて、自分は禪堂の完成に專ら力を盡すことにした。當時の東京府知事高崎五六さんなぞも、それを非常に希望されて居つた一人ぢやつた。開基の山岡は死んだがサ、其の志はチヤンと存じて居るので、衲は規矩を嚴にして、雲衲も大事ぢやが、先づ民間の居士等を接得して、日本を禪で堅めて置かぬと、イザ外國と戰爭と云ふ場合に、人數からでも金力からでも人體の大小からでも、日本は毛唐等に負ける。敎者法師の遣り方ぢや終ひには耶蘇でも佛法でも何んでも好いぢやないか、道に惡い道は無いなぞと、トンダ氣紛れ者が飛出して、日本魂をゴチヤまかすやうになる。さうあらうぞならば、「趙璧本と瑕類無し、相如謾りに秦王を誑す」と云ふやうな譯で、上から下まで少つとも心が許せぬ。それぢや天下泰平と云ふことは出來ぬ。さうサ、衲が東京へ出てから、是れ迄に打出した居士大姉等は二百五十名近くもあらうか。

一〇〇　道林寺から松島の瑞巖寺へ

本山からの特命――今ま天下に瑞巖寺を整理する者がない――天長五年に圓仁僧

正の開基——北條時頼の諸國行脚——眞壁平四郎が中興開山——天台の僧衆を追出す——伊達政宗の歸依——天皇陛下より金千圓御下賜——末寺との紛擾——尋常一樣の晋山ぢやない——兵法の奥の手

明治二十四年の雨安居に、道林寺の江湖道場で「槐安國語」を提唱してをると、本山から特命で、宮城縣松島の瑞巌寺に住職せよとのことぢや。初め内命があつた時、衲が松島へ行つては、東京の禪堂の興隆にも差支へるからと云つて斷つたが、又た本山から、今ま天下に瑞巌寺を整理する者がないから是非に拜命せよとの懇談なので、江湖道場の方は松雲室（見性宗般）に遣らせて、衲は瑞巌寺へ行くことにした。

ソコデ雨安居は半制で、「槐安國語」も講了として、衲は松島行きの仕度に掛つたぢや。隨行員は十名ばかりで、七月七日と云ふに道林寺の江湖道場を退山した。其の日も亦た雨サ、傘や合羽と大騒ぎぢや。衲が退山とか晋山とかには、どうも能く雨が降るぢやテ。それから退山の偈を斯うやつた。

「徐々として雨を衝いて蝸窟を出づ、驀直に今從り此の禪を傳ふ。奪却す青龍山上の境、帶雲松色波に映じて鮮かなり。」

コレデさつさと出掛けたぢや。

全體松島の瑞巌寺は天長五年に圓仁僧正が開基した寺で天台宗ぢや。唐の四明山や江州の叡山を寫して、七郡中に三千の宿坊を創立したものぢや。初めの名は青龍山延福寺と云ふたが、非常に山規が亂れて仕舞ふた。偶々北條時頼が諸國行脚で延福寺へ到つた時に、何れの宿坊でも一宿もさせなかつたので、詮方なく時頼は海岸の波打ち際へ行くと、一つの洞穴があつたから、そこで一宿しやうと内へ入らうとすると、既に内部には一人の老僧が居つた。是れは法身と云ふて、有名な眞壁平四郎ぢや。平四郎は宋へ渡つて徑山の佛鑑禪師の印可證明を得て歸朝したのぢや。時頼は此の法身と一夜二夜を語り合つて、徑山の心要を得られたので、鎌倉へ歸るや否や、三浦大助、同義成の兩人に兵を添へて松島へ遣り、天台の僧衆を延福寺から追拂ひ、岩窟内の法身を請じて中興開山とし、寺號も青龍山圓福寺と改稱した。

次いで仙臺の藩祖伊達政宗が深く禪を信じた處から、頽敗した圓福寺を改創して香華寺にしやうと、即ち中村宗吉に命じて改築させ青龍山瑞巌圓福禪寺とした。ソレデ政宗公薨去の後には、妙心寺から雲居禪師を迎へて中興とした。併し維新後は甚しく荒廢したので、明治天皇が東北御巡幸の際御臨御になつて、餘りに廢れたるを看行され、金一千圓を御下賜になつたと云ふ由緒のある寺ぢや。末寺も五十ヶ寺有り、塔頭も十三ヶ寺有るが、それが始終ゴタ〳〵もめて居つて始

末が付かぬぢや。

衲は其の日仙臺へ着くと、先づ大泉と云ふ旅館へ一泊した。衲が思ふにはサ、明日の晉山は尋常一通りぢや出來ぬ、兵法の奥の手を以て押寄せる外はないと工夫したぢや。

一〇一　草鞋掛で雲水姿の晉山式

此の中に特命の住職が居やうとは思はぬ——大玄關で怒鳴る——直接差遣の住職は受けぬ——ソレ侍者開門せよ——本堂へ押上つて晉山式——ゴタ〳〵連中は即刻退去——一分の猶豫も與へぬ——モグリの寺が二十一——一番氣に入つたのは

逢磨堂

翌七月八日の朝、旅館で皆な一様に雲水の姿に變裝した。誰れが誰れやら分らぬ。丁度釋迦が初めて迦毘羅城へ說法に行つた時のやうにサ。和尙も小僧も一同麻衣に袈裟文庫を掛け、網代笠を冠り、甲掛脚袢草鞋穿きで宿屋を出てサ、午前十時頃かに松島へ着た。松島の者等は、

「瑞巖寺さんへ澤山雲水の人が來たものぢや。」

と云ひ囁して、誰れも其の中に本山特命の瑞巖寺の住職さんが居やうとは思はぬ。一様の行脚ぢや。衲等は行脚には慣れてぢや、お手前物ぢや。素知らぬ顏をして、瑞巖寺の大玄關で、

「たのもうー。」

と怒鳴つた。二聲三聲怒鳴つたが一人も出て來せぬ。ソコデ侍者を庫裡の方へ廻して、

「大本山から特命住職が見えたから、中門を開け。」

と云はせた。スルト其の時サ、塔頭の圓通院の住職花山柏齡が出て來て云ふのに、

「假令特命でも何んでも、直接差遣の住職は受けぬ。」

と、拒んで入れぬ。ソコデ衲は、

「何を云ふか、住職は衲ぢや。開門するもせぬも有るものか。侍者に命じて通じたのは人事を盡したのぢや。本山の命を違背する奴輩には用はない。ソレ侍者開門せよ。」

と、否應云はせず直に中門を開かせ、本堂の正面で十餘名一同に草鞋を脫ぎ、即時半鐘を三打して晉山の偈を打した。

「南天棒即德山の棒、得得として掣ち來つて直傳を失ふ。看盡す神仙松島の景、瑞巖高處に安眠を打す。」

と遣つて祝聖を唱へ、本尊、開山等に回向して玆に全く晉山の事が畢つた。

それから花山柏齡始め、ゴタ〳〵の連中一同に即刻退去を命じたが、其の時の氣持ちの好かつ

たことゝ云ふたら無いよ。今でも思ひ出すと身體中が樂つたいやうな氣がする。大玄關着より末寺の坊主共に退山を命ずる迄、實にハヤ一分の猶豫をも與へなんだ。所謂迅電耳を掩ふに遑あらずぢや。松島でも江湖でも、是れを草鞋掛の晋山と云ふてをるぢや。

どうも坊主の亂行程世の中に恐ろしいものはないテ。衲が末寺の坊主を追出したので苦情百出サ。併しそんなことには構はんでサッサと整理を斷行し、住持の職分を盡してサ、八月十日に宮城縣下の巡視を遣つたが、途中、何處に何んな者が居るかも知れん。岩窟に法身が隱れて居たと云ふ松島ぢやからサ。矢ッ張り例の南天棒を提げて出掛けたよ。スルト驚いたぢや、本山へも無届けのモグリの寺が二十一ケ寺もあるぢやないか。

それから一番氣に入つたのは達磨堂ぢやつた。是れは扇谷福聚山海無量寺と云ふ寺に在つて、前にも云ふた日本三達磨堂の一つぢや。そして其の景色の好いとが如何とも云へん。松島の八千八島を一眸の中に收めてサ、實にハヤ眺望絶佳と云ふも愚かなりぢや。併し惜しいことに全く荒れ果てゝ居たので、衲は松島に居つた間に再建を企てゝサ、能く此の堂へ遣つて來ては一炷を薫じて海氣を呑んだものぢや。

一〇二　山岡の春風館を聖僧堂にした

道場設置は一寸も念頭を離れぬ——毎月十日づゝ東京へ——山岡の家を賣り飛す——擊劍の道場ぢやつた有名な春風館——道林寺の聖僧堂——寫經の一字一石を埋める——石函の蓋に記した銘——慈覺大師作の文殊大士

衲は松島に居つても、東京の江湖道場設置のことは一寸も念頭を離れぬ。それぢやから毎月十日間宛東京へ出て、護法の菩薩を打出したぢや。

是れは衲が五十四歳の時（明治二十五年）かサ、三月東京へ出ると鐵舟居士の實子の直記さんが、山岡の家を賣り飛ばして、擊劍の道場ぢやつた有名な春風館が、他人手に渡つたと聞いて、實に何んとも云へぬ心持ちがした。故の山岡がサ、毎日朝の四時から彼の道場で、エーイ、オーの氣合で門弟を仕立てたものぢや。今や其の主は無くとも、道場までが裏長屋や馬部屋になると云ふは默視するに忍びぬと思ふて、それを買戻して道林寺の聖僧堂にすることにした。

それと共に兼て山岡が、金輪の御座所に當てやうとした寫經の一字一石を埋めて、道林寺の境域を淨めた。其の時經石を收れた石函の蓋に衲は記して、

「山岡鐵舟居士、生前佛果菩提の爲め、三十年を斯し、一切藏經を寫さんと欲し、先づ筆を大

般若經に採る。然して明年二十年二月十六日、病を發して臥褥に在りしと雖も、湛然として常寂、日に大般若經を寫す、一葉二百四十字。又た日に門人篠塚括五郎をして、小石三百を拾はしめ、大乘妙典を寫す。惜しい哉、同年七月十九日寂す矣。予、其の謄寫する處の大般若經を閲すれば、則ち九十四卷、大乘妙典は殆んど了す。又た夫人英子、寫經する處の者は金剛經及び觀音經、心經等なり。又た大乘妙典は居士の病を助ける爲め、代書する處有りしと云ふ。噫、居士にして此の夫人有り。明治二十五年六月、府下牛込市ケ谷富久町道林寺境内に於て、專門道場を建築し、以つて亡居士及び夫人の志を達せん。併せて塔所を造立し、經石と遺髪とを合祀して專門道場の開基と爲す。」(原漢文)

と。是れを石の蓋に刻らせて置いた。

それから春風館は聖僧堂としてサ、中央に文殊大士の像を安置した。是れは慈覺大師が千日の護摩の灰で作つたものぢや。此の聖僧堂は明治四十四年二月に燒けたが、文殊の像は殘つて今も尙ほ道林寺にあるぢや。

一〇三　松島島めぐりのいろは都々逸

唯だ巡るばかりぢや面白くない——今でも唄はれる——三味線太鼓で島めぐり——
——斷常の二見を斷切る生きた法語——物は扱ひやうで違ふ——牛が飲めば乳——
蛇が飲めば毒——一則の公案とするが好い

松島は八千八島と云ふのぢやから、禰も是れ、一度は島巡りをしてみたいと思ふてサ、出掛けやうとすると、我れも／＼と隨いて來るぢやないか。可厭とも云へぬから、それも好し／＼として、先づ瓢簞に酒を詰めた。是ればかりは何處へも離さん。併し酒は有つてもサ、唯だぐる／＼巡るばかりぢやトンと面白うないので、一々に唄をやつた。それは今でも松島で唄はれてをる「いろは」都々逸ぢや。其の時は校書も來たが、太鼓持も來たサ。三味線太鼓で大賑やかな島巡りぢやつた。「いろは」都々逸を云ふてみやうか。

いはに添寢のあの松影を水にうつして月見崎（月見崎）
ろんより慥かの此の辻占を開いて嬉れしい扇谷（扇谷）
はれて嬉れしき大高森に心うきすの釣あそび（大高森 馬放島）
に世の契りを籬の島に結ぶ夢路の浪まくら（籬島）
ほれて別れて涙の顏をかくす袖なき裸島（裸島）

へいきな顏して別れてゐても駒の狂ふか鐙島
とくにとかれぬ夕の夢が覺めて嬉れしき屏風島
ちよも變へじと契りし中に祈る互の不老山
りひも分らぬ戀路の闇に迷はす其方は小松島
ぬしの歸りに隱した時計今に西行の戻り島
るしは寒風澤荒磯仕事かへる時刻は化粧島
を前一人が神より大事朝夕此の手を柏島
わしが戀路の橋掛島に筆を染めたる硯島
かみや佛に祈りし甲斐は二人手に手を渡月橋
よろづ代が崎寶の濱にあそぶ互のふくら島
たとひ磯崎すなどる業もふたり暮せば都島
れいぎ作法も二人が中はいらぬ夕餐の小鍋島
そちが小松の其の初めより抱へ子の面を松が濱
つきに風情の雄島の浦で唄はれたさの身の願ひ

（鐙　島）
（屏風島）
（不老山）
（小松島）
（西行戻島）
（寒風澤化粧島）
（柏　島）
（硯　島）
（渡月橋）
（代ケ崎、寶の濱、浦福島）
（磯崎都島）
（小鍋島）
（小松島松ケ濱）
（雄　島）

ね顏に見惚れてつひ醉覺の水も來ぬ間に旭島
なにを石濱月濱大濱君を東名に青海島
らくに此の世を潛が浦に他人いらずのいほり島
むねに九の島笑顏にかくしぬしへ宮戸の使ひ姫
うさを晴しに八幡島へ舫ひ船する戸羽の島
るま（今）の逢瀨は二子の島よ末は三峽の松となる
のきに訪る雁が音森のにくや烏が呼び起す
お前驚わしや梅が浦うたふ春雨しつぽりと
くらう（苦勞）忘れて夕の月を見るも鈴木屋五大堂
やまに鶴島瀨の龜島や蓬萊島で暮したい
まつが浦島波のり船に差しつ抑えつ手樽島
けふも便りを松島館よ主の噂で日を暮す
ふみをやるにも筆捨島に泣いて人目を伊吹島
ことの音色に松風きよくあがる簾の觀月樓

（旭　島）
（石濱、月濱、大濱、東名、青海島）
（潛ケ浦島）
（九の島宮戸）
（八幡島戸羽島）
（二子島三峽の松）
（雁ケ音森）
（梅ケ浦）
（鈴木屋五大堂）
（鶴島、龜島蓬萊島）
（松ケ浦島手樽島）
（松島館）
（狩野筆捨島伊吹島）
（觀月樓）

えんは惠比壽に大黑島とならぶ毘沙門布袋島　（惠比壽島、大黑島、毘沙門島、布袋島）
天ぢや〳〵とおつしやいますけれど天も恥らふ后島　（十二后島）
あまになつたかかけたか島か辨天福祿壽老島　（かけた島、辨天島、福祿島、壽老島）
さだめなき世を今より定めぬしと百歳翁島　（翁島）
きみが白旗兜や冑しまに名殘りて懷しや　（白旗島、兜島、冑島）
ゆきは巴とふりにし昔伏見の里も三の八島　（三の八島）
め顏で知らせる心の謎がとけて見交す觀瀾亭　（觀瀾亭）
み代も榮えて二人が中に十二の子寶こがね島　（金島）
しらぬが佛の地藏が島にかくるゝ二人が涅槃島　（地藏島、涅槃島）
えい耀榮華の富山よりもわたしや邪見な主が好き　（富山）
ひとに物云ふ花淵崎で泊りやせぬかと田戸地島　（花淵崎、田戸地島）
もしや尾形の笄島にありはせぬかと主の紋　（尾形島、笄島）
ぜひに菖蒲田海水浴でぬしと旅寢をしてみたい　（菖蒲田海水浴）
すいたお方と千歳のちぎりこゝで目出度く舞の島　（舞の島）

京が日までも加賀屋の二階さみを松島道しるべ　（松島　加賀屋）

マアこんなものサ。併し此の唄の中には、斷常の二見を斷ち切る活きた法語が籠つて居るがサ、只者はノラクラ坊主の醉狂語とも思ふぢやらう。物は何んでも其の扱ひ方で違つて來るぢや。彼の一つの水でも、牛が飲めば乳となるが、蛇が飲めば毒となるぞ。咄々。聖人邪法を談ずれば邪法も正法となり、邪人正法を談ずれば正法も邪法となるぢや。松島へ行く者は、此の島めぐりの唄を一則の公案として參究するが好い。

一〇四　三十年來の苦辛たる宗匠檢定法

荒涼を極めた道場――禪界大革命の大願心――師家を一々其の密室内で點檢――粹に粹ぬ拔いて纏り上げる――古今の大難關――宗通も說通も大自在――乳房が小うては好い子は出來ぬ――生死の大光――糟妄想を切り盡す劒――檢定法の項目――是れを三十回も四十回もやる――一瀉千里に透過――初めの皮切りが一番大切――六大禪師の記名調印

白隱が遷化して以來、年を經るに隨つて祖師の眞風が地に墮ちてサ、何れの道場を見ても、實に荒涼を極めてをる。ソコデ國家が維新の革命をやつたと同じく、我が祖師門下にも大革命を斷行せなければならぬと大願心を起して、禿は此の革命を企てた。世間の革命と云へば、皆な血の

雨を降したものぢやが、衲の革命は双に衂らずして成就する、卽ち宗匠檢定法ぢや。師家の看板を上げて居る漢を一々片ッ端から其の密室内で點檢するぢや。併し是れが又た容易ぢやない、川中島の戰ひぢや、大將と大將との一騎打ちぢや。

それには先づ檢定の條目を定めんければならぬと、衲は、潭海さんや無學初尙、それから伽山さんや獨園さんや滴水さんや鈞叟さんなどに入室して條目を披瀝した。スルト皆の人々が、其の原案を衲にせよと云ふものぢやから、衲が大體を編した上に、それ〴〵六大禪師が點檢商量して、漸く餘蘊なき完全なるのに造り上げた。

ぢやから檢定法の内容と云へば、粹に粹を拔いて、實にハヤ古今の難關を一つに集めたものぢや。是れを手に入るれば、宗通も說通も大自在ぢや。併しサ、斯のやうに並べてみると、何か禪を學文と誤解する者があるかも知れぬが、さうではないぞ。宗通のことは且らく措きサ、說通の段に至つては、微細に微細を盡さぬと好い人物は出來ぬ。丁度乳房が小うては好い子が出來ぬやうなものぢや。それにサ、今日は昔と違つて、衆生の根氣が鈍いから、打坐する者が少い。多くは講釋禪を喜ぶ者ばかりぢや。是等は皆な死見解、糟妄想で、實に是れ生死の大兆ぢや。此の糟妄想が多いから、是れを切り盡す劍も亦た多くなければならぬが、こんなことは室内に入つて、

一人一人になつてみんと解らぬ。先づ衲の檢定法の條目を擧げて見れば斯うちや。

宗匠檢定法條目

第一條　白隱和尙八難透

第一項　倩女離魂　拶處十三ヶ處
第二項　牛過窓櫺　同　十一ヶ處
第三項　南泉遷化　同　十ヶ處
第四項　婆子燒庵　同　七ヶ處
第五項　白雲未在　同　九ヶ處
第六項　犀牛扇子　同　七ヶ處
第七項　疎山壽塔　同　九ヶ處
第八項　乾峰三種　同　十二ヶ處

第二條　臨濟錄

第一項　序　文　拶處二ヶ處
第二項　本　文　同　十八ヶ處

第三項　勘辨　同　三ケ處
第四項　行錄　同　四ケ處
第五項　無言句
第六項　白狀底　同　五ケ處

第三條　汾陽和尚十智同心
等四條　碧巖百則
第一項　圓悟禪師　無邊風月の頌四句
第二項　同　萬斛盈舟の頌四句

第五條　首山綱宗偈
第六條　十重禁戒
第七條　達磨無相心地戒體
第八條　達磨呈綱宗圖　一百八字を以つて偈と爲す。
第九條　虛堂錄中代別百則
第一項　代語　四十七則

第二項　別語　五十三則
第十條　五位
第一項　本語　拶處二十五ケ處
第二項　呈語　同　十一ケ處
第三項　神儒佛配比分同　二十ケ處
第四項　白隱和尚德雲閑古錐の頌
第十一條　末後牢關
第十二條　最後一決
以上十二ケ條

附言
一、無門關　四十八則
一、槐安國語
第一項　上卷　二十四則
第二項　下卷　二十四則

第三項　拙古十則

一、葛藤集

第一項　上卷　百二十七則

第二項　下卷　百四十五則

一、白隱隻手調　四十八則

一、白隱無字調　四十五則

此の外、機關、法身、言詮、經文、和歌、神道等五百有餘則

以上が衲の三十年來苦辛になつた提案ぢや。是れにサ、柏樹軒潭海、樹王軒無學、日多窟伽山、適隱軒釣叟、退耕軒獨園、無異室滴水の諸老が大贊成の調印をした。尤も臣道さんも大贊成ぢやが、當直管長ぢやから提出案に調印はせなんだ。

サー此の檢定通り修業が成就して居れば眞の宗匠家ぢや。是れは三十年も四十年も遣つてのことぢや。併しサ、初入の無字が眞箇に打ツ開かるれば、一瀉千里に透過するぞ。庵原の平四郎みたやうな人があるぢや。古人も能く云ふ、「一疑破るれば千疑萬疑一時に破る」と。それは左樣無うてはならぬ。所謂一處透れば千處萬處透ると云ふは此處ぢや。實にハヤ此の幾千萬則と云ふ

が、一時に瓦解氷消した位、心地好いことはない。それぢやから初めの皮切りが大事ぢや。其處でウンとやらして置かぬと不可ぬから、檢定法も左樣云ふことにしてある。ソコデ此の案が出來上つて、前に云ふた人々の記名調印も濟んだのは、丁度明治二十六年の春頃ぢやつた。

一〇五　衲は宗派議會で堂々と喋舌つた

議會へ檢定法を提出――ソラ又た南天棒が出て來た――今度は庭詰をせんでも濟む――宗匠を一々本山に呼び寄せる――此の南天棒が憎まれ役になつて――宗匠の假名を魂奪して再行脚を命ずる――豈計らんや滿場一致の大贊成――是りや變ぢやわい――そこに役員等の魂膽

其の年（明治二十六年）五月一日から京都の大本山妙心寺に宗派の議會があるので、それに宗匠檢定法を提出する爲め、衲は又た雲水姿で京都へ上つてサ、

「議會に建言があるから、庭詰をやつても此の案を提出せねば置かぬ。」

と、頑張つたものぢや。衲の庭詰と云へば有名なもので、前にも寺班の時遣つたものぢやから、本山の役員も、

「ソラ又た南天棒が出て來た。三日でも四日でも庭詰を遣られては困る。」

と云ふやうなことで、お蔭で今度は庭詰をせんでも濟んだ。ソコデ前にも記した檢定法案を議會へ提出すると、衲に其の理由を說明せよと云ふものぢやから、衲は議會へ向つて堂々と叫舌つた。

「抑も此の事たるや、實に本派の宗旨に於ける命脈の懸る處ぢや。今や國家多事、百般進步の時に當つて、若し天下の宗匠たる者に無眼子が有るとしたら、是れ全く我が宗を傷ける者ぢや。然るに方今の宗匠と稱する者、多くは文字禪、口頭禪、理窟禪、さもなければ只だ御座れの立枯禪か、只管打坐の默照禪ぢや。殊に甚しきに至つては、古則の究明すら辨へぬ者がある。是れ宗の旨を失墜する者ならずして何んぞや。夫れ宗師たる者は、祖師の眞風を扶起し、一箇半箇にても眞正の學人を打出して、以つて佛祖の深恩に報ゐなければならぬ。故に玆に眞正の宗師家か否かを檢定すべく、阜州隱山兩派の老宿と密々に內議を遂け、宗旨檢定票目を以つて、現存せる宗匠を一々本山へ呼び寄せ、不肖なれど此の南天棒が其の衡に當り、檢定法通りに師家を點檢して、若しも躊躇して答話に諦當を欠くが如き者が有れば、直に喚鐘を取上げ、宗匠の假名を褫奪して僧堂を逐ひ出し、紺の麻衣一枚で再行脚を命ずるぢや。是くの如く敢行して行けば、必らず宗旨の大木源を世界に蟬かし、眞の師家、眞の佛子を打出するこ

とが出來る。是れ衲が各師家に代つて、宗匠檢定法を提出するの理由ぢや。諸大德、幸に宗旨の重きこと千萬斤なるを思ひ、奮つて贊成あらんことを。」

と、斯うやつたぢや。衲は此の法案には必らずグヅ〳〵云ふ者があるぢやらうと、兼てから覺悟して居つた處が、豈計らんやぢや、誰れ一人、ウンともスンとも云はぬ、滿場一致の大贊成ぢや。衲は、是りや變ぢやわいと思ふたが、議場で贊同されたことは事實ぢやから、直に時の當直管長要津軒蘆匡道大禪師へ上申したが、そこに役員等の魂膽があつたのぢやテ。

一〇六　納を煽て上げてペテンにかけた

實行がむづかしい——本派の法則になる遣り方でない——結局握り潰し——南天棒を振り廻されては——御無理御尤も——檢定法には天下が震駭——南天棒を試驗する健兒——骨折損の草臥儲け——護法の菩薩に乘替へ——坊主共に慚愧心が起らうかと——血脈々たるは居士の正受老人のみ

サー衲の宗匠檢定法案も、首尾よく議會を通つて管長の手許まで上達されたが、其の實行がむつかしいと云ふのと、又た衲の出したのが本派の法則となるやうな遣り方でないと云ふのとで、結局は握り潰しサ。何んのことかい。衲は只だ〳〵大法の重きを知つて、法律案の建議案のと、

そんな小面倒な區別は知らなんだ。それがマア衲の失策ぢやつた。其の時の本山の役員等も今日此の頃ぢや彼の折實行法を講ずれば好かつたなぞと、臍を噬んで居るさうぢやが、喧嘩過ぎての棒ちぎりで、今更何んと云ふた處で役にや立たぬ。

何んでも彼の時本山の奴等は、南天棒に庭詰をやられちや困る、彼の南天棒を振り廻されちや大變と、衲に恐れてサ、滿場一致で贊成したのぢや。祖師の眞風を扶起しやうの、禪の本分に盡さうのと云ふ正當の考へからぢやない。謂はゞ衲を煽て上げてベテンに掛けたのぢや。惡い奴等ぢや。帝國議會なぞでも往々左樣云ふことをやるさうぢや。ソレぢやから眞の憂宗の人が無くなると同じで、國家でも年一年と國士が無くなつて策士ばかりになる。役員も議員も無眼子ぢやから、衲の檢定法案には正面に敵對が出來ぬので、表面たけ御舞理御尤もで猫糞を極めたのぢや。管長の匡道さんも六人の師家も衲も、隨分馬鹿な目に逢ふたものぢや。併し夫れも無理はないかサ。

天下の宗匠と云はれる者でさへ、南天棒の唱道した檢定法には震駭したのぢやもの、身過ぎ世過ぎに禪坊主のなりふりをした衣桁坊主なぞには、猶更進んで此の佛祖の涙川に身を投じやうとする者はない。何んにしろ落第すれば、一衣一鉢の再行脚と云ふのぢやから、名利に耽つて居

る者が應せぬのも當り前ぢや。默りこくつて金でも貯めて、管長になる運動費でも拵へやうとする奴等ばかりで、宗旨のことには一向頓着せぬぢや。何處かから此の南天棒を試驗してやると云ふ健兒が、一人位は出て來るかと思ふたが出て來せぬ。檢定の試驗役は南天棒の專有ぢやない。法海はお互の共有財產みたやうなものぢやから、力の有る者なら、誰れでも取るが好い。是れと云ふ者があれば、何時でも天下の法柄を渡すぞ。處が二三の者の外は、衲に檢定を求やうと云ふ衲僧すらなかつた。實にハヤ嘆かはしき極みぢやぢや。

ソコデ衲もサ、こんなに腐つた現代の宗師共を燒き直さうとしても、骨折り損の草臥儲けで、とても其れ丈の効能はない。是りや一層のこと、山岡が云ふたやうに、護法の菩薩を造つて、傳道の菩薩を鞭達したら、多少とも彼等に慚愧心が起らうかと思ふた。佛も、

「末世の佛法は大心の凡夫に附囑す。」

と云はれたぢや。白隱が出る前の頃も傳道に人を缺いて、血脈々たるは只た僅かに居士になつてゐた正受老人一人ぢやつた。此の正受がサ、白隱を得て大法を繼ぎ留めた。ぢやなら衲も居士や大姉を民間に打出して、有力の護法の士姉を造ることにしやうと決心した譯サ。

一〇七　乃木將軍と紀念の撮影

露双劍を透つた後も參禪は怠らぬ——仙臺へ赴任——露双劍の使ひ工合を物語る——毎日曜日に入室——母堂と令息を同伴——臺灣へ行く暇乞——二人へ一場の訓誡——直の一字を説く——直は大和魂——修養のない者が遠くから乃木さんを見て

乃木さんは東京の道場で「露双劍」を透つた後も孜々として參禪は怠らなかつた。衲が毎月東京の道場へ十日宛行く時は、將軍も在京すれば必らず入室したが、其の後日清の役が終つた時に、將軍は第二師團長に補せられて仙臺へ來られた。因緣と云ふは不思議なものぢや。ソコデ將軍は早速瑞巌寺へ遣つて來られて、日清役の快談から、露双劍の使ひ工合を物語つた。それからは毎日曜日、雨でも風でも雪でも決して休まず通はれた。天氣の好い日なぞは母堂を連れたり、時とすると二人の子供衆を伴ふたりした。寺へ來れば必らず入室ぢや。熱心なものぢやつた。

又た將軍は臺灣の司令官に赴任された時も、二人の令息を引き連れて來て、

「老師、今日はお暇乞ひぢや。どうか二人の者にも一場の訓誡をして下さい。」

と云ふので、衲は將軍と二人の令息を前に置いて、「直」の一字を説いた。

直の字は中々意味のある字ぢや。慕進なぞと云ふ段には、傍目も振らぬと云ふのぢや。北條時

宗が蒙古襲來の時に無學祖元禪師に問ふと、祖元が、

「慕直に進め。」

と敎へた。達磨は又た、

「直に人心を指す。」

と云ふた。ぢやから「直」の一字は大和魂と云ふても好いと、斯う云ふ意子合の訓誡をした。

それから是れが當分お別離と云ふので、雄島で紀念の寫眞を撮つた。乃木さんと衲との外に、二人の令息と隨行の人とが寫つて居る。此の寫眞は前に玉木さんが衲の處へ送つてくれたから今でもある。又た雜誌の「棒喝」(第十號)にも掲げたから、知つた者もあるぢやらう。

斯のやうに乃木さんは母堂にも令息にも禪の道を敎へられたのぢや。乃木さんの事を書いた本も世間に大分出たやうぢやが、乃木さんが斯うして精神を修行されたと云ふ大切なことが皆な缺けて居る。無理もないかよ。乃木さんのやうに坐禪も修養もせぬ者が、遠くから乃木さんを見て自分の無修養な無見地な處から、彼此と御託を吐くのぢやからサ。

一〇八　南天の棒より高き鼻の先

政宗公の祥月命日――木像の鼻の先を缺く――舊藩士の騷ぎ――不敬事件と云ふて迫る――郷に入つては郷に從へ――雄島に引籠る――狂歌五首を壁に貼つて素知らぬ振――如何かして失敗させやう――瑞巌を退きませう〳〵――正々堂々として退山

衲が前にも云ふ宗匠検定法案を提げて京都へ上つて居つた留守の中にサ、丁度伊達家の祖政宗公の祥月命日に當つたぢや。此の日には瑞巌寺にある政宗公の木像を開扉するので、近郷近在から澤山の參詣人があつて、其の混雜は中々ぢや。處が小僧が燈を點して木像を見せるので、鼻の先へ近く燈を付けたものぢやから、木像の鼻が大層燻つたさうな。ソレデ執事の者が其の燻つた處を布巾で拭はせたぢや。其の時如何誤つたものか、圖らず木像の鼻の先を缺いて仕舞ふたぢや。

サーさうすると仙臺の舊藩士等がサ、故意に政宗公の木像を燒いたの何んのと、針小棒大に言ひ觸してからに、各處に集會して、衲が處へ不敬事件ぢやと云ふて迫つて來るぢや。世の中に不敬事件と云ふは、そんなことではないと云ふても、いつかな承知せぬから、マア〳〵郷に入つては郷に從へぢや。例令小僧等の過失でも、責は住職にあると思ふてサ、其の年の九月から雄島の妙覺庵へ引籠つたぢや。それでも色々なことを云ふて來るから、狂歌を五首ばかり書いて、壁に貼り付けて置いた。それはサ、第一番に、

南天の棒より高き鼻の先

次にサ、

南天の棒は世界の船となり
　勸告員も共に乘せ行く

南天の棒を變じて菊の花
　香よりも高き秋の松島

松島や雄島の月は變らねど
　千々の浮雲なに嘆ぐらん

松島の岸に打たれて散る月も
　風風ぎぬれば丸くこそなれ

と。ソコデ衲は素知らぬ振りして提唱本の書入れをやつて居つたぢや。

併し兎に角小五月蠅いぢやテ。それと云ふのが、例の宗匠検定法で天下の怨を買つた衲ぢやから、坊主共は如何かして衲を失敗らせたいと思ふて居つたらうサ。衲にや野心なぞは片フカもない、大慈悲を以つてしたのぢやが、先方が邪道と解るから仕方がない。色々面倒ぢやつたから、

衲もとう〳〵、

「サー瑞巖を退きませう〳〵。」

と、本山へも云ふて遣つたので、本山でも後住になるべき人を撰んで、釋薩水と云ふ人が來ることになつてサ、其の人が來ると共に、衲は什物なぞの引續を了して、正々堂々と退山をやつたぢや。

五雲閣で茶禮が濟むと、本堂に就いて、

「松州の風月盂底に收む、大喝一聲正に門を出づ。請ふ看よ、此の翁去住無し、南天棒下盡乾坤。

別別

愛す斯の一棒龍と化し去り、松州を抹殺して雲霧皆し。　闕。」

と、大喝一聲してサ、

「ハイ左様なら。」

と、瑞巖百二十四世の南天棒鄧州は、南天棒を提げて得々として去つたぢや。

一〇九　どうしてお寺では此の年を越すか

直に大梅寺へ晋山――關東一の貧乏寺――萬山木像碑――道を慕ふ士は矢ッ張り集る――大衆は居るわ正月は來るわ――今年の貧は錐も無く地も無し――其日暮しに越されぬを越す――修行も愚圖々々しては居られぬ――大雪の臘八接心――心境一致――二祖に相見

瑞巖寺を退くと、直に大梅寺へ晋山ぢや。關東第一と云ふ瑞巖から、同じ關東第一でもサ、貧乏の方で第一と云ふ大梅へ移つたのぢや。此の大梅寺は名取郡の茂庭と云ふ處に在る。支那の大梅寺は法常禪師が有つて名高いぢや。彼は馬祖下の人で、大梅に在ること二十年にして心境開發したぢや。

處で此の大梅の貧乏なことゝ云ふたら話にならぬ。大梅へ行つてみよ、今でも斯う云ふ碑が建つて居る。

萬山木像碑の記　（原漢文）

陸前國名取郡蔑庭村綱木靈龜山大梅寺は、瑞巖九十九世雲居國師の開山、終焉墳墓の地なり。萬山頂に在り。昔時番二番三の兄弟、該山の守護神と成る。國師、松島退山後、此の山に來錫し、法憧を建て綱宗を振ふ。爾來數百年、奥羽の道場と稱する而已にして、敢て宗乘を擧揚し、衆を接し、人の爲めにする者有

る無し。然るに明治三十九年十一月、野衲瑞巖退山後、雲衲七八輩を引率して百般を辨じ、道場を開單す。實に一粒の米無く、一錢の金もなく、破疊一枚も亦た有ること無し。然るに宮城縣知事勝間田稔氏、屬官を率ひ來り、廢宇を見るに忍びず、淨財若干を喜捨し、爾後速かに仙臺市に十方信者を募り、尙ほ郡長守屋孝章氏と共に議し、南天棒一千五百枚を揮毫し、之れを諸有志に頒ち、漸く一宇の禪林道場を成す。野衲拈槌竪拂し、寒暑を三たびして退山す。然して今ま茲に明治四十年二月吉日、妙法教會員中川安助外數十名卒先して該會員等と相ひ議し、山僧の木像並に石碑を建立し、以つて紀念と爲す。之れに依つて雲龜山顚末を略記すと爾云ふ。

銘に云く

南天三尺の棒、幾多の僧を打出す。萬山頂を坐斷し、永く佛祖乘を示す。

南天棒　白崖窟　鄧州誌

と刻してある。是れは衲が海清寺に移つてから、中川なぞが、ヤイ〳〵云ふものぢやから、書いて與へたのぢや。是れを見てもサ、何の位大梅が貧寒窮凍ぢやつたかゞ知れうぞ。

併し道を慕ふの人は矢ッ張り集つて來るぢや。あれは二十九年の暮かサ、大衆は居るわ、正月は來るわ、餅も搗かなくてはなるまいサ。檀徒の者なぞは、

「どうしてお寺では此の年を越すか。」

なぞと噂をして居るぢや。實にハヤ先年の貧は錐有つて地無く、今年の貧は錐も無く亦た地も無しぢや。それでも久隨の者や松島の者等が見舞に來て呉れるので、衲は一首やつたぢや。

みそこしも連木に似たる南天棒

其の日ぐらしに越されぬを越す

是れでマア〳〵年は暮れて、明治三十年の春は來たサ。衲が大梅へ來てからは、眞に修道の者ばかりが集つたぢや。瑞巖あたりの富裕ぢやと、どうも修行に骨を折らぬが、今日喰ふても明日喰ふ米が無いと云ふ段になると、修行も愚圖々々しては居られぬ。ぢやから骨折りも違つて來る。實にハヤ「道は貧道より貴きは無し」と古人も云ふたが、ほんとぢやのう。

ソコデ其の一月十日から臘八大接心を兼ねて、學人の提撕をやつた。丁度十日の前夜から大雪サ。二祖が達磨に逢ふた時は、積雪膝を埋むと云ふことぢやが、其の夜の雪は實に三尺以上ぢや。正に全身を埋めんぢや。それでも願心の者ばかりぢやから、各々大勇猛心でやつた。衲は其の時「無門關」の四十一則、「達磨安心」を提唱したが、實にハヤあんな好い心境一致は、容易に得られるものぢやないよ。臘八なぞは矢ッ張り大雪で二進も三進も取れぬ其の中を、寒風が肌を擘くと云ふやうな時が好いなア。其の方が全く身に浸みるぢや。衲も久し振りに二祖に相見したよ。

それから一月早々、本山に四世の日峰和尚の四百五十年遠諱があつたから出頭したかつたがサ、旅費がないので遂とう行けなかつた。錢有れば千里を通じ、錢無ければ壁を隔てゝ聾すぢや。大梅は二十年間で梅子熟した。マア〳〵南天棒も此處で太らうかい。

一一〇　南天棒と萩の棒は八幡僧堂へ

ニューと出て居た南天――此の棒を喫はぬ者はない――中には卒倒した者もある――入室の前に怖氣が付く――罪もない南天の棒には氣の毒――風呂の薪にでもなつては犬死――八幡へ納める――二尺二寸の萩の棒――棒はなくとも此の腕がある

衲が九州で、牛部屋の脇からニューと出て居た南天を生擒つて、竹篦の代りに用ゐてサ、天下の道場を遍參して、所謂「機に臨んで師に讓らず」で、隨分師家を打ッ叩いて廻つたものぢや。それから愈々法柄を握つて、大成に、圓福に、弘濟に、曹溪に、道林に、瑞巖に、大梅にサ、店出してからは、一入働いた。衲の室内に來る奴に、此棒を喫はぬ者はない。道ひ得るも南天棒、道ひ得ざるも南天棒ぢやから、どうしても喫はしたぞ。中には此の棒で卒倒した者もある、大怪我をやつた者もあるがサ、又た此の棒頭に眼を開いた者も數知れすぢや。

有り難や師の恩思ふ蚯蚓脹れで、誰れが憎くて打たうぞい、皆な慈悲の涙ぢやがサ、是れを涙と汲け分けるまでが容易でない。今の時代は骨折らずに樂をして悟りたいと云ふやうな下劣の根性の者ばかりぢやから、室内に入る前からモウ怖氣が付いて、入室の者が段々減つて來る。近頃の參禪會では入室がなくて提唱ばかり聞きたがる〻それも矢ッ張り南天棒があるからぢやと思ふてサ、罪もない南天棒には氣の毒でならぬぢや。此の棒も實に是れサ、三十年來終始一貫、傍を離れず衲に隨侍してくれたのに、此の先き風呂の薪にでもなるやうでは、是れ迄の法施が何んにもならぬ。まるで犬死ぢや。マア〳〵怪我過失の無い中に、八幡に納めて置かう。八幡は最初に草鞋を脱いだ處で因緣も深いから、永遠に守護神となつて欲しいと思ふて、衲が扇谷の熊耳峰（達磨堂）を再建の時、荒蕪地から堀り出した萩の棒（太さ七寸五分、長さ二尺二寸）と共に、八幡の僧堂へ納めた。

併し出せば何時でも出るぞ。お望みならば今でも出す。いや棒が無くとも此の腕があるよ。南天棒の腕は末だ！〳〵大丈夫ぢや。何時でも我と思はん者は出て來い。當年の意氣は少しも變らぬぞ。意氣有る時意氣を添え、風流ならざる處也た風流ぢや。此の時一處に祖錄も何も彼も八幡の寶庫へ納めたよ。衲が六十の歳（明治三十一年）ぢやつた。

一二一　喰へぬから頭を剃るデモ坊サン

圓福で再び無門關を講ず――生死が見えぬには愛想が盡きる――南天棒がうなつて抑え切れぬぢや――願心に相違があるから――新義派の開祖覺鍐――八歳の時の大決心――都合が好ければ何時でも還俗――意久地の無さ加減――住職になる履歴取り――公案買ひ

八幡の宗般が支那を漫遊するので、祢に留守中の接衆をせいと云ふぢや。因縁の地ぢやから可厭とも云へず。明治三十四年の雪安居には八幡で「無門關」を講じた。丁度それが明治十二年の雪安居から二十二年目ぢや。二十二年前にや大衆と一處に山作務もやつたが、今度は其れはやらなかつた。併し隨分棒はうなつたよ。

實にハヤ驚くのは、大衆の骨を折らぬこと夥しい。南天の誓詞の松は、高色青々として居るが、達磨堂の坐禪僧は、根つから生死が見えぬには、イヤハヤ愛想が盡きたよ。一箇半箇でもみつしりやる者があると頼母しいがサ・グツカ〳〵して居られると、南天棒がうなつて抑え切れぬぢや。それも祢の願心と堂内の雲衲等の願心とに相違があるからぢや。

坊主と云ふは、大菩提心を以つて遣るでなければ、とても三界の大導師、四生の父母となることは出來ぬぢや。昔し覺鍐和上と云ふた眞言宗新義派の開祖はサ、八歳の時ぢやつたが、初めは

親より偉い者は世の中に無いと思ふた。處が其の父が地頭に頭を下げるので、今度は地頭が偉いと思ふと、又た其の地頭が勅使に向つて頭を下げるから、此の覺鍐は不思議に思ふて或日父に向ひ、

「勅使より偉い者は無いか。」

と聞くと、父は、

「世の中では天子様が一番尊い偉いものぢや。」

と云ふので、彼は更に、

「天子様になれるか。」

と問ふた。ソコデ父が

「天子様にはなれぬ。天子様と云ふは何千年の昔に只だ御一人國に顯はれて、其の御一人の御子達が子供を產み孫を產んで、天下國家を治めて來られたものであるから、其の他の者が天子様になることは出來ぬ。」

と敎へると、彼は泣き叫んで、

「嗚呼天子様の子に產れなくて殘念ぢや。私は日本一の偉い人にならうと思ふて居たのに。」

と、大層落膽したさうぢや。スルト土地のお寺の和尚が、其の事を聞いたとみえて、今の覺鐵に向つて、

「オイ、泣かなくとも好い。偉い人になりたくば坊主になれ。坊主になれば宇宙只だ一人となつて、一個の師位は愚かなこと、三界の大導師となれる。」

と云ふた。それを聞いて覺鐵は大決心を以て僧となり、遂に新義派の開祖とまで出世せられた。

然るに今時の坊主共は其樣願心は無くて、喰へぬ奴か已むを得ず坊主になると云ふ具合で、喰へぬから頭を剃るデモ坊主ぢやから、都合が好ければ何時でも還俗する。畢竟寺持になつて家賃も出さず、働きもせず、人も知らねば自分も知らぬ經ばを飛び〳〵讀んでサ、只だ喰ふ爲めになる坊主。それで無きや世を厭ひ官を辭して坊主の、醫者を廢めて坊主の、軍人を廢めて坊主のと、其意久地の無さ加減と云ふたらない。坊主が其樣生半著なとで佛祖の慧命が續けるかい。叢林に掛錫に來るとは奇特な心掛けぢやと思ふと、住職になる履歷取りぢや、修行の爲めぢやない。中には殊勝にも能く入室して勤勉すると思ふと、是れも矢ッ張り公案買ひぢや。お師家さんと云はれたい爲めぢや。やがて老師と云はれたら、管長さんにでもならうと云ふ名利心や野心の外にはない。ぢやから衲が一心になつて打出しやうとしても、八幡の堂内に是れと云ふ奴が一人も無

かつたよ。實にハヤ呆れ果てて仕舞ふたわい。

一一二　衲が在家接衆の會の始め

意久地のない坊主共の仕科が面白くない——雨安居は休講——又た中國九州の道場めぐり——垂水の相國別院——古人の消息に接しやう——佐賀の安心會——毎月播州から——寺に引込んでゐてはならぬ——長德寺の住職——無轉智の大王——僧俗混淆の一大接心會の成立

意久地のない坊主共の仕科が面白くなくて、三十四年の雨安居は休講してサ、先づ山陽道を西へと志し、岩國へ出て、それから下松、馬關へ着いた。其の途中、臨濟、黃檗、曹洞各禪門の道場と云ふ道場は殘らず叩いたが、何處も同じ秋の夕暮で、前年と少つとも變つたことはない。ソコデ遂に九州に渡つてサ、肥前肥後から筑の前後を檢べて八幡へ歸る路に、播州の垂水を通ると其の時が丁度達磨忌ぢやつた。處が此の垂水には相國寺の別院が有つてサ、是非衲に來てくれとのことぢや。衲もサ、今のやうに僧堂の坊主共が不願心ぢや仕方がないから、此處に暫らく閑居し、少し調物でもしながら古人の消息に接しやうと思ふたから、

「一箇でも半箇でも好い、眞箇に修行底の者があれば行つてやらう。」

と云ふので相談が出來て、垂水の相國別院に移ることにしたぢや。

それから其の翌年ぢやつたが、九州の佐賀に安心會と云ふ接心會が出來た。佐賀は天下の豪傑も出た處だけに、坐禪をせうと云ふ願心な者は隨分有つた。今は故人になつて仕舞ふた坊サマ達も中々熱心で、衲を毎月播州から迎へて接心をするぢや。是れがサ、衲が在家接衆の會の始めぢや。天下の道場を見盡した衲は、是れからは如何しても國士を打出せにやならぬ。それには寺なぞに引ッ込んで居つては埒は明かぬと、今度は爲人の行脚と出掛けたぢや。

ソコデ其の發會式を佐賀の牛島の長德寺と云ふ寺で遣つたぢや。此の長德寺の和尚は、若い頃は中々參禪もしてサ、間も好きや一方の旗頭にもなる者ぢやつたが、惜しい哉、悟りを誤解して無轉智の大王となりやがつてサ、寺の庫裡を牛肉の販賣所にしたぢやないか。文殊業禪師のやうなものなら兎に角サ、一隻眼をも具せぬ僧が、肉の販賣をするとは、實にハヤ言語同斷ぢや。假令境界が好うても南天棒は好かぬ。文殊業は最初は平人ぢや、所謂屠者ぢや。或日猪を戮する次、忽ち心源洞徹した。ソコデ直に戮刀を棄てゝ比丘になつた。其の時の偈に、

「昨日は夜叉の心、今朝は菩薩の面。菩薩と夜叉と、一條の線を隔てず。」

とやつた。實にハヤ赤裸々ぢや。ソレデ文殊の道禪師に相見した。此の業禪師の「菩薩と夜叉」

の話で長德寺の和尚は至心に慚愧し、遂に自坊を道場として安心會と云ふを設け、茲に僧俗混淆の一大接心會が成立した。其の時も衲が、

「續いて遣るならば行つてやらうが、一二度のことなら御免々々。」

と斷つたら、誓つて繼續してやると云ふものぢやから、衲も引受けたぢや。發會式を擧げたのは、明治三十五年八月五日ぢやつだ。

一一三　海清の風月一層高し

海清寺へ晋山——專門道場にしたが結末が付かぬ——宗因禪師の道場——藤原藤房の剃髮——宗因に授けた印狀——宗因以上の願輪に策つ——驢を度し馬を度す——巨鼇會を設ける——「二僧捲簾」の話——眞宗と淨土との僧が入證——他力の本願より自力を諦得——阿彌陀の頂寧を坐斷

衲が現住の海清寺へ晋山したのも、同じ明治三十五年ぢやつた。是りや先住の瑞岡淡海さんが逃出したからぢや。淡海さんも此寺を開いて專門の道場にしたは好いがサ、結末が付かぬことになつたぢや。ソレデ遠州中泉の咄哉庵へと逃げ出した。

全體此の海清寺は妙心寺の第三祖無困宗因禪師の道場ぢや。此の宗因禪師は授翁弼の法嗣で、

此の授翁と云ふは、後醍醐帝に仕へた彼の有名な藤原藤房のことぢや。藤房が剃髪して關山に嗣いで妙心の第二世となり、遂に宗因を打出したのぢや。授翁が宗因に授けた印狀なぞは立派なものぢや。それはサ、

世尊、正法眼藏を以つて摩訶大迦葉に附屬してより以來・西天此土、祖々相傳して山僧に到る五十七世、血脈斷ぜず、宗風茲に在り矣。上人既に透關の眼を具し、脚、實地を踏んで、綿々密々として聖胎を長養す。異日、人天を利益せば、報恩足らん耳。

應安四年孟皆丁潮　　授翁宗弼

と。授翁遷化の後、宗因は妙心寺の第三世となり、後に此の海清を營んで此寺に住はれた。ぢやから無因禪師の塔處は海清寺ぢや。

斯う云ふ由緒のある第三世の道場へ衲が又た住んで、無因以上の願輪に策つことになつた。是りや本山からの特命ぢやつた。八月二十八日に晋山した。其の時の偈は斯うぢや。

「應永年間の禪定窟、海清の風月一層高し。好し浮木となる南天棒、盲龜と巨鰲とを擇ばず。關。」

と。是れを能く看るが好い。

ソコデ海清寺で雪安居を初めてやつた。種々な階級の人が來たよ。驢を度し馬を度す南天棒には嫌ふ底の法は無いからサ。僧も來れば俗も來る、女も來れば男も來る。車夫が來るかと思ふと檢事正が來る、學校の先生が來るかと思ふと大工も來ると云ふ次第で、其の時の雪安居は非常な賑かさぢやつた。衲が海清へ來てからは巨鰲會と云ふを設けて、平素でも毎月二、五、七、十の日を提唱日と定めて居るのに、殊に雪安居ぢや。衲は先づ「無門關」の第二十六則、「二僧捲簾」の話を拳した。其の時の開講に、

「大道元來得失無し、尺は長く寸は短し電光の中。開演す今日捲簾の話、滿目の楓林霜葉紅なり。」

とやつた。それから此の雪安居には、眞宗の僧と淨土の僧とが入證したぢや。他力の本願より自力を諦得して、頗る明解ぢやつた。坐禪をしやうとする者はサ・行住坐臥、一擧手一投足、萬事を總べて等閑にすべきぢやない。室内だけの禪ぢや役に立たぬ。坐禪は空理空論ぢやない。理窟の南無阿陀佛ぢやイザと云ふ時役に立たぬぞ。阿彌陀を打ッ切つて仕舞へ。此の眞宗の坊サマは阿彌陀の頂寧を坐斷したぢや。眞宗や淨土にも斯う云ふ行者があるから、禪宗の和尙サン達も油斷はならぬぞ。

一一四　觀世清廉と長田秋濤

四喝の提唱を聞く――太鼓を打つには四喝を透過――長田秋濤と同道――太鼓の四打法――代々の參禪――「山姥」の謠ひ方――「江口」の足の踏み方――石女の舞、木人の歌――觀世はグッと骨折る――長田には無字――擔雪居士の安名――請に依つて蹉跎を與ふ――謠曲の根底は禪

三遊亭圓朝が山岡の處へ入室して、演藝の奥義、無舌の落語を悟つた話は前にも云ふたが、能樂の大家であり、觀世の家元である觀世清廉がサ、衲の「臨濟の四喝」の提唱を聞いて、初めて太鼓と云ふものは、臨濟の四喝を透過せねば眞正に打てぬと云ふことが解つて、其の頃早稲田大學の講師をして居つた長田忠一に相談すると、長田は、

「南天棒は現代の荒宗匠ぢや。宗匠檢定法を主張された禪門の棟梁ぢやから、一處に道場へ行つて參禪しやう。」

と云ふので、二人は態々東京から西の宮へ遣つて來たぢや。

ソコデ相見も濟み、師弟の約束の禮も終つたから、衲は觀世に太鼓の四打法を敎へたぢや。即ち、

「或時の太鼓は金剛王寶劍の如く打ち、或時の太鼓は踞地金毛の獅子の如く打ち、或時の太鼓

は探竿影草の如く打ち、或時の太鼓は太鼓の用をなさぬやうに打て。」

と。併し是りや坐禪せにや知れぬぢや。弘法が偉ふても、傳敎や親鸞や日蓮が偉ふても、此の太鼓の打ち方は知らぬ。是れを知るは我が宗の外にはないぢや。ソレデ觀世家では代々參禪して、名々格外の禪機を修養して居る。又た其の傳の奥書にも、太鼓の事に就いては臨濟の四喝が其の儘に傳へられてある。

それから衲は觀世に、

「山姥の謠曲を謠ふてみよ。」

と云ふと、觀世は精神を籠めて謠ふた。衲は「クセ」の處の謠ひ方なぞを質問してサ、今度は「江口」ぬ舞はせた。是れでも足の踏み方を質してサ、

「石女舞ひ成す長壽の曲、木人唱へ起す太平の歌とは如何ぢや。」

と問ふた。スルト觀世はグッと詰つた。「山姥」でも「江口」でも、謠ひも舞ひもする觀世が、石女木人には行詰つて、サーそれからは汗と膏ぢや。觀世はグックと骨折つた。又た長田には無字の一則を拈提させた。二人とも一心不亂にやつてサ、とう〳〵石女木人の則が透つたぢやないか。願心と云ふは大神力なものぢや。長田も三十五拶處まで透つたが、二人は僅か二週間を限つ

て來たので、用務の都合で歸京することになつたから、觀世では宗家の風習として、「雪」の一字を加へて別號を附けることになつて居るので、衲は觀世に擔雪居士の號を授け、長田の方は秋濤の雅號を居士號としてサ、請に依つて觀世には「石女舞成長壽曲、木人唱起太平歌」、長田には「趙州露刃劍、寒霜光焰然、纔擬是如何、分身成兩斷」と揮毫してやつた。是れは明治三十六年七月二十二日のことぢや。

元來謠曲の根底は禪から出來上つて居るので、從つて其の作家なぞも、多くは禪宗の坊サマぢやつたさうな。觀世に遣らせた「山姥」や「江口」は一休和尚の作ぢやとも云はれてゐる。それぢやから眞個に見性したものぢやないと、謠曲や能は出來るものでない。謠ふても色卽是空が知れなきや仕方がないぢや。それでは外の唄を謠ふて居るも同じぢや。

一一五　觀世の四打太鼓は南天禪の觸太鼓

觀世や長田の修行が大評判——新聞や雜誌にも出る——謠曲の檢定——賊槍を奪つて賊を殺す——來るわ〳〵毎日大入——護法菩薩のみの道場——神彩風動の妙境——法號と大安陀衣とを授ける——藝術の中に禪の公案——墨蹟を舞臺の床に

觀世や長田が衲の處へ來て修行したと云ふことを、何處から聞き出したものかサ、其の頃大評

判となつて、新聞にも書けばサ、雜誌にも書いたものぢや。佐賀縣の教育雜誌なぞにも出たので、處々から參禪を申込んで來た。それに東京の能狂居士田中泰太郎と云ふ能樂の古實家が能樂連中に話してサ、衲の接得振りを評判したものぢや。

「觀世に「山姥」を謠はせ、「江口」を舞はせて檢定したなぞは、自分は禪は知らぬが、能の方から云へば、確かに能に就いての宗匠ぢや。是りや是れ賊槍を奪つて賊を殺すの妙術ぢや。南天棒ならで、他に斯樣事をやる禪僧はない。」

と、頻りに評判したので、サー俗人の參禪者が來るわ〳〵、毎日大入サ。それで衲の行く處は悉く皆な護法菩薩のみの道場となつた。なんのことはない。觀世の四打太鼓は南天棒禪の觸太鼓みたいぢやつた。實にハヤ大法が民間有力の護法菩薩に傳はる時かサ。

觀世は其の後も修行を怠らず、遂に神彩風動の妙境に入り、臨濟の四喝を手に入れてサ、自由に太鼓を打つた。ソコデ衲は改めて法號を德雲院峰頂擔雪居士と與へ、大安陀衣を授けたぢや。藝術の中には、何れにも禪の公案が澤山あるから、藝術の妙域に達した人は、識らず〳〵禪を修して居る譯ぢやあるがサ、觀世と同じやうに、自己の藝術を極めると同時に、一面には禪師に就いて修行して、其の奧義をハツキリするが好い。猶更禪宗の坊主等は、一皆本分に向つて修行せ

ねば、能樂の觀世にも劣る次第ぢや。御用心々々。觀世は衲の書いた墨蹟を、平素舞臺の床に掛けて置いたさうぢや。

一一六　利巧を剝いて馬鹿になれば好い

兎角小賢しくなりたがる――勝他心は大器でない――衲が世界中の馬鹿の隊長――馬鹿加減を修行――雨漏りに笊――雨天の茶摘み――馬鹿のする事は相手を見ない――借金取りは馬鹿が怖ろしい――安心會を靈山會と改む――汽車や船の中を經處――賢い儘で一生を棒に振る

「大賢は愚に似たり」と云ふことがあるがサ、何んでも愚にならなくては不可ぬ。處が中々左樣愚にはなれぬもので、兎角小賢しくなりたがる。人に褒められたい、馬鹿にされたくないで、坐禪をすれば直に公案を覺えたがる。何をやつても利巧になりたがる。是れは勝他心と云ふて大器でない、小器ぢや。禪は百合の皮を剝ぐやうに、一枚々々と利巧を剝いで馬鹿になれば好いぢや。衲はつまり世界中の馬鹿の隊長ぢや。衲の處へ來るのは、馬鹿加減を修行に來るのぢや。妙心寺の開山の關山國師は、雨漏りに桶を持ち出した小僧をシッちかつて、笊を持つて來た奴を褒めたとサ。それから雨の降る日、茶を摘む雲衲を見て、茶の木を根元から切り取つて、庫裡の内

庭で摘ましたこともある。禪のことは迚も目の子勘定ぢや分らぬ。

元來馬鹿なものが馬鹿になるのなら、不思議も殊勝もないがサ、十分智識の有る者が、其の智識を捨てゝ馬鹿になると云ふのぢやから、一寸合點が行かぬぢやらう。併し世の中を見よ。馬鹿のする事は單一無雜ぢや、分別もない、相手を見ない。ぢやから借金取りは馬鹿が一番怖ろしい。馬鹿に付ける藥はない。馬鹿も是れ迄にならなければ駄目ぢや。

佐賀の安心會の中にも、大分境界が進んで來た者があるが、まだ〳〵智慧が出てならぬ、小賢と小賢との寄合ひぢや。それから安心會の會場も、長德寺を止めて高寺に移し、靈山會と改名した。高寺は南禪寺派の寺ぢやが、管長からの依賴で、衲が兼務をして居つた。西の宮からは大分に隔つて居るが、それでも熱心な會員が盡力して、明治四十三年まで繼續したので、衲も晝夜兼行で汽車や船の中が寢處と定めて九州下のをやつた。其の間隨分な居士大姉を打出したよ。所謂馬鹿に成り了せる者を造へたぢや。世の中の百人の中九十九人までは馬鹿に成り了せずして、賢い儘で一生を棒に振つて仕舞ふ。情けないことぢや。

一一七　伊丹町の拈華會と無門會

當今は宗教の革命時代――覺め方が曲つて居る――まるで衣屋の手代――資輪法輪兩つながら――法輪に一向に轉ぜぬ――鐵船水上に浮び機輪宇宙に飜る――二十四の禪流が花園内に咲き競ふ――時と處と機とに依つて接得――三十六年十一月に發會――後に無門會と改稱

衲が前にも云ふ、當今は宗教の革命時代ぢや。坊主共の眼も疾に覺めなくてはならぬのが、覺めるには覺めても、覺め方が曲つて居るものぢやから、我が宗なぞの革命も段々遲れて來たぢや。本山でも思ひ切つて遣れば妙いが、矢ッ張り夫れだけの者がないから、とう〳〵末寺にお辭義をして金を貰ひ、紫や緋の衣を賣らにやならぬやうになつた。まるで衣屋の手代ぢや。それもマア好い、法輪を轉ずるには資輪も轉ぜなくてはならぬからサ、韋駄天囘向と同じで、資輪法輪兩つながら轉ぜなくてはならぬのに、資輪の方だけせつせと騷ぎ立てゝ、法輪は一向に轉ぜぬから、ちぐはぐの跛車ぢや。

又たお師家さん等は相變らず山間靜閑の幽谷裡に端居して、訪道の一箇半箇を接得するのが、衲僧の能事ぢやとして居る。それも全くの有眼子なら許しもしやうがサ、細眼子の相似禪が飛々禪が多い。そんな風に燻り返つて、佛祖の命脈なぞと待ち設けても、多くは待ちぼうけサ。鐵船水上に浮び、機輪宇宙に飜るの時節ぢや。我が妙心が今日四千に近き末寺を有し、二十四の禪流が皆な花園の中に咲き競ふは何んの因緣かと云へば、關山國師の機略縱横なる接得に依るぢや。即ち其の時と處と機とに依つて接得すべしぢや。「碧巖」を書くも是れを燒くも、又た燒いた「碧巖」を死灰中に求むるも、時と處と機ぢや。今ま此の南天棒は西の宮に居るが、窟中に閑居はせぬぞ。兼て護法菩薩を打出の爲め、南船北馬を辭せぬ勇猛心が有るぢや。

伊州と西の宮とは近い。ソレデ伊州で會を設けたいと云ふから、衲は例に依つて念を押した上明治三十六年十一月二十一日に、墨染寺で發會式を擧げた。晩松居士(山中善二郎)の骨折ぢや。會の名は拈華會と名附けた。此會でも亦た「無門關」を開講したよ。曹洞や淨土の坊サン達に、山多加織の寺西幾久松あたりが、盛んに入室し ものぢや。それ以來、明治三十九年迄に二十一囘開き、其の年の六月七日から小西利左衛門氏の邸に移して無門會と改稱し、又た四十一年には拈笑會と改めたが、四十二年三月には休會したぢや。

一一八 イヤハヤ得難い代物ぢや

病院長楠田謙藏――飯田が西の宮へ行けと勸める――訪ひ來る人には逢ふのが衲の靈法――なんでも衲を遣り込めなきゃ――書生禪のやうに口先で胡寛化さぬ――

一とう〳〵一週間滯在――留守宅では大騒ぎ――此の時究めずんば病の眞の治療は出來ぬ

衲が六十六歳の臘八接心は、一月の二日から八日迄ぢやつた。其の時東京からは日本橋の婦人科產科病院の院長で楠田謙藏と云ふ人が遣つて來た。此の楠田には、飯田が衲の惡辣なる接得振りを話して、自分が其の昔、道林寺の破れ部屋で露刄劍で行詰つた事から、何や彼や總てを打明けて、聲聞定な楠田の相似禪を說破し、西の宮の南天棒の處へ行けと勸めたのぢやけな。それは後から聞いたがサ、明治三十七年一月二日の朝のことぢや。祝餅の吸物が濟む頃、玄關へ斯う云ふ人が見えて、相見が願ひたいと云ふてをるとの取次ぢや。名刺を見ると、楠田謙藏とある。衲は人には如何な人にでも逢ふが禮ぢやと思ふて居る。何用か知らぬが、訪ねて來るには、それだけの用務があるに決つて居るから、其の用務の善惡邪正、世間出世間に關せず、假令一分時でも訪ひ來る人には逢ふと云ふのが衲の憲法ぢや。

ソコデ楠田を引見したが。其の時の楠田の勢は大變なものぢやつた。彼は曹洞か何かで一寸一枚悟りをやつた。それを飯田に破せられて衲の處へ來たのぢやから、何んでも衲を遣り込めなきや飯田にも濟まぬとでも思ふたぢやらう。處が、

「無と云はずに何んと云ふ」

と云ふ處で、グッと行詰つた。ソコデ衲は、

「そんなことで無字が解れうか。サー如何ぢや〳〵。」

と切り込んだ。楠田は眞の修行の人ぢや、自己を欺くものぢやない。書生禪のやうに口先で胡魔化じたり、習つたり聞いたりしたことで答へる男ぢやなかつた。初めての入室ぢやが願心が違ふ。ソコデ禪堂に入つて坐つた。

楠田は初め、三日の晩歸京するつもりぢやつた。ソリヤ何故かと云へばサ、正月の三日間は病院も休みぢやから、一日の夜行で來て、一寸衲を點檢して歸らうとしたが、ドッコイさうはいかぬ。無字も透らぬのでとう〳〵八日まで遣ることになつたが、其の代り東京の留守宅では、豫定の日に先生が歸らぬので奧さんや病院の助手やが大騒きをして、電報が頻りと來るけれども、楠田さんは、

「此の事此の時究めずんば眞個の醫者にはなれぬ。病の眞の治療は出來ぬ。」

と云ひ、大奮勵を以つて臘八を終つて歸へられた。イヤハヤ得難い代物ぢやつた。

一一九　會の名は楠田醫院接心會

肯心自許底の眞の修行――又た東京へ出て接心――大森の別莊が禪堂――楠田さんでは牛屋を始める――牛の坐禪の仕方が惡いと南天の棒がヒシ〳〵――人が牛の眞似をする――知らぬ者には隨分不思議――東京に南天禪の流出した機緣

楠田が衲の處へ來て無字の錬り直しでサ、今迄は曹洞や臨濟の邪師共に欺されたわい、是れから肯心自ら許す底の眞の修行がしたい。併し其の爲め毎月々々西の宮迄通ふ時間がない。大法は重しとは云へ、大切な病人を預つた醫院を留守にすることもならぬので、衲に東京へ來て呉れいと云ふぢや。衲もサ、楠田の熱心なのを見とるから、

「ウン、ソレナラ行かう。」

と、毎月一週間づゝ接心することに約束が決つて、其の年(明治三十七年)の二月五日から、又た衲は久し振りで東京へ出掛けることゝなつたぢや。其の時の會の名は楠田醫院接心會と名附けて、大森にある楠田の別莊を禪堂に宛てた。併し年末には參禪者も增へたので、會員の便利を計つて、十二月からは會場を楠田醫院の藥局試驗館へ移した。

サ――楠田の別莊では夜分になると、ムームーぢや。ムーがモーと聞えるので、隣り近所では、

「楠田さんの處には、此頃澤山牛がをるやうだが、牛屋でも始めるのぢやらうか。」

と云ふ評判で、或人は其の牛を見付けやうとしたが、遂とう分らなかつたとは笑ひ草ぢや。それから、

「あれは牛が坐禪とかをしてゐるのぢやさうな。なんでも牛の坐禪の仕方が惡いと、南天の棒でビシ〳〵叩くとサ。」

と云ふかと思ふと、

「なにサ、牛の親方が南天棒と云ふ人ぢや。」

「イヤ牛ではない、人ぢや。」

といふので、又た評判が高くなり、とう〳〵、

「人が牛の眞似をして坐禪をやる。」

と云ふ。知らぬ者は隨分不思議に思つたらうサ。

其の時衲は提唱なぞは遣らず、せつせと學人を骨折らせてサ、入室一方で一寸の暇も與へなかつた。是れが最近東京に南天禪の流出して重視せらるゝに至つた機緣ぢや。楠田は衲の會裏で難透難解を透過したから、初めは秀峰と云ふたが、衲が改めて不識居士と安名したぢや。此の接心會

が遂に雪山會となることは後に話さう。

一二〇　死んで死んで死切つて仕舞へ

乃木將軍の出征――三棺となつたら貴僧に同向を頼む――三個を一處に――同向は衲のお手の物ぢやが旅順を取るは將軍の役ぢや――露双劍の試し時――佐世保へ慰問――旅順の陥落――櫻井海軍中佐――「五家參詳」の提唱――殺し果して何もなき時武士と云ふ

明治三十七年は誰れも知る通り日露戰爭のおッ始つた大騒ぎの年ぢや。乃木將軍が出征の時も衲は楠田病院の接心會に來た時ぢやつた。乃木家を訪ねると、愈々出征すると云ふ話があつてサ、

「私が出征の後、三棺となつて歸つたら、貴僧に同向を頼むよ、靜子にも云ふてあるが、必らず一個一個に葬式などして下さるな、三個を一處にするやうに。よろしく頼む。」

と云はれるから、衲が、

「よろしい、引受けた。旅順の海は屍で埋め、山も屍で三十三天まで築き上げて旅順を瞰下せよ。同向は衲のお手の物ぢやが、旅順を取るのは將軍の役ぢや。死んで死に死切つて仕舞へ、殺して殺して殺し切つて仕舞へ。露双劍の試し時は今ぢや。萬歳々々。」

と云ふて別れたぢや。それが三棺ぢやなかつたが、二棺となつたのは誠に惜しいことをした。

其の翌る年の明治三十八年の元旦には、衲は佐世保へ慰問に出掛けた。丁度其の時旅順が陥落してサ、ステッセルが降旗を掲げたと云ふので、軍港の賑かさは物に譬へやうがない。其の狂喜の中を衲は夫々慰問し終つた處がサ、海軍中佐櫻井吉丸氏の斡旋で、將校連から衲に一場の訓話をしてくれいと云ふ注文が出た。此の櫻井中佐は兼てから衲の會下に參じて居つて、自得居士と安名した人ぢや。日清にも日露にも決死隊に入つて、無事に任務を果した名譽の士ぢや。

ソコデ衲は佐世保軍港の阜頭で、「五家參詳要路門」を提唱した上に、一首の歌を詠んで示した。それは、

殺せ殺せ我が身を殺せ殺し果し
何もなき時武士と云ふ

と云ふぢや。此の歌に就いて衲は、

「此の歌を忘れるな。乃木將軍にも毎度の手紙に、まだ我が身の殺しやうが足らぬと云ふてやつた位ぢや。我が身を殺し得ぬ者は眞の武士とは云はれぬ。蔡州城を打破し吳元濟を殺却する底の働きは、乃木將軍にして始めて能くし得るぢや。此の働きは他ではない、無字から來るの

ぢやぞ。自己を殺したくば先つ無字をやるが好い。」

と垂誡したぢや。

一二一　將軍も奥さんも衲も無言ぢや

乃木さんの骸骨――優渥なる御諚――潸然として顔を蔓らせる――二子の遺骨はまだ其の儘――引導の約束――取り出した二つの包――言葉の出しやうもない――衲が繩を切つて包を解いた――衲の引導が濟まねば――親として彼の包に手を觸れるは

それから明治三十九年の春ぢやつた。楠田の接心會接了の後にサ、乃木邸を訪ふて、凱旋の祝辭や、二人の令息方の吊意を述べた。スルト乃木さんは、凱旋復命も濟んで、闕下に骸骨を乞ふたが許されなかつたとの話があつた。乃木さんの骸骨は眞箇の骸骨ぢや、色心共に斷つ所謂兩斷ぢや。それが畏れ多いことには、明治天皇陛下の優渥なる御諚に接したのぢや。

ソコデ衲は、

「留守中に御令息の御吊に伺つたが、何んにせよ將軍が凱旋の上と云ふことぢやつたが、モウ遺骨は埋葬しましたか。」

と問ふとサ、百萬の大軍を率ゐて敵を鏖殺する程の勇者でも流石に潸然として顔を曇らせて、

「イヤまだ彼の儘ぢや。囘向は貴僧に約束がしてある。實は骸骨の勅許を得て、三棺一處にと思ふたが、今は其れも成らぬので、其の中貴僧が見えたらと、心密かに待つて居つた次第ぢや。ぢやから二つの遺骨も、戰地から送つて來た儘、繩も解かずにある。」

と云ふので、早速奥さんに云ふて二つの包を取り出してサ、衲が繩を切つて包を解いた。將軍も奥さんも衲も無言ぢや。言葉の出しやうもない。兄勝典中尉は南山の激戰に屍を馬革に包みサ、弟保典少尉は二〇三高地奪取の激戰に、惜むべし花の蕾の若武者も護國の鬼と化した。實に悼ましき極みぢや。衲は暗涙に咽びながら、机の上に白布を敷いて二人の遺骸を安置し、三歸五戒を授け、一喝を打して、兩靈を引導してやつた。將軍も奥さんも非常に喜ばれた。

憶へばサ、乃木さんが仙臺から臺灣へ赴任の時、二人の小供衆を連れて松島の衲の處へ來られ、乃木さんの請に依つて、「直」の一字を話したが、生者必滅會者定離、今はモウ世界を異にして仕舞ふた。雄島で紀念の寫眞を撮つた時のことが、眼の前に髣髴として居るやうぢや。

「引導して置いたから、何時でも埋めるが好い。」

と云ふて、それで初めて埋葬することになつたよ。衲の引導が濟まなかつたら、いつまでも包

の儘であつたかも知れぬ。實にサ、親として彼の包に手を觸れることは可厭ぢやつたらうサ。

一二三　坊主の好きな乃木さん

坊主嫌ひと云ふ評判――奥さんに「心經」と「十句經」と「舍利文」――嫌ひなのは墮落した坊主――家の暮向きは寺のやう――酒に亂れたことはない――銚子を二本とは出さぬ――兵士が來れば自分の肴を分ける――五觀を能く守る――食事は形枯を療するが爲め

世間では、乃木さんは坊主嫌ひぢやと云ふ評判をして居るが、ソリヤ間違ひぢや。乃木さんは佛教信者で、佛の有り難いことを能く知つて、觀音を信じて御座つた。ぢやから奥さんにも「十句觀音經」や「心經」を讀ませたいと云ふて、納が行く度毎に、始終「心經」と「十句經」と、それに「舍利文」とを敎へたぢや。ソレデ奥さんは夜分臥戸に入る前には、必らず「心經」を讀み、「十句經」百八遍を缺さなかつたぞ。それ位ぢやから、乃木さんは佛法信者殊に禪の修行者であつたことは前にも云ふたが、乃木さんが嫌つて居たのは腐敗した宗敎、墮落した坊主で、眞の宗敎、眞の坊主なら大好きぢやつた。納に對しては明治二十年から大正の曉までと云ふもの、始終師弟の禮を缺さず勤められた。それを見ても、乃木さんは坊主が嫌ひでないと云ふことが知れる譯ぢ

や。

それに家の暮向きが、丁度納の寺のやうな遣り方でサ、非常に淡泊なものぢや。乃木さんも酒は好きぢやつたが亂れたことはない、一本と極めて居られた。或時納が行くと、

「老師、酒は一本か二本か。」

と尋ねられるから、納は、

「一本で好い。」

と云ふたことがある。スルトそれからと云ふものは、決して二本とは出さぬぢや。ソレデ例の食堂でサ、漬物とお汁に汐燒位なもので、納には特別に豆腐でも取つてくれるぢや。少しも奢りと云ふことはない。又た兵士が來れば、自分の肴を分けて食事をさせるぢや。御飯は七三の麥飯ぢや、それで平氣ぢや。納が常に五觀を唱へるものぢやから、乃木さんは、

「それは好いことぢや、兵士にも左樣觀ぜさせたい。」

と云はれたことがある。五觀とはサ、

一には、功の多少を計り彼の來處を量る。

二には、己が德行の全缺を忖つて供に應ず。

三には、心を防ぎ、過、貪等を離るることを宗と爲。
四には、正に良藥を事とするは形枯を療せんが爲めなり。
五には、道業を成ぜんが爲めに應に此の食を受くべし。
と、五つの觀念ぢや。乃木さんは此の五觀をば能く守られた。守るべき坊主が怠つて、どうでも好いと云ふ俗人が是れを念とする。世は逆行かサ。山から里へと云ふが、今日では里から山へぢや。人間が喰ふと云ふことは、全く形枯を療するが爲めぢやゝ。それぢやから乃木さんは麥飯に安んじたぞ。

一二三　奥さんが手作りの米で祝餅

主人が軍に勝つた勝閧餅——那須野で田を作つて收穫——何から何まで女手一つ——少しも人の手を借らぬ——山岡鐵舟居士の奥さん——靜岡で自ら農作——愛兒の戰死を聞きつゝ——六斗餘の糯——德山なら喰へぬかも知れぬ

納が令息の遺骨に向つて回向した時サ、回向が濟むと、奥さんが、
「今日は餅を差上げます。」
と云ふて、餅を出してサ、

「是れは主人が軍に勝つて戻つた勝閧餅ですから、どうぞ召上つて下さい。」
と云ふぢや。
「それは〳〵。」
と、納は其の餅を喫しやうとすると、奥さんは、
「此の餅は、主人の出征中、妾が那須野で田を手作りして、收穫れた糯で造へました。それに少しも人の手を借りませず、自分で植えたり草を取つたり、刈入れたり籾を扱いたり臼で搗いたり、何から何まで妾の手で遣りましたから、極めてお粗末ではありますが、どうぞ御遠慮なく澤山召上つて下さい。」
と云はれた。實にハヤ納は驚いたよ。睾丸を下げた男子も及ばぬぢや。農作を女の手一つで、而も少しも人手を借りなんだとはサ。山岡鐵舟居士の奥さんは、靜岡にをられた頃、自ら鋤鍬を取つて農作されたと聞いたがサ、今ま靜子さんが夫の出征中、二人の愛兒の戰死を聞きつゝ身を田野に曝し、汗と膏とで六斗餘の糯を收穫せられたと云ふには今更ながら驚いた。流石は乃木さんの夫人ぢや。納は、
「能うお遣りになつた。百姓に育たぬ身が、鋤鍬を持つて田畑を耕作すると云ふは中々出來ぬ。

大將が能く御座つた頃、衲は道林寺の畑を耕して茶の樹を蒔いたがサ、そりや男の力ぢや。それでも骨が折れて手に豆が出來たぢや。而も貴婦人とも云はれる身分でサ。多くの婦人は慈善演藝に名を借りて、芝居見物や舞踏會に浮身をやつして居る中に、奥さんの此の餅の手作りには殆んど感心しましたわい。」

と、衲は全く感に堪へたぢや。徳山なら此の餅は喰へぬかも知れぬが、南天棒は喜んで喰ふたよ。

一二四　乞食坊主の樣な衲と大臣の寺内さん

遠州から東京行きの途中――木綿衣の汚ない姿――軍服いかめしい軍人――お互に手を取り合ふ――見送人の知事は呆然――坊主と云ふは有り難いもの――實力さへあれば人は馬鹿にはせん

衲が遠州富塚の法林寺で、南禪前管長で奥山四住の舜應和尚の津送や齋會を濟して、東京の接心會へ行く時サ。衲は木綿衣の汚ない姿で三等の赤切符ぢや。汽車が靜岡の停車場へ着いたので衲は一寸用達して又た汽車に乘らうとすると、大勢の見送人に挨拶して居た軍服嚴しい軍人が、衲の姿を見ると、つか〳〵と寄つて來るぢや。衲は初め誰れか知らと思ふて見ると、寺内さんぢ

やないか。寺内さんは其の時陸軍大臣ぢやつたらう。意外の邂逅ぢや。寺内さんは帽を脱いで、

「ヤア老師、お久し振りぢや。何方へ。」

と云はれる。衲も驚いたので、

「これは〳〵。」

と、お互に手を握り合つてサ、

「ちつとお出で、飲みませう。」

「大いに飲りませうわい。」

アツハ〳〵〳〵とやつた。乞食坊主のやうな衲と大臣の寺内さんとが手を取り合つての久濶談を、知事なぞの多數の見送人は、呆然として見て居つたが、坊主と云ふは有り難いものサ、定る處さへチンと定つて居れば、どんな姿をして居つても、どう云ふ人にでも拜まれるぢや。今日の坊主は姿振にばかり重きを置いて、肝心の心の實力が足らぬから駄目ぢや。實力さへあれば人は馬鹿にせんわい。

一二五　因果を知るには因果になり切れ

龔保和尙――紀州七川村善光寺――彈丸除のお守――衲の同火生――日露役戰死者の追吊授戒――因果が中々容易に合點が行かぬ――因果を取り違へると五百生野狐身――大燈國師の遺誡――因果を撥無したら佛道も禪道もない――大燈から見たら邪魔師ばかりか

紀州七川村の善光寺には龔保和尙と云ふ人が住んで居たが、此の寺から出す彈丸除のお守は大層効果があると云ふので、日清日露兩役の時は澤山出たものぢや。此の守を持つてゐて戰死する者は全く天運の定つたものぢやと云ふ位に評判されてゐた。此の龔保和尙は道林寺に葬つてあるが衲の同火生ぢや。處で此寺の一擅那に南良藏と云ふがある。衲の處へ來て坐禪をやつた男ぢや。ソレデ明治四十年五月のことサ。此の善光寺で南家の子息の追善を兼ねて、日露役戰死者の追吊授戒をやつたぢや。

因緣と云ふは全く恐ろしいものぢや。何んな處に筋を引いて居るか解らぬ、所謂因果ぢやが、此の因果が中々容易に合點が行かぬ。何んで斯うして飯を喰ふたり、茶を飲んだりするかサ、此の因果を知らうとならば、因果になり切らねばならぬぞ。衲も因果ぢや骨折つたよ。因果を取り違へると、ソラ五百生の間、狐にならにやならぬ。大燈國師の遺誡にも

「佛祖不傳の妙道を以つて、胸間に掛在せずんば、忽ち因果を撥無し、眞風地に墮ちん。皆な

是れ邪魔の種族なり。」

と云はれた。因果を撥無したら、佛道も禪道もない。此の世界は暗黑ぢやぞ。禪宗の坊サマに因果を問ふてみると、知らぬ者が多い。大燈から見たら、皆な是れ邪魔師ばかりか。大燈も要らざる世話の燒立をしたものぢや。因果があるから衲も七川村で戒授もやる。因果なりやこそ百千の恨を呑んで異域の土と化した群靈も、髣髴として來つて戒を受けることが出來るぢや。此の授戒は南良藏一個人の發願で啓建した會ぢや。接心も熱心にやつたぢや。

一二六　長沙問答を實地に現して居る

紀州行きは大難事――自然の禪氣を山河が具へる――如何んが山河大地を轉得して自己と爲し去らん――觀音と瀧とで名高い那智――花山天皇の敕命――一首の御製を納める――仁德天皇の敕願――文覺の坐した岩――隻手の働きを得る

此の紀州行きは大難事ぢやつた。紀州灘の荒れで船は串元へ着いた。それから古座港町へ行くと、夜來の暴風雨でサ、朝顏ぢやないが川止めぢや。詮方ないので高池の祥禪寺に滯錫して、其の翌日に古座川を八里、曳船で上つた。其の風景の好いと、實に比ひ無しぢや。牡丹岩ぢやの、十九ヶ嶽、血の池、飛地藏、一枚巖なぞ云ふを過ぎて長迫に着いて休憩し、それから又た二里半を

山駕籠ぢや。紀の國の南部は未だ鐵道の恩澤に浴せんぢや。其の代り山河が自然の禪氣を具へてをるから妙ぢや。長沙に或僧が問ふた、

「如何んが山河大地を轉得して自己と爲し去らんや。」

と。其の時長沙が、

「如何んが自己を轉得して山河大地を爲し去らんや。」

と出たので、僧が、

「不會。」

と云ふたら、長沙が、

「湖南城裏好し民を養ふに、米財柴多くして四隣に足れり。」

と云ふたが、此の七川邊の境は、實にハヤ長沙問答を實地に現して居るわい。

それから那智へも廻つたが、那智は觀音と瀧とで名高いぢや。花山天皇が熊野權現の御告に依つて、佛眼上人に先達を仰せ付けられた。そこで佛眼が神詫と云ひ又た敕命と云ひ、其の報恩の爲めに權現に參拜し、而して觀音に「補陀落や」の一首の御製を納めて、是れを西國第一番の靈場としたのぢや。傳へて云ふのに此の觀音は仁德天皇の敕願ぢやと云ふ。本尊は如意輪觀世音菩

薩で、景行天皇二年、裸形上人が開基せられたのぢやと。祕佛は大阿闍梨ぢや。寺の本堂は辰巳向きで、十三間四方もあらうかい。此の那智へ行く道路は、南良藏の盡力に依つて出來たと云ふので、至心居士は那智山では重任せられてをる。

瀧へも行つてみた。文覺上人の坐したと云ふ岩を見た。ザン〳〵と落ちる瀧の音を聞いてをれば、隻手の働きを得るぢや。文覺も此處で隻手を手に入れたらう。法燈國師も此處で微妙の音聲を止めたらう。それでこそ一遍上人を打出することが出來たぢや。サー各々那智の瀧の音が止るか止らぬか。サーどうぢや。衲は

音に聞く那智の深山の瀧津瀬は
文覺坐せし石の跡のみ

と一首口吟んだ。そこへ瓢が飛んで出たが、直に三升ばかりは泡と消えたぢや。それから下山の時に、「奥院道」と云ふ標があるので山樵に聞くと、興國寺の開山法燈の舊跡ぢやと云ふから、訪ねて行くと、破れた開山堂があつただけぢや。

一二七　黑門出の禪學士も如何やら下落

接心會を岡田乾兒氏邸へ――雪山會と改稱――全く牛に成り切つた――直參の禪――八十回目に初提唱――極千の酸い位は誰れも知る――衲の樣な提唱は始めて――白隱は百八十人衲は六百餘名――十六歲で隻手を透つたお察――白隱の耳の端をビシヤ――老僧這の臭娘の爲めに抑倒せらる

楠田醫院にあつた接心會を、禪道に熱心な矢ッ張りお醫者の岡田乾兒氏の邸に移すことになつたのは、明治四十年四月十日ぢやつた。岡田の邸宅が下谷の黑門町にあつたから、其處を道場とし會の名稱も「大日本禪學專門道場雪山會」と改へて、例に依つて南天一流の無字をやるぢや。

スルト世間では、前の楠田の處と同じく、急に牛屋が出來たなぞと云ふて、黑門町の牛部屋で通つたものぢや。併し其の頃の學人は全く牛に成り切つて遣つたから、出來も好かつたぢや。今時の者は、まるで曹洞禪のやうな一枚悟りの聲聞になつて、ソレデロ先きばかりぢや。衲も相變らず提唱は一切拔きにして、參禪に骨を折らせたから、實にハヤ直參の禪ぢや。文字や理窟の禪ぢやない。

ソコデ衲は雪山會では何時までも提唱は遣らん積りで居つたがサ、後に居士大姉等が是非提唱をと、ヤイ〳〵云ふので、曲げて人情に隨つて、八十回目(明治四十四年九月廿四日の日曜)から「無門關」を提唱することにしたぢや。會の者等は衲の室內が綿密であるやうに、提唱も一々字句

の講釋でもしてくれることと思ふたらうがサ、衲の提唱は全くの提唱ぢや。梅干の酸い位は誰れでも知つてをる。「狗子佛性」でも「百丈野狐」でも、字面の繪解講釋なら誰れもやるぢや。別に衲に限つたことぢやない、夫れは日本國中に何程でもある。併し學問で得た智惠は極り切つてをる。衲の提唱は此の學問ぢやない、實地修行の發明ぢや。提唱を聞いた者が、衲のやうな提唱は始めてぢやと云ふたが、其の筈サ、衲は提唱を學人激勵の一助としてをるもの。ぢやから澤山の人も打出したぢや。白隱は隻手を聞いた者が百八十人あると云ふたが、衲の處にはサ、無字を透過したものが六百餘名からあるぞ。

白隱下のお察と云ふは、十六歲で隻手を透過した。中々えらい。ソコで白隱がお察に、

「お前は隻手を聞いたさうぢやが、衲にも聞かせてくれ。」

と云ふと、お察は、

「ハイ。」

と、いきなり白隱の耳の端をビシヤと、

「サー聞け。」

とやつた。白隱も痛かつたらうが、又た嘸嬉しくもあつたらう。

「惜む可し、老僧這の臭娘の爲に抑倒せらる。」

とサ。實にハヤ堂々たるものぢや。天下の大姉、如何とするぞい。お察の禪機あるか如何か。赤門出の學士も下落したが、黑門出の禪學士も如何やら下落しさうなぞ。各々しつかり遣るがよい。

一二八　南天棒て持ち切つた再住式

本山始つて以來――居士大姉が多い――各會が旗を立てゝ押寄せる――上堂の索語――拈提――翠巖夏末示衆――南天棒白崖は卽ち然らず――看よ南天棒が眉毛在りや――睨み廻したが一語もない――南天の一棒藏すに處無し――妙心寺再住百八十六世

衲が再住式は本山始つて以來ぢやさうな。古則古例の法式に依つて上堂したぢやが、集つて來た居士大姉が中々多いぢや。佐賀の靈山會、兵庫の巨鼇會、伊丹の拈華會、美濃の無門會、唐津の接心會、攝津の無門會、東京の雪山會、紀州の接心會、名古屋の擔雪會と云ふやうに、それ〴〵旗を押立てゝ本山に押掛けたものぢや。實に他に類はないよ。それに僧侶は一山の和尚達と、僧堂學林の雲衲サ。酒も大分漲つたよ。上堂の索語にサ。

「去年の貧は錐有つて地無く、今年の貧は錐も無く地も無し。然も恁麼なりと雖も、卽今還つて問話の者有りや。道ひ得るも南天棒、道ひ得ざるも南天棒。參。」

とやつた。又た拈提には斯う云つた。

「舉す。翠巖、夏末、衆に示して云く、一夏以來兄弟の爲めに東說西話す。看よ、翠巖が眉毛有りや。保福云く、賊と作る人、心虛る。長慶云く、長ぜりや。雲門曰く、關と。六耳、謀同じからず　是れは此れ古人底、卽今新法山南天棒白崖は卽ち然らず。」

と、拄杖を卓して、

「看よ、南天棒が眉毛在りや。」

と睨み廻したが一語も無い。ソコデ自ら代つて云く、

「南天の一棒藏すに處無し、十月小春紅葉寒し、伏して惟れば大衆久立珍重。」

と。實にハヤ上堂も拈提も南天棒で持ち切りぢやつた。衲が是れ正法山妙心寺再住百八十六世ぢや。釋迦傳燈の法燈は七十九代ぢやが、妙心寺の世代にすれば百八十六代になるぢや。

一二九　楠田不識居士が死んだ

身心は元來不二――體は死んでも心は死なぬと云ふ妄見――釋迦が「三界唯一心」の說――心性是れ何物ぞと參ずるが大事――眼光落地の時――希に見る居士――印可の一人――往いて見よ今ま鎌倉は麥畑――四十九年不識の禪

身心は元來不二ぢや。そんなことは衲の提唱を聞けば解るがサ、印度あたりの九十六種の外道の說には、體は死んでも心は死なぬと云ふ。耶蘇なぞも左樣云ふて居る。心常相滅と云はうか。それが昔には中々勢力があつたぢやが、釋迦が成道正覺して、心身不二を以つて心常相滅の妄見を打破してからに、

「三界唯一心、心外無別法、心佛及衆生、是三無差別。」

と云ふて、心性さへ明かなれば、過去、現在、未來の三世に通達すると說いた。ぢやから修行の要點は、此の心性是れ何物ぞと參ずるが大事ぢや。人々各々眼光落地の時があるぢや、狼狽へめさるな。

楠田不識居士もサ、大安樂の往生を遂げたぢや。それは衲が雪山會を接了して、翌日は西の宮へ歸ると云ふので、大石正巳居士等が別杯の宴を日本橋の階樂園に催してサ、夜の十時頃まで清酌法戰を遣りつゞけ、主客交々歡を盡して歸つたが、其の翌朝（明治四十二年三月一日）になつ

て、楠田は俄然死んだ。彼は實に希に見る居士ぢやつた。衲の室內も濟んでサ、印可の一人ぢや。

往いて見よ今ま鎌倉は麥畑

かサ。法號は廓然院聖道不識居士ぢや。香華寺を道林寺と定め、谷中の墳塋に葬つた。其の時の香語は斯うぢや。

「廓然聖道南天棒、四十九年不識の禪、病を擁して今朝何れの處にか去る、春風三月百花妍たり。」

一三〇　南天の棒に打たれて室內を逃出す

妙心開山の五百五十遠諱――無相大師の敕號――八幡から南天棒を取寄せる――酬恩の一打を試みん――開山に此の南天棒が代つて――齒に掛る者は一人もない――南天棒を兩手で上から握つて――見たいか〳〵と二三回問ふと――ドシツ〳〵と續け打ち――追ひ掛けて又た三十棒――山內一同顚へる――我慢な坊主は打ち殺せ

明治四十二年四月、妙心開山關山國師の五百五十遠諱を大本山に營辦した。明治天皇は更に賜ふて無相大師の敕諡を以つてして、開祖の厚德を表彰せられたぢや。衲もサ、此の時は登山して

入室を引受けることになつた。衲の居間は退藏院ぢやつた。衲は是れ六十一の還暦の時に、例の南天棒は八幡圓福寺の寶庫に納めて置いたがサ、今度の遠諱には正眞の南天棒を擔ぎ出してサ、大師報恩の爲め龍蛇を辨ぜやうと、八幡へ云つてやつて、南天棒を取り寄せた。

開山大師の五百年遠諱の時は、衲は羅山さんが寮頭の知客で、蘇山さんが大導師ぢやつた。其の時は雲衲として隨分氣張つて報恩底を盡したがサ、今度は師家として酬恩の一打を試んとしたから、安單にも、

「大衆接得の爲め、好箇の南天棒を受用する。」

と告報したぢや。

此の遠諱には日本國中の僧堂の師家と雲衲とが集つて來たから、雲衲だけでも五百餘名ぢやつた。衲は幾百千人でも、片ッ端から入室を聞かう、晝夜打つ通しても關はぬ。大師一流の接得、今ま此の南天棒が代つて遣る、サィ來いと構へた。五百の雲水中には、何か一箇位は得る底があるかと一々點檢するが、何れも此れも皆な一樣で、何處も同じ秋の夕暮ぢや。齒に掛る者は一人もない。無字一則透つて居らぬ無眼子の多いのには呆れ果てたよ。

スルト四月九日の夕方ぢやつた、一人の雲衲風の者が入室してサ、衲の膝の前に横つて居る

南天棒を兩手で上から握つて、

「如何なるか是れ南天棒。」

と問ふて出たぢや。ソコデ衲が、

「フム、南天棒が見たいか〳〵。」

と二三回問ふと、彼の僧は無言で下を向いて頷くので、

「南天の手元は是れぢや。サー南天棒を見せてやらう。」

と云ふ一刹那、南天棒を横にスッと拔くや否や、間髪を容れず、

「サー見よ。」

と、ドシッ〳〵と續け打ちに三十棒打つたぢや。彼は耐り兼ねて室内を逃出したから、衲は追ひ掛けて椽の處で又た三十棒打つた。彼は遂に庭を傳つて何處へか逃げて行つて仕舞ふた。其の後ち姿を見せなかつたさうぢやが、あんな我慢な奴は打ち殺しても好いぢや。是れには山内一同顫へ上つたと云ふことぢやが、何も衲が殊更辛辣ぢやない、學人が皆な怠けるから仕方がないぢや。彼奴は雲衲の姿振ぢやつたが、どうも假裝して遣つて來たものらしい。是れを思ふとサ、今ま天下の宗匠にも、南天棒を三十位は與へなくてはならぬぞ。

一三一　無字が透つたら本も讀むが好い

參禪中には本を見るな――古人の糟妄想を脊負ひ込む――生死の難關を打ち破つた後は――師家は讀書を可ーがる――讀んで古人の意を檢定する――衲の提唱は箱細工ぢやない――八幡へ納めた書入れ本――白隱の著書――「邊鄙以知語」――國家愛護の念に外ならぬ

參禪辨道中に本なぞ見てをると、自己の煩惱で澤山なのに、又た古人の糟妄想まで脊負ひ込んで、正念相續の邪魔をするから、成るべく本なぞは讀まぬ方が好いが、生死の難關を打ち破つた者は本も讀むが好い。兎角師家にでもなると、讀書が可厭になつて、古人の話頭を咀嚼して學人打出の糊とすることを怠るものぢやが、衲は本を讀むことを怠らぬ。讀んで必らず古人の意を檢定する。提唱も其れぢや。衲の提唱は箱細工の造り付けぢやない、所謂提げ唱へるぢや。古人の意を檢定するが衲の提唱ぢや。それで衲が讀んだ本で書入をしたものは、取纒めて八幡の寶庫へ納めた。ざつと其の分だけでも、、

一、碧巖集　十卷
一、臨濟錄　一卷

一、虛堂錄　十卷
一、無門關　一卷
一、五祖錄　一卷
一、虛堂百則頌古　一卷
一、槐安國語　五卷
一、槐安國語骨董　二卷
一、荆叢毒藥　六卷
一、息耕錄開筵普說　一卷
一、息耕錄閉筵普說蛇足　一卷
一、四部錄　一卷
一、毒語注心經　一卷
一、五家參詳要路門　一卷
一、寒林貽寶　一卷
一、川老金剛經　一卷

一、大智禪師偈頌　一卷
一、黄龍慧南書牘集　一卷
一、寶鏡三昧、心王銘（合本）　一卷
一、人天眼目　三卷
一、大惠普覺禪師書　二卷
一、大惠武庫　一卷
一、信心銘拈提　一卷
一、自笑録　一卷
一、禪關策進　一卷
一、擊節録　一卷
一、寂室録　四卷
一、碧巖録抄書　一卷
一、五位祝訣

等ぢや。其の他「寒山詩」、「江湖集」、「維摩經」、「正宗讃」等は手元にあるぢや。

それから居士や大姉等も、無字が透つたら本を讀むが好い。併し前にも云ふた糟妄想に捉はれてはならぬぞ。白隱和尚には種々親切な爲人の著書がある。居士等は先づ〳〵「邊鄙以知語」を讀むが好い。乃木さんにも讀めと云ふて讀ませた。白隱が何の位國家を思ふたかと云ふことは、是れを讀むと知れる。白隱の言葉にサ、

「法語は古來參禪見性の指南、假名物は勸善懲惡の旨趣なり。勸善に急緩あり、見性に精麁あり。一國一城の主たらん人は、第一に王位を守護し、萬民を保せんか爲めに保重す可し。邦家を保重せんとならば、先づ須らく生民を愛顧すべし。民肥え國豐かなる、是れを強國と云ふ。強國の主として王位を守護せんとならば、先づ須らく身體健康に、壽算延長なることを計るべし。若し夫れ多病短壽ならば、何んの暇有つてか帝都を守護し、邦家を治め、生民を愛顧することを得んや。」

と。實にハヤ居士としては勿論、一國の政治家、軍人、法律家、實業家なぞも、此の心掛けがなくてはならぬ。ソレデ衲が會下の居士大姉三千人の士姉中には、昔で云ふ一國一城の主位になつてをる人はいくらもあるぢや。衲が居士に此の「邊鄙以知語」を讀めと勸めるも、亦た國家愛護の念に外ならぬぢや。

一三二　今は三道樂の二を缺いた

伊藤も哈爾賓の露と消えた――官邸へ行つて引導――日本の損失――其の爲め好かつたこともあらう――人間萬事塞翁が馬――南天棒で坐脱立亡――皆なの葬式なしてやる

伊藤も可憐想に哈爾賓の露と消えた。彼れには度々逢ふたことがあるので、明治四十二年十月二十六日かであつた、狙撃されて即死したと云ふ電報が滿洲から來たから、何れ國葬ぢやうと思ふて、十一月一日に上京したが、丁度其の日が遺骸到着の日で、新橋驛の混雜は譬へやうがなかつた。

衲は二日の日に官邸へ行つてサ、一偈を打して引導を渡してやつた。彼れも政治に沒頭して安樂地を得る暇がなかつたが、あれこそ全く政治三昧に入つて居つた。今時には彼れだけの報國の政治家はない、惜しいことをした。衲よりも三つばかり年下ぢやつた。彼れの死は日本國に何れ位損失ぢやつたか知れぬがサ。又た其の爲め好かつたこともあらうかい。人間萬事塞翁が馬ぢや。彼れに手向けた一偈は斯うぢや、

「闇裡の銃聲奈んの妖孽ぞ、滿洲の横死宗雄を立す。南天棒下の無生忍、一穗の香煙空に印す。」

と、棒を拈じて、

「喝ッ。」

と大喝し、大悲咒を立誦してサ、それから雪山會で坐禪ぢや。

翌日の國葬には日比谷へ出頭したが、何も國葬と云ふので、無理に神道葬をするには及ばぬ。伊藤はモウとつくに南天棒で坐脱立亡したぢや。ハイ伊藤は政治道樂、衲は禪道樂、雨宮敬次郎は商業道樂ぢや。今は其の三道樂の二を缺いたが、禪道樂の此の南天棒だけは頗る健在ぢや。皆なの葬式をしてやるわい。

一三三　提唱を聞く丈なら蓄音器でも濟む

大阪師團の高山參謀長――長風會を設く――居眠半分に提唱を聞くが樂――蹄の跡を逐ふて唱へる蹄唱――有爲にして故に似させる――提唱にも張りがあるのかな――衲のは金剛張り――蓄音器に吹き込め――酒を飲みながらでも聞ける――お經も引導も蓄音器――禪坊主が蓄音器の代り

大阪の第四師團の參謀長で陸軍少將高山公通と云ふ人が、軍人等の爲めに接心會を開きたいと

の切なる懇請に依つてサ、長風會と云ふ會を設けた。此の會からは後に中館長風が出てをるぢや。其處で又た提唱をと云ふ注文なので、詮方なしに「無門關」を提唱することにした。毎度云ふ通り衲は提唱は好かぬが、近來彼方でも此方でも、提唱をしてくれと云ふには困るぢやテ。併しサ、入室してグツクと骨折るよりも、居眠半分に提唱を聞いて居る方が樂ぢやから、それも無理はないかい。

マア提唱も好いとした處で、提唱賣りや提唱聽になつては駄目ぢや、提唱を古人の型にはめてやる者もあるが、あれは提唱ぢやない。鑄型になつては蹄唱ぢや。蹄の跡を逐ふて唱へて行くから蹄唱サ。ソリヤ嗣資の間ぢやから、知らず〳〵に似る處もあらうが、それは所謂無爲にして似るのぢや。併し世の中には有爲にして故に似させる者がある。實にハヤ笑止千萬なことぢや。

提唱にも「張り」と云ふものがあるかサ。「張り」があるなら、衲の提唱は白隱、卓州、蘇山、羅山の金剛(混合)張りぢや。鎌倉あたりにあるのが洪川張りか、宗演張りか。呟まで入れてやる提唱なぞは、確かに何々張りと云ふのぢやらう。芝居には成田屋張りとか音羽屋張りとか云ふことがあるが、禪宗の提唱に張りがあれば、前にも云ふた蹄唱ぢやわい。

それなら一層のこと、蓄音器に提唱を吹き込んでサ、是が南天棒の提唱一節、是れが宗演の提

唱一節と、新聞廣告でもして賣り出したら如何なものかい。さうすれば酒を飲みながらでも、嚊と寢てゐながらでも提唱が聞けるぢや。態々提唱聞きに禪會巡りをするにや及ばんが、ソレデ大道の玄妙を諦得することが出來るかよ。併し今時の提唱は、たかが飯を喰ふ蓄音器提唱位なものぢや。何も彼も蓄音器にする世の中ぢやから、ぐづ〳〵して居ると、今に「ナームカラタンノー」も蓄音器、引導も蓄音器で濟むことにならうぞい。今の禪坊主の中には、蓄音器の代りをして居るものはないかサ。蓄音器が人間の代りをする世の中に、坊サマ達のみが蓄音器の代りをすると は奇々妙々ぢや。

一三四　弟子の師匠檢定に及第

床柱に凭れて午睡――が風を聽き罷んで午睡濃かり――人の來たことも白河夜船――劍道修行の志願――どうも意に叶ふ師匠がない――老師は全く師とすべき師匠――氣合一ツで打ち倒れる――寸分の隙がない――確かに一方の大將

是れは明治四十三年六月六日のことぢやつた。何んでも大層暑い日で、衲が床柱に凭れて居睡をして居ると、小僧が來て、

「斯う云ふ人が相見を願ひたいと云ふて來ました。」

と云ふから、衲は

「通せ。」

と命じて置いて、又たうつら〳〵と夢路を辿つた。所謂「松風を聽き罷んで午睡濃かなり」で、人の來たことも一向に白河夜船ぢや。其の中に、

「老師々々。」

と云ふ聲が耳に入つたから、衲は不圖眼を開いてみると、一人の武者張つた男が慇懃に手を突いてサ、

「どうか入室のお許可が願ひたい。」

と云ふから、

「お前は何處の者ぢや。どうして衲の處へ來て坐禪をするのぢや。」

と問ふとサ、其の答へが面白い。

「私は阿波の百姓ですが、劍道修行を志願として居ります。父の云ひますのには、劍道の奧義に達するには是非參禪しなければならぬとのことですから、諸々方々とお師匠さんを探し廻りましたが、どうも私の意に叶ふ師匠がありません。然るに今日老師に相見を願ひました處が、

老師は全く私の師とすべき師匠であります。」

と云ふぢやらう。つまり衲は此の人の師匠檢定に及第した譯ぢや。

「ソリャ又た如何してか。」

と問ふと、彼は、

「私は禪學は少しも知りませんが、劍道の方は聊か其の堂に入つた積りです。其の私が各御師家に相見してみると、何れの宗匠も劍道から云ふと際だらけです。禪は出來るかも知らぬが、エーイと氣合一ッで、其處に打つ倒れるやうな人ばかりでした。處が今日老師にお眼に掛ると、老師はユラ〳〵と眠つてをられるが、其の態度に寸分の際がない。劍道から云へば確かに一方の大將と云へます。ソレデ私は老師を師と仰ぐのであります。」

と云ふた。衲が別に劍道を修したのぢやないが、禪の本分は寂寞恒一にあるぢや。過去も現在も未來も恒一ぢやぞ。

一三五　羅漢を畫いて見よ衲に似て居る

羅漢畫きの内田鐵針――衲の顏が羅漢に似て居る――羅漢が衲に似て居る――畫

像の自贊――宗門相似の禪を鏖打す――白隱の自贊――近代斷無の瞎僧を鏖にす――白隱も惡口は上手――衲も一致――乃木の正月の句――世の中は恥の晒し處

衲の居士に内田鐵針(東京の者)と云ふがあつた。今は故人になつたが、其の男は羅漢を畫くことが名人ぢやつた。ソレデ衲の顏が羅漢に似て居るので、衲の肖像を畫くと云ふからサ、衲が、「馬鹿なことを云へ。衲が羅漢に似たのぢやない、羅漢が衲に似て居るのぢや。羅漢を畫いて見よ、衲に似て居るから。」

と云ふたことがある。ソコデ鐵針が衲に似た羅漢を畫いたから、衲が讃をしたぢや。

「横に拈じ倒に用ゆ南天の棒、宗門相似の禪を鏖打す。千古の醜容人の惡しみを得、一燈吹滅す瞎驢邊。

別々。　枝柯九漢を衝き、根幹三泉に徹す。

と題して、知己に頒つたぢや。自贊は中々妙なものぢやテ。白隱も自分の畫像に、

「千佛場中千佛に嫌はれ、群魔隊裡群魔に憎まる。今時默照の邪黨を挫き、近代斷無の瞎僧を鏖にす。這般醜惡の破老禿、醜上醜を添ふ又た一層。」

と。白隱も惡口は上手ぢや。「近代斷無の瞎僧を鏖にす」と云ふ意や、「醜惡」の二字は衲も贊

成ぢや。乃木は正月の句に、「又た一つ恥を重ねて雜煮かな」とやつたことがある。世の中は恥の晒し處ぢや。

一三六　其處へ行くと小兒は偉いよ

大人が小兒になるのは難題――妙應無方にして朕跡を留めず――昔から小兒の喩が多い――「嬰兒行」――腰を掛けるから故障も出來る――瑞溪會――「婆婆和和、有句無句」の處――小兒は大人の師

前に、馬鹿になれと云ふたが、利巧が馬鹿になるのが六ケ敷いと同じやうに、大人が小兒になるのは大分難題ぢや。併し大人が小兒になるでなければ駄目ぢや。衲の居士にも小兒科の醫者か可成りあるが、全く小兒になり切つて治療をせねば眞箇でない。

小兒と云ふは實にハヤ慳氣のないもので、天眞爛漫と云はうか、泣くかと思へば直に笑ひ、笑ふかと思へば忽ち怒る。今ま喧嘩をしたかと思ふとモウ仲が直つて居る。所謂妙應無方にして朕跡を留めずぢや。少しの跡をも留めぬから、卽ち執着と云ふがない。各々も小兒のやうに、境に應じて跡を留めぬやうになれ。昔から小兒の喩は隨分澤山有るよ。「嬰兒行」ぢやの、「世の嬰兒の如く」ぢやのと、「涅槃經」や「寶鏡三昧」にある。とかく人は境に對して腰を下して仕舞ふ。腰

を掛けるから故障も出來、愛憎も生じ、煩惱も起る。其處へ行くと小兒は偉いよ。何事にも念を留めぬからサ。

堀建哉は小兒科の醫者ぢやが(今ま東京の四谷で開業して居る)、此處に疑團を起してサ、衲の處へ入室した。併し餘り遠方なので、同志の者と謀つて、四谷の祥山寺へ瑞溪會と云ふを起し、小島堯翁を始め一心に入室參禪したよ。本は「臨濟錄」を讀んだ。堀も小兒を扱つて居るが、まだ〳〵小兒にや成り切れぬ。「婆婆和和、有句無句、遂に物を得ず」の處までは容易ぢやない。世の諺にも、「小兒は大人の師」と云ふぢや。無字でも見た者は、小兒にも解るやうに無字を扱はにやならぬぞ。是れが修行の結果ぢや。

一三七　願心さへ有れば向ふから悟らせる

其の後の道林寺――亮卿の住職――衲の晋山より增し――元を洗へば一器の水――都門道場の興隆を托する――大石正巳居士や河野廣中居士――修行は急いてはならぬ――悟らうと焦ると悟は逃げる――萬法來つて自己を證するが悟――一華五葉開く

東京牛込市ヶ谷の瑞光山道林寺のことは前にも云ふたが、衲が東京に禪堂を設けやうと刻苦し

て本山の許可を受け、それから東京府知事の建設費募集の許可も受けて、四來の雲衲に花園選佛場の托鉢袋を掛けさせて、八百八町を巡化する迄にしたがサ、後を遣らせた中原全紀が支那で行衞不明となり、丹羽雙明が代つて住職となつて、衲の志を繼ぎ禪堂建立の筈ぢやが、彼も老齡ぢや、意と行とが添はず、空しく月日を經過する中、明治四十三年に現住の亮卿が又た雙明に代つて道林寺を董することになつた。ソレデ亮卿が晋山は、衲の建てゝ置いた破れ堂ぢやあるが、方丈を修理して其處でやつた。衲が晋山よりは未だ增しぢやつた。

因緣は不思議なもので、亮卿が十六歲とかに、谷中の興禪寺から道林寺の衲の處迄通つて、「兜卒の三關」の關の字を公案としたものぢや。それから彼は土佐の揚貴山の實禪和尙と法叔の關係があり、さうして在所が羅山さんと同郡ぢやなぞとは妙ぢや。又た海淸寺を僧堂にした時は本山に在つて骨を折つたさうぢや。ソレデ彼の師匠は雪航下ぢやから、つまり元を洗へば一器の水ぢや。衲は彼の晋山の時、托するに都門道場を興隆ならしむることを以つてしたが、亮卿も其の頃は托するもあぶなかしかつたよ。

併し亮卿も道林寺へ入つた以上は、無字でも隻手でも、南天下の檢定法に依つて、綿々密々に鍛錬せねばと云ふので、晝夜人知れず骨折つて、僧俗を論ぜず一分でも自己より長ずる者には

入室して參禪怠らなかつた。彼を激勵したのは、大石正己居士や河野廣中居士であつた。八ヶ年の長の月日、一日も參禪を怠らなかつたのも矢張り因緣ぢや。時々衲は彼に垂誡して云ふたぢや。

修行は急いてはならぬ、如實に遣つて行け。左樣さへあらうぞならば、何時か悟れる。悟らずとも修行が尊いぞ。修行は願心にあるぢや。願心さへあれば、何時か向ふから悟らせるぞ。悟らうなぞと焦るな。焦ると悟は逃げるぞ。古人も云ふた、自己を運んで萬法を證するは迷ぢや。萬法來つて自己を證するが悟ぢやと。ぢやから求めやうとも得やうともせずに、只だ〳〵修して行きさへすれば、達磨の云草ぢやないが、「一華五葉開き、結果自然に成る」ぢや。時いたれば生えずには居らぬ。「佛性の義を識らんと欲せば、時節因緣を觀ず可し」サ、時節既に到れば佛性自ら現前すぢや。桃栗三年柿八年ぢや。梅は實を結ぶに十三年掛る。禪の修行も其の通り、急くな急ぐな。急いて負けた大阪陣は好い手本ぢやぞ。

一三八　乃木邸で年頭の合作

割合に廣い食堂――裝飾が無くてがらん――學習院の生徒のハイカラには困る――畫の辨當を喰べぬ――殘らず平げると驚いてゐる――心身を强くするは禪の領分――富士の畫と詩――病中の詩作――禪機橫溢

明治四十四年正月十五日ぢやつた。衲は新年の挨拶の爲めに赤坂の乃木邸を訪ふた。前にも云ふたが、乃木さんの家はまるで禪宗寺のやうなもので、食堂が割合に廣いのぢやが、裝飾と云ふては何一つ無いから、至つてがらんとして居る。

丁度將軍も居られたものぢやから、喜んで迎へられてサ、例の一本宛の銚子で飲んだぢや。其の時に乃木さんが、

「學習院の生徒等が、衞生ぢやの何んぢやのと云ふてからに、只だ旨い物さへ喰へば營養が增すかのやうに思ふて居る風がある。所謂ハイカラには困つたものぢや。それが爲め畫の辨當を寄宿で喰べぬ奴がある。私が一處に寢泊をして、辨當なぞを殘らず平げると、驚いてをる。なぜ喰べぬかと小言を云ふと、不味の一點張りぢや。併し近頃は食堂にしたものぢやから、好い都合に皆な食堂へ入つてくれるがサ、今少し人の心も身體も强くせねばならぬ。矢ッ張りそれは禪の方の領分ぢやらう。」

と云はれた、將軍は兵事にも學事にも、壯丁の身の上を心配されたのぢや。

其の時何か合作をしやうと云ふて紙を出したから、衲が一番お得意の富士の畫を畫いた。スルト乃木さんが直に筆を執つて題された。それは斯うぢや。

「中天の富嶽千秋の雪、東海の金波旭影浮ぶ。說くことを休めよ區區風景の美なるを、地靈人傑是れ神洲。」

と。イヤハヤ乃木さんは、武にも文にも禪にも通達せられた良將軍ぢやつた。

それから其の前年の秋の頃、乃木さんは病氣で一時赤十字病院へ入院せられたので衲が見舞に行くと、乃木さんは心好く話されて、

「こんな寢言を云ふたが是れで好いか。」

と、一詩を衲に見せた。乃木さんは衲に詩や歌を見せる時は、必らず「是れで好いか」と云ふて、師資の禮を失はなかつた。其の詩は、

「病に臥して安閑五十日、關せず人生の幾波瀾。玻璃窓外風多少ぞ、落葉聲無く秋雨寒し。」

と。此の一詩の中には禪機が横溢してをるぢや。

一三九　一擊せん勢ひでサー看よ〳〵

耶蘇教會の牧師――其耶蘇を掌の上に載せて見せよ――寶物々々と云ふて行李の始末――私に耶蘇を見せて下さい――彼の胸倉を引つ摑へ右手に拳を握り――驚き怖れた端的に――こんな怖しい目に逢ふたことはない――大いに耶蘇禪をゐれ――後に禮狀

其の年の十月十九日サ。衲が東京行きの行李を造つてをると、千葉縣生れとかで、當時は福井の耶蘇教會の牧師をして居つた金子卯吉と云ふ男が、何んでも衲に面會したいと云ふて來たとのことぢや。衲は、

「今ま東京出立の荷造中ぢや、一寸なら逢はう。」

と云ふて、彼を案内させた。衲の居間は大亂雜に取散してあつたが、彼は其の中に正坐つて、初めて面會の挨拶をするから、衲は、

「衲は今ま忙しいぢや。お前さんは何んの商賣ぢやの。」

と問ふと、彼は、

「耶蘇教の牧師をして居ります。」

と云ふから、

「お前が耶蘇の坊サマかい。耶蘇の坊サマなら其の耶蘇を掌の上に載せて見せよ。」

と云ふと、

「そんなことは出來ません。」

と云ふからサ、衲が、

「何んぢや、耶蘇でゐながら耶蘇が見えぬと。ソレが耶蘇の坊主か。ソリヤ耶蘇坊主ぢやない、耶蘇の贋坊主ぢや。贋物々々。」

と云ひながら行李の始末をして居ると、彼が、

「私は耶蘇が見せられませんが、どうか私に耶蘇を見せて下さい。」

と云ふぢやないか、ソコデ衲が、

「ウン〳〵見たいか。ヨシ見せてやらう。もソッと近くへ來い。」

と呼んで、彼が進んで來た時サ、左手に其の胸倉を引ッ捉へ、右手の拳を握つて高く上げ、今や一撃せん勢で、

「サー看よ〳〵。」

とやつた。彼はハッと驚き怖れた端的に、何か感じたと見えてサ、

「今日迄こんな怖しい目に逢ふたことはありません。是れから入室參禪いたします。」

と、確く師弟の禮を成したから、衲は、

「やるが好い〳〵。大いに耶蘇禪をやれ。」

と云ふて置いた。其の後福井から斯う云ふて來たぢや。

前略。千古の英雄僧たる老師に接して多年の渴仰を癒し、千聖不傳の妙術を味ひ得て、本來の風光を端的の中に觀じ得たる段喜び申候。予が胸裡に映じたる老師の風骨は、他日紙上にて世に公にする日有るべしと存じ候。願くは敎界刷新の今日、自愛し給ふ處あらんとを祈る。下略

其の後も臘八に參室すると云ふて來たが、耶蘇の中にも彼のやうに眞箇に修行したいと云ふ者もあるぢや。彼も衲の拳の下では殺されると思ふたやうぢやわい。ハッハヽヽヽ。

一四〇　乃木將軍が自ら海清寺へ

見聖らしいカーキー色の軍服姿——隨行の方が遙かに立派——小僧等も飛んで出ぬ——欄隙の取次——乃木さんと分る——大演習の詩趣——西伯亞途上の舊作——日露役戰死者の碑に一々禮拜——攝河泉の大演習——公私の正しい乃木さん——支那の季札が友人を訪ねた時のやう

衲が耶蘇の牧師に垂誡を與へた翌日ぢやから、十月二十日か。東京行きの仕度も萬端整ふて、もう出掛けるばかりと云ふ時に、乃木將軍が衲の玄關を訪ふたぢや。將軍は元來質素なのに、殊

に納に對する時は何時も勳章などは付けて居らぬので、此の日も何か略章一つの見榮らしいカーキ色の軍服姿で玄關に立つたものぢやから、誰れも是れが旅順攻擊の總大將乃木大將とは氣付かぬ。却つて門外に待つて居る隨行員の方が遙かに立派な位ぢやつたので、小僧等も、又た何處かの軍人が來たと云ふやうな調子で、いつも軍人は澤山來るから、別に出迎へとして飛んでも出なかつた。處が丁度樗隱が納の東京行きの見送りをする爲めに來て居つたので、彼れが取次に出で、初めて乃木さんと云ふことが分つたのぢや。

ソコデ早速納の隱寮へ案内したが、將軍は納が丈夫なのを大層喜んでくれた。それから何時も將軍の處の酒を飲むから、今日は一つ西の宮の清酒をと云ふので 白鑢を抜いて一杯やつた。將軍も喜んで飲みながらサ、納が、

「大演習の詩趣は如何ぢや。」

と尋ねると、將軍は、

「是れは西伯亜途上でやつた舊作ぢやが。」

と、ポケットから鉛筆を取出して半紙に記されたのは、

「千里の平原草雲に接す、大兵用ゆ可し軍行る可し。英雄曾つて是れ功名の地、唯だ見る綿羊野馬の群。」

と。やがて將軍は辭せられたが、日露役戰死者の碑に一々禮をして立去られた。其の時は攝河泉の大演習で、軍務の閑を得て納を訪はれたのぢや。乃木さんは公私の正しい人であつたから、公務を終らねば私行は果さなかつた。此の時の出會は、丁度支那の季札が友人を訪ふた時のやうぢや。

一四一　和尚ぢや左樣も行かんでのう

藁を製法して織物――米を穫つた藁は殘酷な取扱ひ――人間の必要品に製造――由多加織――亡兄の碑銘――乃木將軍の筆額――「織機餘彩」――由多加織の御禮――まだ包の封を切らぬ――餘人なら斷るが

伊丹に寺西幾久松と云ふ納の居士がある。此の男は兄の志を繼いで、藁を製法して織物を造つてをるが、是れは兄の考案になつたと云ふことぢや。其の兄の思ふのにサ、西洋人は牛肉を喰ふて營養分を取つて居るから、其の牛の骨と云はず皮と云はず、角でも爪でも、何に一つとして捨てはせぬ。我が國はサ、是れ豐葦原の瑞穗の國で、米を喰ふて生きて居りながら、其の米を穫つた跡の藁は、實にハヤ殘酷な取扱ひを受けて、野に晒されサ、馬に踏まれサ、焚物にされサ、

好い處で山小屋の屋根を葺く位が出世の方ぢや。人間の壽命を保つ程の實を熟した其の幹が、斯う云ふ成行きになるとは淺間しい。何んとかして殿上の床の上、人間の必要品に製造して、其の亡骸を吊ひたいとの願心ぢやつた。

ソコデ人間が暖を取るには薬に限るとの定見から、遂に織物を造り出すことになつて、是れを由多加織と命名したぢや。其の兄が死亡したので、弟の幾久松が兄を欽慕する處から、一つの碑を建てたいと云ふて、衲に乃木閣下に篆額を願つてくれとのことぢやつたので、衲は上京の時、赤坂の邸を訪ふと、折悪しく乃木さんは不在ぢやつたから、奥さんに頼んで置いて歸つたら、後に東京の衲の道場へ宛てゝ送つてくれたので開いてみると、

「織機餘彩」

の四大文字が、墨痕鮮かに書かれてあつた。衲は歸西の上寺西に渡すと、寺西も非常に喜んでサ、何かお禮をと云ふから、

「他の物は失禮になるから、由多加織を送れ。」

と云ふて、衲から由多加織を將軍の許へ送つて置いた。其の後衲が上京して乃木邸を訪ふたら將軍は、

「和尚から何か來て居るが、何の爲めに送れたのか分らぬから、まだ封を切らずにある。」

と云はれた。ソコデ衲が寺西の話をしたので、それではと早速解いて見て、

「是れは結構なものぢや、早速敷かうよ。餘人なら斷るが、和尚ぢや左樣も行かんでのう。」

と云つて笑はれた。

一四二　是れには一番辟易したよ

衲の墨蹟が何んの呪か——墨蹟屋さんと商賣換——出先や一寸書を合せると十萬餘——伊勢の小僧——眠ると腋の下を探る——序の時では不可ません——小僧が衲の睾丸をグッと握つて——コラ〳〵何をする——和讃を書いて貰ふ迄は放さぬ

衲の墨蹟が何んのお呪になるのか知らぬが、近頃は彼方でも此方でも書け〳〵と云ふので、マア〳〵此の頃は墨蹟屋さんと商賣換ぢや。此の間も墨蹟申込帳を調べた小僧の云ふのでは、臺帳にある丈が八萬九千六百と云ふ數ぢや。其の他出先や、一寸書きを合せると、十萬餘にもならうかい。山岡も隨分書いたが衲には及ばぬ。衲の處への注文は米國や布哇、それから佛國、支那、滿州、朝鮮。又た内地は何處其處の差別はない、隨分諸方から申込んで來らぢや。それに處々の會で書かせらるるのも大分ある。一番困つたのは伊勢ぢや。

伊勢の萬年會でサ。衲が東京から夜行で着いて、直に入室參禪ぢや。それから午後一時から二時まで、一寸の間晝寢をするつもりで居ると、中村と云ふ青年が來て、「坐禪和讃」を書いてくれと云ふぢや。衲が、

「よし〳〵。」

と云ふと、中村は衲の傍へ來てサ、

「墨を磨ります。」

と云ふから、

「オ、さうか〳〵。」

と云ひながら、衲が寢るとサ、此奴胸に一物有つたから、衲が疲れて眠ると、直に衲の腋の下を擽るぢや。どうも煩いので、

「コリヤ、何をするぢや。もう好いから彼方へ行け。」

と云ふと、

「老師、お眼が覺めましたか。覺めたら「坐禪和讃」を書いて下さい。」

と云ふぢや。

「それは揮毫の時序に書く。」

と云ふて、衲が再び眠らうすると、彼は、

「それは不可ません。序の時では皆々がそんな長いものは不可ぬと云ふに極つてますから、皆々には祕密で今ま書いて下さい。」

と强請うぢや。衲も眠いからサ、

「よし〳〵、書いてやるが、今日だけは許してくれ。」

と云ふて、又た眠つたぢや。スルト眠つてをる中に、衲が屁を放つたとみえるぢや。中村の小僧の奴、矢庭に衲の睾丸をグツと握つてサ、

「屁の子を捉へた〳〵。」

と、グツクと引つ張るぢや。

「コラ〳〵何をする、放せ〳〵。」

と云ふたが放さぬ。

「イヤ放しません。書いて下さるまでは如何しても放しません。」

と、握つてゐられたには閉口した。ソレデ詮方なしに大畫箋紙に二百八十七と云ふ文字を書か

されて仕舞ふたが、是れには一番辟易したよ。

一四三　明治天皇御追悼接心

明治天皇の崩御――孝明天皇の崩御――羅山和尚を失つた年――國民の精神が一つになつて――途路一團の鐵――御生前に無字の一則をも――何れにか神去りませしぞ――御追悼接心は南天下のみ――無字を透過した者百餘名――御坐處に眞の御供が出來た

明治四十五年七月三十日サ。今ま憶ひ出すも實にハヤ涙の種ぢやが、明治大帝は遂に神去りまして、世は諒闇の悲哀に包まれたぢや。孝明天皇様は納が二十九の歳に御崩御になられたが、其の年には納は又た久留米の梅林で、恩師臨川亭羅山和尚をも失ふたぢや。上には御一人の崩御に接し、近くは恩師の遷化に逢ふてサ、其の年の雨安居には追悼接心をやつた。然るに又た茲に明治の帝を奉葬するとはサ。納は丁度三代の御世に接して居るぢや。

ソコデ明治天皇が御崩御になつた時の雨安居にも、大帝陛下の御追悼接心を海清寺でやつた。御追悼と云へば、お經でもお讀み申上げることゝのみ思ふなよ。國民の精神が一つになつて、無字三昧に入つた時は途路一團の鐵ぢや。御生前に無字の一則をも奏上し得ざりしとは云へ、當月

當日より一週間の間、專念に無字を擧揚して、明治大帝の無字と一枚になれ〳〵と、大衆に垂誡したぢや。其の時の接心に參入したものは六拾餘名ぢやつた。古歌にサ、

聞くならく地獄の底に到りては
須陀も刹利も變らざりけり

と、男でないものを男と思ひ、女でないものを女と思ひサ。山ぢや、川ぢやと、ソリヤ皆な空なものよ。サー明治大帝、何れにか神去りませしぞと、日夜喚鐘は海清寺の山内に響き渡つた。明治天皇御追悼の經を讀む者はあつても、御追悼の接心をやつたのは獨り南天棒下のみぢや。全國到る處の南天下の會では、居士大姉が擧つて御追悼接心をした。此の接心で無字を透過したものが全體で百餘名あるぞ。實にハヤ明治天皇の御坐處へ眞の御供が出來たと云ふものぢや。地下の山岡も喜んでぢやわい。

一四四　時候遲れの奈良晒一疋

乃木邸から使――乃木夫人の手紙――晒一疋に白水引が掛つて――妙なことがあるものぢや――後に形見と分つた――來年の役にしか立たぬ――それで襲裝を遣つた――夫人の信仰は十一面觀世音――楠公の夫人に似る

衲が神田の道場へ上つて、例の通り居士や大姉等の入室を聞いて居ると、あれは諒闇の八月二十八日ぢやつた。乃木邸から使が來て是れを置いて行きましたと云ふ。それは丁度衲が入室中ぢやつたので、取次が

「お返事は。」

と聞くと、使の者は、

「別段お返事には及ばぬでせう。只だお屆け申して參れとのことでした。」

と、使は歸つたと云ふので、衲が包を開けてみると、中には乃木夫人靜子さんからの手紙と、晒が一疋白水引で括つてある。妙なこともあるものぢや。乃木さんは禮儀なぞは中々正しい人ぢやから、普通の贈物に白水引を掛けるとは變ぢやや。併し彼の人のことぢや、諒闇の今日であるから、わざと白の水引にしたのぢやらうと思ひながら、手紙を披いてみると、

一、奈良晒　一疋

右は時候おくれの品物に候へ共、乃木より差上候樣申上げられ候まゝ、今使にて御送り申上候

あら〳〵かしこ

八月二十八日

南天老大師棒樣　御許に

とあつた。是れは後には形見と云ふことが知れたがサ。其の時は妙な氣がしたよ。實際時候遲れなものぢや。來年の役にしか立たぬと思ふた。併し今は遺品ぢや。それで袈裟を造つたよ。奥さんの靜子さんは坐禪も少しはやつたが、「十句觀音經」を能く覺えて、十一面觀世音を信仰せられた。そこらは楠公の夫人に似た處があつたよ。

一四五　衲が聲を呑んで萬歳を唱へた意は

一度は驚いたが併し能く遺つた——山岡も生きてをつたら乃木と共々——吊文の電報——將軍の外に知己はない——乃木の心事を知るは——南天下の那一人は天下那一人——由多加織の上——遊就館に陳列——偉人の血の跡——宗門赤誠の者は誰れか

明治天皇の御靈柩が桃山に納まる九月の十四日、衲は御奉送の爲めに參列して居ると、號外々々の聲が喧しい。何事かと侍者に買はせて讀んでみると、乃木大將夫妻の殉死ぢや。衲も一度は驚いたがサ、併し能く遺つた、乃木ぢや〳〵。山岡も生きてをつたら、乃木共々腹をするぢやらう。嗚呼能くやつてくれた、と思はず涙が零れた。ソコデ直に電報を乃木の靈前に打した。

ノギタイシヤウカクカゴフウフ、ジユンシトハ、サスガノギタイシヤウカクカナリ、コノナンテンボウモ、ナミダナガラニ、バンザイヲトノウ、バンザイ、バンザイ

納が聲を呑んで萬歳を唱へた意は、將軍の外に知己はない。抑乃木の殉死を議論するは末の末ぢや。誰れか乃木を知る。子を見ること親に如かずぢや。乃木の心事は、明治天皇陛下が御存知の外には、只だ此の南天棒が知るのみぢや。天下廣しと雖も乃木の知己はないわい。納の電報は百萬語を並べた哀悼の辭も及ばぬぞ。噫南天棒下の那一人は天下の那一人を現したぢや。

乃木大將は前日の十二日に靜子夫人と共に參内してお通夜をし、十三日に鑽宮に最後の御拜をして、東御車寄から退出せられて歸邸すると、齊戒沐浴して二階の一室に入り、明治天皇の御眞影に眞榊を供へて、

現世を神去りませし大君の
御あと慕ひて我は行くなり

と、辭世や遺書を認め、後來のこと一切を處理して大將の正服を着し、御靈轜御出發の第一號砲の轟くを合圖に、午後八時、夫妻共に自刄せられたのぢや。大將は軍刀を以つて割腹し、夫人も亦た左胸部の心臓を刺して、毫末も取亂さなかつた。

此の二階の一室に敷いてあつた敷物が、即ち前に云ふた納が寺西の處から受取つて、大將の處へ贈つた由多加織ぢや。大將は此の敷物を國產ぢやと云ふて、喜んでサ、平素二階に敷いて人にも褒めて居つた。誠忠の血汐は流れて、此の國產の藁の敷物を染出したぢや。今は其れが九段の遊就館に陳列されてある。偉人の血の跡ぢや、仇に見ては濟まぬぞ。此の下敷の切を二つ納に送られたから、一つは寺西に遣つたぢや。「士は己を知る者の爲めに死す」と。乃木大將は己を知し召される帝に殉じたのぢや。禪界の中、乃木大將に並ぶ宗門赤誠の者は夫れ誰れか。

一四六　納は乃木を葬りに來たのぢや

皆な沈痛の色――空前絶後の葬儀――棺前の回向――「露刄劍」の一句――僧侶で會葬したのは納だけ――墓地の埋棺式――休憩所でお茶なお飲み下さい――休憩に來た奴は勝手に休め――師弟が色身異界の一刹那――一日中一度も休まぬ――お役目に來た者もあつた――國民大吊祭會の香語

乃木大將の葬儀は九月十八日に青山齋場で行はれた。納は海禪寺の秀嶽と道林寺の亮卿とを連れて乃木邸に到つたが、門の内外へ掛けての雜踏と云ふたら、名狀すべくもない。そして皆な沈痛の色を帶びて居る。皇族方から朝野の名士の吊詞や名刺は、白木の臺に山をなして居つた。

是れが一箇の伯爵、一介の武辨たる大將の葬儀とは、實に空前絶後ぢやと思ふた。

衲は棺前に進んで「三歸戒」を授け、一句を擧揚した。

「趙州露刃劍、寒霜光り焰焰、纔かに是れ如何んと擬すれば、身を分つて兩斷と成る。

別別

乃木の兩靈に生死莫く。南天の一棒潛すに處無し。喝。」

と。燒香が終つて青山齋場に到つた。場内は人を以つて埋つて居る。午後三時三十五分に靈柩は齋場に着いて、諸般の式が神式に依つて行はれた。天皇陛下の勅使、皇后陛下の御使、東宮殿下の御使より各皇族方を始め、内外各顯官が夫々玉串を捧げた。僧侶で此の式に列したのは、衲と隨行の者の外はなかつた。式を畢つたのは六時頃ぢやつたらう。

それから靈柩は青山齋場を出て、六時五十頃分に乃木家の墓地に着いた。多數の會葬者は初めの間こそ無事に起立して居つたが、段々足が疲れて來たのか彼方の木の根、此方の石の上に腰を下す者も出て來た。衲は一心に隨行の者等と「舍利文」を讀んで居ると、小僧が便事に行くと云ふから、引磬を取つてチン〳〵打ちながら、續けて「舍利文」を讀んだ。スルト係の者が、

「まだ埋棺までには時間がありますから、其の間休憩所でお休みになつて、お茶でもお飲み下

さい。」

と云ふたとかで、それを隨行の者が衲の袖を引つ張つて告げたので、衲は大喝して。

「馬鹿ッ。今日は衲は乃木を葬りに來たのぢや、休息に來たのではない。休息に來た奴は勝手に休め、衲は乃木を送つて仕舞ふまでは休まぬ。」

と云ひ退け、親族知己等が一握の土を入れる時、衲も一塊の土を驚けた。是れ師弟が色身の幽冥異境の一刹那ぢや。

全く埋棺を終つたのは夜の十時頃かサ。衲は朝の十時から、一度も便も垂れねば石にも凭れなんだがサ、大分中には葬送のお役目に來たものもあつたやうぢや。衲の「乃木を葬りに來たのぢや、休息に來たのぢやない」には、大分へこまされた人があつたとサ。氣の毒ぢやつた。

其の後、十一月三日に田中舍身居士等の主唱で、乃木大將の國民大吊祭會が芝公園で催されて

それにも衲は臨んだ。其の時の衲の香語には、

「携へ來る六尺南天の棒、倒に用る横に拈じて遍界腥し。今日の法筵何を以つてか薦めん、目前の紅葉雙靈に呈す。

別別

偉なる哉乃木大將の腹、乃木以前に乃木無く、乃木以昆に乃木無し、嗚呼贊嘆して餘馨り有り。

喝。」

とやつた。

一四七　乃木大將の遺品と夫妻の位牌

遺品が小包として――其の目錄――旅順で常用の軍帽――寺西家の乃木神社――道林寺は入禪最初の道場――道林寺に位牌を安置――衲の木像を造らう――元學習院教授中島智達居士――衲の安牌香語――無二の忠臣大千に徹す――三四百年の後には

衲が東京の雪山會を終つて、神戸の達磨會の發會に行かうとした時、一箇の小包が來たから、何んぢやと思ふたら、乃木家の遺品ぢやつた。衲は前に靜子夫人から乃木大將の旨と有つて奈良晒一疋を送られ、それが唯一の遺品として裂裝を造つたがサ、今ま又た小包が見るまゝ、其の案内書に、

拜啓。愈々御清福奉賀候。陳者別記目錄の品は、故人の遺物に御座候間、兼ての御緣に因み、乍粗末奉呈候。御受納被成下候得者、最も幸甚之至りに御座候。

大正元年十一月

南天棒中原鄧州殿

乃木家親戚總代　玉木正之

と。それに別紙の目錄が入つて居た。

目錄

一、軍帽　希典常用　壹個

一、忠魂碑書　貳個

一、外ニ故人夫妻寫眞　自双當日撮影大形分。　貳個

右故乃木希典遺品

親戚總代　玉木正之

南天棒中原鄧州殿

とあつた。此の軍帽は旅順で常用して居つたものぢやさうな。それを伊州の寺西が、由多加織の鎭守に乃木神社を建てゝ、其の神體とするから是非に呉れと望まれたので、「織機餘彩」の篆額に因み、軍帽は寺西家へ讓つて鎭守の神體とした。

それから乃木夫妻の位牌ぢやが、將軍は平素、道林寺は自分が入禪最初の道場だから、何か祖先の位牌を設けて、先亡の冥福を祈りたいと云はれたが、將軍が彼のやうな殉死をしやうとも思はなかつたから、そんなことも極めなかつた。併し將軍が云はれたことには、道林寺に自分の位牌を安置し、又た同寺に衲や山岡の木像があつたが、それが明治四十四年の火災で燒けたので、山岡の木像は更に山岡家から寄進になつたが、衲の木像がないから、それをも造らうとのことぢやつた。

ソコデ將軍の知人である元學習院教授の中島芳城智達居士が、親戚一同の贊意を得て、乃木家の位牌を道林寺に安置した。それは大正二年七月十八日ぢやつた。牌面の文字は智達居士の筆になつたものぢや。其の時の衲の安牌香語は斯うぢや。

「名四域に轟く乃木なる哉、無二の忠臣大千に徹す。今日の安牌何んの處意ぞ、南天拈出す活氣の禪。

別別

大冶の精金變色無し。喝。」

と。ぢやから乃木大將の位牌は他處にはない。大將が佛道因縁の地は道林寺で、師と云へば衲ぢや。併しサ、三四百年の後になると、盲目の博士達が集つて、こんなことは無いの有るのと云ふぢやらう。

一四八　衲のことを手紙鄧州と綽名

乃木さんの手紙や詩偈――手紙は殘らず保存――三十餘貫の手紙――巨瓶に入れて一處に葬る――來た手紙には直に返事――衲の手紙は一つの提唱――朝は三時から――白隱も隨分書いた――後日見られぬ樣な手紙を書くな

衲の處には乃木さんと往復の手紙や詩偈のやうなものが澤山あつたが、誰れが持ち出したか、皆な散つて仕舞ふた。衲は手紙は何處から來たのでもチヤンと保存してあるがサ、其の中から拔き取つたものとみえる。惡い奴があるぢや。高名な人の手紙は、吳れと云はれて、隨分吳れてもやつた。山岡や伊藤や兒玉や乃木や寺内や、其の他にも軍人ぢやの宗教家ぢやの博士ぢやの、種々な手紙が澤山有るぢや。此の間も全體を調べてみたら、三十貫餘り有ると云ふから、是れから以後、何の位あるかサ。それは衲が死んだ時、巨瓶に入れて一處に葬つて貰ひたい。

他から來た手紙に對して、衲は返書を怠るのが嫌ひぢやから。直に返事を出す、回向する役の坊主の中には、隨分回向を怠る奴がある。手紙の返事は回向ぢや。死んだ者にするばかりが回向

ぢやないぞ。ソレデ世間では衲のことを手紙鄧州と綽名して居る。衲の手紙は一の提唱ぢや。衲は朝は三時に起きて手紙を書くぢや。手紙には長短がある。白隱も隨分手紙は能く書いたよ　手紙を書くなら、一言一句でも佛意祖意に叶ふやうな手紙を書け。後日見られぬやうな手紙は書くな。手紙は其の人の精神を表すものぢや。油斷はなりませんぞ。

一四九　達磨の姿を見た樣な事を吐す

達磨の注文――南天達磨――梟のやうな蛸のやうな――達磨のやうぢやない――達磨のいろ〳〵――何れが眞の達磨か――後向き達磨の讃――達磨と決る相はない――神戸の達磨會――「胡子無鬚」の則

衲に畫を描けと云ふぢや。時々妙な注文があつて、達磨を描いて臭れいと云ふて來る、達磨ぢや　睾丸は握られなんだがサ、描け〳〵と責められるので、マア描いたぢや。處がサ、さよ〳〵な評ぢや。梟のやうなとも云へばサ、蛸のやうなとも云ふ。さうかと思ふと、コリヤどうも達磨のやうぢやないなぞとも云ふぢや。面白いぞ。皆な達磨の姿を見て來たやうなことを吐すがサ、どこに御本尊の達磨を見た者があるぞい。

達磨の畫はサ、古來から中々澤山あるよ。一寸思出す儘に數へた處でも「隻履の達磨」、「葦の

達磨」、「齒缺の達磨」、「問答達磨」、「面壁達磨」、「坐禪達磨」、「衣被り達磨」、「片岡達磨」、「鬚の達磨」、それから煙草屋や經師屋の「看板達磨」、「美人達磨」、「棚の達磨」、「緣日吊し達磨」、又た子供の好きな「起上り小法師」も達磨ぢや。サー何れが眞の達磨かサ。衲が後向きの達磨を描いてサ、それに讃をしたから能く看るが好い。

「面壁の祖師の姿は山城の八幡の畑の瓜か茄子か。」

と。元來達磨は無相ぢや。無相ぢやから起上り小法師にもなるぞ。達磨と決る相はない。神戸でも其の無相の相を修行したいと云ふて、大日本禪學專門道場達磨會を興してサ、衲は「無門關」の「胡子無鬚」の則を舉した　それは大正元年十一月十六日ぢやつた。

一五〇　何んでも其の職業々々が禪ぢや

坐禪も下手をすると厭世的――坐禪は日用底――讀めぬお經を無理に讀むには及ばぬ――商人のお經は大福帳――俗人が坊主の眞似はいらぬこと――處世禪の要術――禪は火や水の如く一日も缺かされぬ

坐禪も下手をすると厭世的になる。邪師に就くと、とんだ間違を起すぞ。坐禪は坊主の眞似や佛の姿振をするものと心得違ひをする者がある。坐禪は日用底ぢや。それを勘違ひをしてサ、酒屋

でも豆腐屋でも軍人でも、坊主のやうに木切れか棒切れでも手に持つたり腰に下げなきや、お悟りも開けぬやうに思ふて居る。それは間違も間違も大間違ぢや。醫者には醫者の禪がありサ、軍人には軍人の禪があり、商人には商人の禪があるぢや。何も讀めぬお經を無理に讀むには及ばぬ。朝晩先祖への回向さへ出來れば好い。マア居士大姉等は「心經」に「消災呪」、それから「大悲呪」と「施餓鬼」とを讀めば好い。それに「十句經」とか「四弘の誓願」とか、古人の遺誡とか、長い經では「觀音經」位で好い。

商人のお經は大福帳か。商人は毎日大福帳を轉讀して坐禪すりや商賣繁昌ぢや。軍人は御敕諭がお經ぢや。それを讀んで坐禪すればサ、忠義も國防も立つぢや。俗人が坊主の眞似は要らぬことぢや。併し朝夕の日課や宗旨家を請じた講座の前後には、それ〴〵の儀式に依つて回向もし、讀經もするが當然ぢや。

飯田も岡田も醫者禪をやつた。永い間辛酸刻苦してサ、畫は病家を廻り、朝と夜分とに入室ぢや幾晩も寢ない時があつたが、遂に難透を透過して今は那一人底の活動をするぢや。何んでも其の職業々々が禪ぢや。外にはない、所謂處世の要術ぢや。坊主は坊主禪をやつて世人を教化するが好い。觀音の三十三應身のやうにサ、龕に入り細に入つて遣れ。又た軍人は軍人、耶蘇は耶蘇、

大臣は大臣、商人は商人、其他傘張り、羅字のすけかへ、足駄の齒入れ、雪駄直し、皆な其の職々の禪をやるが好い。禪は火や水の如く、人間には一日も缺くことの出來ぬ代物ぢや。

一五一　無字は四十五則妾の髷も四十五束

女髮結の初發心の動機――女の髷の數は四十五通り――なぜ髮らにや恰好が取れぬか分らぬ――妾は坐禪をする氣になりました――髮を結つたり解いたりする間に――髷と共に四十五則――無字の總語

衲の處へ女髮結が入室に來るぢや。それがサ、

「無字は四十五則、妾の髷も四十五束。」

と云ふぢや。ソコデ衲が、

「髷の四十五束とは何んぢや。」

と尋ねるとサ、彼女の語つた初發心の動機と云ふが面白いぢや。

此の女髮結のお得意さんは、長いのは何十年も續いてをるさうな。ソレデ女と云ふものは、少い時から娘、それからお嫁さんになり、お母さんになり、お婆さんになる。それに從れて髮もお稚兒髷から次第々々に結ひ變へ〴〵、年が寄つて白髮になる迄の髷の數は、實に四十五通りある

ぢやとサ。それがサ、段々年の加はると共に、何んで結ひ變へなきや恰好が取れぬかゞ女髪結には眞箇に解らなかつたので、それを究める爲めに、

「妾は坐禪をする氣になりました。」

と云ふぢや。世上の婦人方はサ、子供の時から髪を結ひ、結つては解き、解いては結ふ。此の間に光陰の過ぎ行くのに氣が付きさうなものぢやが、只だ髪飾りだけを知つて、髷の變化を知らぬ。併し女髪結は髷と共にとう〳〵四十五則を透つたぢや。志さへあれは何を身過世過にして居つても、いつかは必らず成就するものぢや。雞印大の睾丸を下げた男が女に劣るとは、イヤハヤ情けないぞ。無字の總語の中に、

「丹竈功成つて氣虹に似たり、丹竈を掀翻して無功に到る。雲劍客を遮る三千里、水翟塘を隔つ十二峰。」

の二句がある。能く心して看るが好いぞ。

一五二　誠無いとはそりや嘘よ

云ふも云はぬも七十五日――空に走つたり理窟に入る――辛抱の抱を變へる――

傾城の誠――赤ン坊の手を取つて歩かせる樣――魚の旨い肉は師家――骨ばかり

學人にしやぶらせる――白隱の印可六十五人――東嶽和尚の檢定では三人――南天の手元は弛めぬ

どうも日本人の癖は飽き易いことと物忘れぢや。云ふも云はぬも七十五日ぢやなぞと、所謂健忘性を自慢にして居る。それも眞正に修行が濟んでサ、今のことを今忘れる底なら未だしもぢやが、さつぢやない。無字の公案を貰ふても、直に止めて仕舞ふ。眞の勇猛心がないぢや。堂内でムームー唸つて居つても無字が知れぬ。サー無字は知れるが正當が知れぬ。正當が空に走つたり理窟に入つたりして仕舞ふ。力氣んで怒鳴つても知れぬ。牛の鳴くやうにやつても知れぬ。入室して呈してみてもサ、駄目ぢやから衲が透さぬ。スルト二月やそこいらはやるが、とう〳〵辛抱の「抱」を變へて「飽」と云ふことになつて止めて仕舞ふ。どうも飽き易い、物に徹すると云ふことが出來ぬ。或男が、

「傾城には誠がない。」

と云ふたら、相手の女郎が、

「そりや違ひます。

傾城に誠無いとはそりや嘘よ

誠出るまで通はんせ

ぢやわいなア。」

とやつたと云ふ。傾城買ひなぞとは違ふがサ、何んでも徹底した遣り方で無うてはならぬぞ。

斯のやうに今の禪者の根機は下劣ぢやから、師家の方でも矢ッ張り爲人と思ふてからに、大いに老婆心を起してサ、赤ン坊の手を取つて歩かせるやうにやるので、とう〳〵鑄型に嵌込んで仕舞ふぢや。禪は教へたでは何んにもならぬ。教へられては御本人さんは何が何やら、公案に妙味が出ぬぢや。魚の旨い肉は師家が喰ふて、骨ばかり學人にしやぶらせるやうなものぢや。

併しサ、師家も歳を取ると、自然と老婆が出るものぢや。白隱も七十を過ぎての歳の臘八に、入證したものが六十五名もあつたとサ。それで東嶺和尚が餘り多人數の入證ぢやからと云ふので別に一々檢定すると、眞に入證したものは三名しかなかつたと云ふことぢや。眞證の者は何時も實に少いテ。衲もハヤ是れ七十歳を超した老齢ぢや。やゝともすると婆心が出たがるがサ。まだ〳〵南天の手元は弛めぬぞ。亂りに印可はやらぬわい。

一五三　一喝に桂の巨頭を打ち碎いた

今ま一際腹が練れて居ると——衲にも二三回道を訪ふた——大石正巳の耳語——活龍何れの處にか化す——威を振ふて大喝——障子がビリ〳〵——泣いてゐた女の目が光る——水戸黄門の一喝——雪潭の一喝

桂が死んだぢや。彼れも小利巧なものぢやつた、今ま一際腹が練れて居ると好かつたが是非がない。大臣でもやる奴等は皆あんな立場になるものぢや。山口縣の男ぢやて、衲にも二三回道を訪ふたことがあるから、丁度雪山會で上京中ぢやつたを幸ひ、「三歸戒」を授けてやらうと、十月十三日(大正二年)ぢやつたが、亮卿を伴ふて桂邸へ行つた。門前中々の混雜ぢや。併し乃木に比べると十分の一にも行かぬぢや。

奥の一間で休息してサ、やがて佛間に入つた。親戚やら舊知やらが大勢集つて居る。增上寺あたりの坊マサも來てぢやつた。衲が「三歸戒」を授けうと思ふと、大石(正巳)が來て耳元で、

「どうか棺前の一句を手向けてやつてくれ。」

と云ふので、衲は「三歸戒」を授けた後、轉身の一句を斯うやつた。

「此を去つて活龍何れの處にか化す。人に逼る毒氣砒礪に比す。作家謂を休めて消息無し、一棒の南天薫香に代ゆ。

別別

扇子跨跳して三十三天に上り、帝釋の鼻孔を築著す。東海の鯉魚打すること一棒すれば、雨盆を傾くるに似たり、喝ッ！。」

と、威を振ふて大喝したらサ、障子がビリ〳〵云ふた。居合はせ人々は度膽を抜かれたとみえて、シク〳〵泣いてゐた女連は一時にハッと聲を呑んで、泣いた目が急に光つて來た。別の室で「どゑらい聲ぢや。」と云ふて居るのが聞える。水戸の黄門は一喝で酒を零したと云ふ。雪潭の一喝は狐狸を平げたぢや。今日南天棒の一喝は桂の巨頭を打ち碎いたぞ。

一五四　納が一生一代の大字

乃木大將忠魂碑――碑面の文字の揮毫――幅六尺に長二十間の絹地――墨汁は四斗――筆の長サは五尺三寸――酒が足らぬのでまだ〳〵――氣合を計る――まだ〳〵と酒三升――侍者に筆先を絞らせる――筆力餘って四邊は墨だらけ――乃の字は右の足で蹴って剏ねる――一尺四方の陶印の落款

神戸市長の鹿島秀麿なぞが主唱で、乃木大將の忠魂碑を長田村の鵜公園地に建設するので、納に其の碑面の文字を書けと云ふぢやないか。幅が六尺で長さが二十尺の絹地に、「乃木大將忠魂碑」

の七字を書くぢや。墨汁は東京の大國照生さんが贈つてくれたのが四斗程ぢやつた。それから筆はサ、寺西幾久松が寄贈した藁で造つた豐鳩筆で、全體の長さが五尺三寸ぢや。

是れを書く場所は海清寺の廣間にした。丁度極月の二十七日ぢやつた。是非今日は書けと云ふので、發起人等も立合つたぢや。壹斗入りの摺鉢へ、用意の墨汁を四斗樽から移してサ、廣間の方では準備が出來たと云ふて來たが、納は酒が足らぬので、

「まだ〳〵。」

と、グイとやりながら氣合を計つて居つた。午後二時頃になると、頻りに早く書け〳〵と迫つて來る、納は矢ッ張り

「まだ〳〵。」

と、盃を手にしてをつた。やがて三升餘の酒を飲んで仕舞ふと、

「サー書かう。」

と、盃を捨てゝ立上つた。ソコデ被布を脱ぎ捨て、水色の細紐で襷を十文字に綾取つてサ、今の大筆を兩手に取り、稻先だけでも一尺五寸五分ある奴をザブッと摺鉢に入れ、滴る計りに汁を含せて、そいつを侍者に絞らせ、スーと深く息を吸ひ込んで、ヤッと一喝。筆を素絹の上にサッ

〳〵と運ばせて行く。其の筆力餘つて飛ッ汁が、侍者や居合す人々の顏を眞黑にした。まるで煙突の掃除ぢや。スーと引いた乃木の「乃」の字の刎は、右の足でスパッと蹴つた。たまるものか、團子のやうな墨玉が飛んで、天井板に炭團を印したぢや。

七字を書き終ると、筆を拄杖に代へて、

「將軍以つて瞑す可し。」

と大喝してサ、二百三高地の土を取つて大阪の廢兵院で造つた陶印一尺四方の落款を侍者に捺させた。是れは納が一代の大字ぢや。是れに要した墨は四斗、酒は一斗ぢやつた。此の時は書家等も見物に來たが、足で蹴つて書く字は初めてぢやと云合つて居つたさうぢや。

一五五　字を書くに息を次いでは駄目

大字を書くには物を云はぬ——一字は一息——書家市川米庵——神風樓の衝立の「龍」の一字——豐後太夫の批難——字が死んで居る——米庵の詰問——念が切れて居るので字にならぬ——よしんば墨が續かなくとも

大字を書くのに、なぜ物を云はぬかと云へばサ、一字を書き終る間は、一息ぢや無ッては字は死んで仕舞ふぢや。ソレデ滿つるまで氣を養ふて、さて滿ちた氣は洩さず、一氣呵成に書くぢや。

矢ッ張り腹で書かなくては字は死ぬよ。

書家の市川米庵が、嘗つて横濱の神風樓の衝立へ「龍」の一字を書いたら、淨瑠璃語りの豐後太夫が見て笑つて、

「アヽ此の「龍」は氣の毒ぢやが死んで居るわい、」

と云ふた。それを聞いた米庵は、

「苟くも天下の書家たる此の米庵の書いた字が、淨瑠璃語り風情に批難されたとあつては名折れぢや。」

と、大いに立腹してからに、豐後太夫に逢ふてサ、

「何んで己の書いた「龍」の字が死んでをると云ふのぢや。」

と詰問すると、太夫の云ふのに、

「彼の「龍」の字は、念が切れて居るから字になつちよらぬ。終の點は墨が續いである。私の方の淨瑠璃でも、臺詞なり地の文なり、一節一段の切目へ來ぬ中に、湯を飲んだり聲を次いだりすると、聽く者に感動を與へぬ。そんな時には聲が涸れても聲を次がぬが淨瑠璃の祕訣ぢや。字も其の通りで、よしんば墨が續かなくとも、其の儘點を一氣に打たねば字にはならぬ。」

と。是れを聞いて流石の米庵も恐れ入つたと云ふことぢや。何んでも事は同じぢや。其の妙處に達するのは中々容易ぢやない。何事も正念相續して一氣にやるが好い。

一五六　盜坊を怖れる樣ぢや禪坊主とは云はれぬ

永源寺へ盜坊――何時でも戸締りをせぬ――盜坊は油斷から來る――一度盜坊に見舞はれた――其奴の顏を睨むとブル〳〵顫へ出す――寒けりや臺所の酒を飲め――御馳走樣になりましたと禮――四年の後眞人間になつて入室

此の間新聞を見ると、江州の永源寺へ盜坊が入つてサ、和尙の在金と金緣眼鏡を失敬すると云つて持つて行つたさうぢや。新聞の云ふことぢやから、皆な信ずる譯には行かぬがサ、衲なぞは法財は大切に貯へても、世財は貯へぬ。ぢやから何時でも戸の締をしたことがない。盜坊に入られたと云ふこともないがサ、時には見舞に來んでもないやうぢや。

衲が道林寺に居つた頃、一度盜坊がやつて來たぢや。どつこも締がないから入り好いぢや。夜の二時頃ぢやつたらう。顏を包んだ大兵の男が、居間の襖の間からヌツと面を出した。衲は其の時坐禪をして居つたが、是りや盜坊ぢやなと思ふたから、グツと其奴の面を睨むと、盜坊の奴めブル〳〵と顫へ出した、ソコデ衲が、

「貴樣は御苦勞樣な奴ぢやのう、此の夜夜中にサ。何んぢや、ブル〳〵顫へてるぢやないか。寒けりや臺所に酒があるぢやらうから飲んで行くが好い。靜かにせい、雲水等が疲れて寢て居るから、眼を覺さすな。」

と云ふと、盜坊先生、

「ハイ。」

と、臺所の方へ行つたが、やがて歸つて來て、

「どうも御馳走樣になりました。」

と、禮を云つて出て行つた。後で見りや一升の酒が一雫も殘らず無くなつて居つた。處がサ、其奴が四年經つて眞人間になつて衲の處へ入室に來たぢや。

人々是れサ、膝下さへしつかりしてをれば、戸締りしなくとも盜坊は來ぬものぢや。盜坊と云ふ奴は油斷から來る。いくら心張棒を丈夫にしても、錠前を嚴重にしても、主人の心に油斷があれば、屹度盜坊はお見えになるぞ。禪坊主が盜坊に驚くやうぢや糞の役にも立たぬわい。

一五七　百五十二歲と書いたのは一枚